297-79
1200501366549
7
79

航海練習所要覽

（自昭和十一年十月十一日
至昭和十二年十月十日）

航海練習所

始

297
79

航海練習所要覽

（自昭和十一年十月十一日
至昭和十二年十月十日）

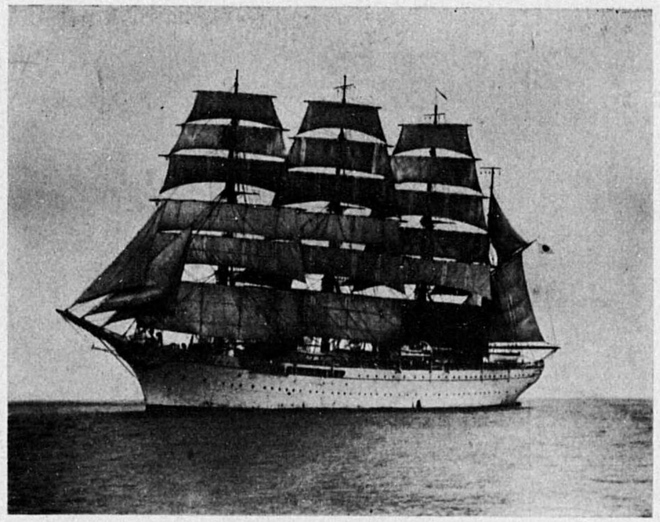
發行所寄贈本

目次

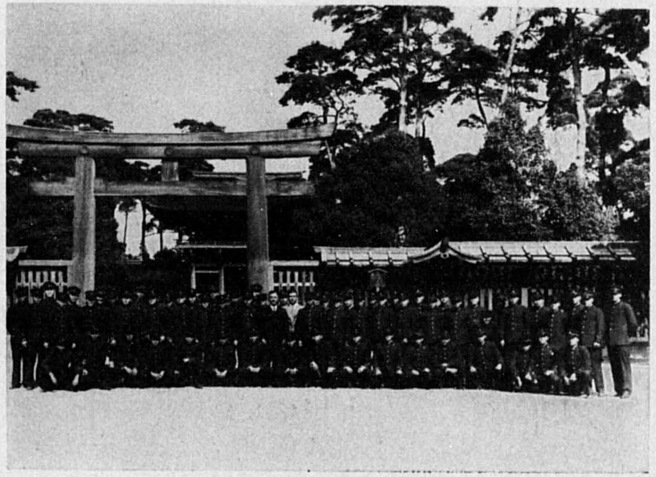
一、一般記事……一
（一）沿革……一
（二）法規……四
(1) 航海練習所官制……四
(2) 航海練習所規程……五
(3) 航海練習所官制第一條ニ依ル指定學校……六
(4) 航海練習所長職務規程……七
(5) 航海練習所規則……八
(6) 航海練習所練習船々則……二〇
(7) 航海練習所練習船乘組傭人被服規程……二一

(8) 練習船乗組員航海日當及食卓料支給ノ件……五一
(三) 練習船……五三
(1) 練習船要目……五三
(2) 練習船航海狀況……五四
(四) 職員……五八
(五) 生徒……六一
(1) 入所生徒學校別表……六一
(2) 生徒府縣別表……六三
(3) 生徒氏名……六四
(六) 修了者……六九
(1) 修了者府縣別表……六九
(2) 修了者氏名……七〇
二、本年度記事……九九
(一) 練習船ノ動靜……九九

(1) 航海統計……九九
(2) 航海記事……一〇〇
(3) 見學並講演……一一一
(二) 人事異動其他……一一六
(三) 雜錄……一一九
(1) 教授方法ト實習狀況……一二四



丸本日ノ中走帆



日本丸乘組生徒明治神宮參拜

帆走中ノ海王丸

加奈陀プリンス・ルパート港ニ於ケル
邦人漁船隊ノ海王丸入港歡迎

航海練習所要覽

一、一般記事

(一) 沿革

本所創立當時ノ我邦ニ於ケル商船學校ハ東京及神戸ノ兩高等商船學校並ニ北海道廳立函館商船學校（昭和十年三月廢止）富山縣立商船學校、三重縣立鳥羽商船學校、島根縣立商船水產學校（昭和十一年三月航海科廢止）岡山縣兒島商船學校、廣島縣立商船學校、山口縣立大島商船學校、香川縣立粟島航海學校、愛媛縣立弓削商船學校佐賀縣立佐賀商船學校（昭和八年三月廢止）鹿兒島縣立商船水產學校（昭和七年四月鹿兒島縣立商船學校ト改稱）及大阪府立高等海員學校ノ十二ノ公立商船學校ナリ

右商船學校ノ席上課程終了後練習科課程ニ於ケル生徒ノ航海練習用トシテ東京高等商船學校ニハ練習船大成丸（總噸數二四二三噸四檣バーク型補助機關付帆船）神戸高等商船學校ニハ練習船進德丸（總噸數二五一八噸四檣バーカンタイン型補助機關付帆船）ヲ夫々所有シ生徒訓練ニ好成績ヲ收メ來レリ

然ルニ前記（大阪府立高等海員學校ハ練習科制度ナキヲ以テ除ク）十一ノ公立商船學校ニ於テ從來ヨリ練習船ヲ所有シタリシ學校ハ五校ニ過ギザリキ卽チ北海道廳立函館商船學校ノ函館丸（總噸數三五八噸三檣バーカンタイン型補助機關付帆船）三重縣立鳥羽商船學校ノあまき丸（總噸數三〇〇噸三檣バーク型補助機關付帆船）廣島縣立商船學校ノ藝備丸（總噸數一九五噸ブリガンタイン型帆船）山口縣立大島商船學校ノ防長丸（總噸數二七〇噸三檣バーカンタイン型帆船）及鹿兒島縣立商船水產學校ノ霧島丸（總噸數九九七噸四檣バーカンタイン型補助機關付帆船）ナリ而モ是等練習船ハ何レモ木造ノモノニシテ最大ノモノト雖モ千噸ヲ超ヘズ殘餘ノ六校ニ於テハ民間ニ於ケル横帆裝置ノ帆船ニ依賴シ又之ヲ傭船シテ本科航海科卒業生ヲ乘船セシメ練習科ノ課程ヲ履マシムルヲ常態トセリ然ルニ此ノ間生徒ノ訓育上遺憾トスル點少ナカラズ且ツ又木造小型帆船ノタメニ屢々行衞不明等ノ悲慘事アリ卽チ香川縣立粟島航海學校依託練習船七寶丸（總噸數二六六噸ブリガンタイン型帆船）ガ明治四十三年十一月ニ又同校依託練習船西別丸（總噸數一八二噸ブリガンタイン型帆船）ガ大正十一年四月ニ行衞不明トナリ更ニ大正十四年二月ニハ前記山口縣立大島商船學校練習船防長丸ガ伊豆神津島ニテ沈沒シ前後三回ニ亘リ生徒二十九名乘組員十名ノ生命ヲ失ヒタルヲ始メトシ其他ノ民間帆船ニ於テ練習シタリシ生徒中ヨリモ又多數ノ犧牲者ヲ出セリ事情斯ノ如クナリシヲ以テ大型帆船ノ必要ハ漸次各方面ノ識者ノ痛感スル所トナレリ

文部省ニ於テモ夙ニソノ必要ヲ認メ大正十四年ヨリ公立商船學校本科航海科卒業生ノタメニ二千五百噸型練習船二隻ノ建造ヲ計畫シ之ガ實現ヲ期シタルガ偶々前記鹿兒島縣立商船水產學校練習船霧島丸ガ昭和二年三月九日伊豆下田港ヲ出帆シ銚子沖合ニテ暴風雨ニ會ヒ遂ニ行衞不明トナリ乘組員二十三名生徒三十一名ノ生靈ハ船體ト共ニ海底ノ藻屑ト化シタル悲慘事ヲ惹起セリ、コノ椿事ハ痛ク世人ノ耳目ヲ衝動シ大型練習船ノ整備ヲ絕叫セシムルニ至リ同年第五十五臨時議會ニ於テ之ニ關スル質問及公立商船學校用練習船二隻建造ノ建議提出サレ、遂ニ毎年文部省ヨリ提出シツヽアリタル練習船二隻ノ建造豫算案百八十七萬四千六百圓ハ昭和三年度同四年度ノ繼續事業トシテ議會ノ協贊ヲ經ルニ至レリ

昭和三年七月十六日右豫算ニ依リ建造スベキ練習船ノ設計調査ヲ爲シ、仕樣ヲ決定スルタメ地方商船學校實習用練習船設計調査委員會設置セラレタリ、右委員會ニテ審議ノ結果各練習船ノ大要ハ總噸數約二二五〇噸四檣バーク型鋼製帆船トシ補助機關ハデイーゼル機關速力約十一節生徒收容人員百二十名ト決定セリ、昭和三年十二月五日練習船設計圖及仕樣書ノ成案ヲ得タルヲ以テ昭和四年一月十一日練習船建造ノ注文ヲ一般競爭入札ニ付シタル結果神戸川崎造船所ニ落札セリ、仍テ練習船建造委員及現場監督ノ囑託アリ爾後其ノ監督ノ下ニ順調ニ工事進捗セリ、昭和五年一月二十七日第一船進水田中文部大臣ニ依リ日本丸ト命名セラレ更ニ二月十四日ニハ第二船進水同ジク文部大臣ニ依リ海王丸ト命名セラル、後兩船艤裝設備ハ進行シ三月三十一日日本丸ノ艤裝完了シ文部省ニ引繼ヲ了シ續イテ五月十九日海王丸完成文部省ニ引繼ヲ了セリ

是ヨリ先文部省ニ於テハ兩船ヲ管理シ公立商船學校本科航海科ヲ卒リタル者ヲシテ航海ノ練習ヲ爲サシムルタメ新ニ航海練習所設置ノ成案ヲ得、昭和五年五月二十九日勅令第百八號ヲ以テ航海練習所官制（別項參照）同年五月三十日文部省令第十五號ヲ以テ航海練習所規程（別項參照）公布セラレ玆ニ同年六月一日ヲ以テ多年ノ懸案タリシ本所ノ創立ヲ見事務所ヲ文部省構内ニ設置セラレタリ

（二）法　規

(1) 航海練習所官制

昭和五年五月二十九日
勅令第百八號

第一條　航海練習所ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ文部大臣ノ指定シタル商船學校ノ本科航海科ヲ卒リタル者ヲ入所セシメ航海ノ練習ヲ爲サシムル所トス

第二條　航海練習所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師　專任六人　奏任

技手　專任六人　判任

書記　專任二人　判任

第三條　所長ハ文部省高等官ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

所長ハ文部大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條　技師及技手ハ上官ノ命ヲ承ケ練習船ノ航海ニ關スル事ヲ掌リ兼テ航海ノ練習ヲ指導ス

第五條　書記ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附　則

本令ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

(2) 航海練習所規程

昭和五年五月三十日
文部省令第十五號

第一條　航海練習所ノ練習期間ハ一年三月以内トス

第二條　航海練習所ニ入所スルコトヲ得ル者ハ航海練習所官制第一條ニ依リ指定セラレタル商船學校ニ於テ本科航海科ヲ卒リタルモノトス

第三條　航海練習所ニ於テハ航海實習ノ外修身、國語、數學、英語、航海術、運用術、機關術、氣象學、海

運、海事法規、無線電信、船舶衞生等ヲ課スルモノトス

第四條　所長ハ航海練習所所定ノ課業ヲ了リタル者ニハ修了證書ヲ授與スヘシ

第五條　所長ハ成業ノ見込ナシト認メタル者及性行不良ナル者ニハ退所ヲ命スヘシ

第六條　生徒ハ自己ノ便宜ニ因リ退所スルコトヲ得ス但シ已ムコトヲ得サル事由ニ因リ所長ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第七條　所長ハ教育上必要ト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第八條　所長ハ航海練習所修了者ニシテ特ニ航海ニ關スル事項ヲ研究セントスルモノアルトキハ之ヲ在所セシムルコトヲ得

第九條　航海練習所ニ於テハ授業料ヲ徴收セス

附　則

本令ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

(3) 航海練習所官制第一條ニ依リ指定スル商船學校左ノ如シ

昭和五年六月二日
文部省告示第百六十六號

改正昭和七年三六號　八年五八號　一〇年五九號　一一年五五號

〔北海道廳立函館商船學校〕
富山縣立商船學校
三重縣立鳥羽商船學校
〔島根縣立商船水産學校〕
岡山縣兒島商船學校
廣島縣立商船學校
山口縣立大島商船學校
香川縣立粟島航海學校
愛媛縣立弓削商船學校
〔佐賀縣立佐賀商船學校〕
鹿兒島縣立商船學校

(4) 航海練習所長職務規程

昭和五年六月二日
文部省訓令

第一條　所長ハ判任官ノ進退ヲ具狀シ及高等官ノ進退ニ付意見ヲ具シ文部大臣ニ稟申スルコトヲ得

第二條　左ノ事項ハ所長之ヲ專行スヘシ但シ第六號及第七號ニ關シテハ處分後文部大臣ニ報告スヘシ

第一　職員ノ授業擔任及事務分擔ヲ定ムルコト

第二　規則ノ施行上必要ナル細則ヲ定ムルコト

第三　俸給月額八十五圓以下ノ雇員ノ進退ニ關スルコト

第四　技師以下ノ內國各地出張ニ關スルコト

第五　技師以下ノ除服出仕請暇ニ關スルコト

第六　囑託員ノ解囑及其ノ報酬減額ニ關スルコト

第七　三日以內ノ臨時休業ヲ爲スコト

第三條　前條ニ揭ケタル事項ノ外文部大臣ノ許可ヲ受ケ之ヲ施行スヘシ

(5) 航海練習所規則

昭和五年六月二十六日許可

改正　昭和九年五月二日　昭和十年八月十六日

第一章　總則

第一條　本所ハ航海練習所官制及航海練習所規定ニ依リ航海ノ練習ヲ爲サシムルヲ以テ目的トス

第二條　本所ノ練習期間ハ一年三月以內トス

第二章　課業及休業日

第三條　航海練習ハ本所々屬ノ練習船ニ於テ之ヲ行フ

第四條　學科目ハ修身、國語、數學、英語、航海術、運用術、機關術、氣象學、海運、海事法規、無線電信、船舶衞生等トス

第五條　休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ但シ航海中ハ船長ノ定ムル所ニ依ル

一、大祭祝日

二、日曜日

三、創立記念日

四、靖國神社大祭

五、海軍記念日

第三章　入所在所退所及懲戒

第六條　入所期ハ毎年十月ヲ以テ常例トス

第七條　入所セシムヘキ者ハ航海練習所官制第一條ニ依リ文部大臣ノ指定シタル商船學校ニ於テ本科航海科ヲ

卒リタルモノニシテ且所定ノ身體檢査ニ合格シタルモノトス

第八條　前條ノ商船學校ノ校長ハ入所セシメントスル者ニ付左記書類ヲ具シ所長ニ出願スヘシ

一、履歷書（第一號書式）

二、所見表（第二號書式）

三、身體檢査書（第三號書式）

四、戸籍謄本

第九條　入所ヲ許可セラレタル者ハ誓書（第四號書式）ヲ所長ニ提出スヘシ

第十條　誓書ニ要スル保證人ハ父兄又ハ之ニ代ルヘキ親族ニシテ本人在所中ニ關スル一切ノ件ニ付其ノ責ニ任スルコトヲ得ル者タルヘシ

第十一條　保證人死亡シタルトキ若ハ保證人ヲ變更スルトキ又ハ所長ヨリ不適當ト認メラレタルトキハ新ニ保證人ヲ定メ保證人變更屆ヲ差出スヘシ

第十二條　保證人ニシテ轉籍、轉居、改氏名又ハ改印ヲ爲シタルトキハ直ニ之ヲ屆出ツヘシ

第十三條　生徒ニシテ轉籍、改氏名又ハ改印ヲ爲シタルトキハ直ニ之ヲ屆出ツヘシ

第十四條　生徒ハ自己ノ便宜ニ依リ退所スルコトヲ得ス但シ所長ニ於テ事情已ムヲ得スト認メタルトキハ此ノ限ニアラス

第十五條　生徒ニシテ左記各號ノ一ニ該當スル者ハ退所ヲ命ス

一、課業劣等又ハ傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ成業ノ見込ナキ者

二、性行不良ニシテ船舶職員タルニ適セサル者

第十六條　生徒タルノ本分ヲ紊ル者ハ所長之ヲ懲戒ス

懲戒ハ分チテ戒飭、謹慎及放所トス

第四章　成績考査及修了

第十七條　成績ハ平素ノ勤惰、課業ノ成績ヲ考査シテ甲乙丙ノ評語ヲ附シ之ヲ定ム

第十八條　品行方正學業優秀ニシテ衆ニ範タルモノニハ賞狀（第五號書式）ヲ授與ス

第十九條　所定ノ課業ヲ了リタル者ニハ修了證書（第六號書式）ヲ授與ス

第五章　研究生

第二十條　修了者ニシテ特ニ航海ニ關スル事項ヲ研究セントスルモノアルトキハ一年以內研究生トシテ在所セシムルコトヲ得

第六章　學費

第二十一條　授業料ハ之ヲ徴收セス

第二十二條　生徒ニ對シテハ別ニ定ムル所ノ規定ニ依リ食糧ヲ支給ス

第二十三條　生徒ニシテ修業上傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ官費ヲ以テ治療セシムルコトアルヘシ

第七章　服　制

第二十四條　本所ノ制服ハ別表ノ如ク定ム

第二十五條　本所ノ徽章ハ左ノ如シ

附　則

本則ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

本則施行ニ關シ必要ナル細則ハ所長之ヲ定ム

第一號書式（用紙美濃紙）

履　歴　書

一、本　籍

一、族　稱

一、出生地

一、現住所

一、戸主及戸主ノ職業

一、戸主トノ續柄

一、學　歴

一、從事シタル職業

一、賞　罰

右ノ通相違無之候也

氏　　（片假名ヲ附スヘシ）

年　　名

月　　日生

年　月　日

右　氏　名㊞

第二號書式

所見表

氏名	入學年月及學年		
	中途退學年月及學年		
	卒業年月		
學業成績	學年得點（最終二學年）（百分比）	席次	席次（百分比）
	第學年	何人中ノ何番	勤怠ノ狀況
	第學年	同右	缺席ノ多少
性質習癖	校長ノ認ムル所ヲ記ス		學科中最得意トスルモノ
操行	在校中ノ操行及賞罰ノ概略ヲ記ス殊ニ業人ノ模範トナルヘキ擧動又ハ擯斥スヘキ行爲アリタルトキハ其概略ヲ摘記スルヲ要ス		學科中最不得意トスルモノ

長所	同右	同右	同右
短所	同右	同右	同右

備考　前記事項以外ノ必要事項ヲ記入ス

所見　本人ノ人格及學科ノ進歩ニ就キ校長ノ所見ヲ記入ス

年　月　日　學校所在地　何々學校長　氏　名㊞

第三號書式

身體檢査書

氏名	生年月日	概評	身長	體重	胸囲	胸部擴張	

活量	眼	視力	辨色	耳	聽覺	體格	疾病及異狀	記事	檢査執行		
		左號、右號			左尺寸、右尺寸				場所	年月日	醫師官職住所氏名印

第四號書式（用紙美濃紙）。

誓書

私儀今般御所ニ入所御許可相成候ニ付テハ御規則堅ク相守リ決シテ違背仕間敷尚本人身上ニ關スル一切ノ件ハ保證人ニ於テ引受可申仍テ保證人連署ノ上此段誓約候也

年　月　日

本籍
族稱
現住所　氏　名印

本籍
族稱職業
現住所
本人トノ關係　保證人　氏　名印

航海練習所長氏名殿

第五號書式

賞狀

右者品行方正學業優等ナリ仍テ之ヲ賞ス

年　月　日

航海練習所長位勳爵　氏　名印

第六號書式

修了證書

右者本所所定ノ課業ヲ了ヘタリ仍テ之ヲ證ス

年　月　日

航海練習所長位勳爵　氏　名印

別表

第　號

種類		地質	制式	袖章	襟章	前章
冬服	上衣	紺サージ	竪襟背廣形、表隠シ左右下部各一個、所章打出シ胸紐釦五個縦列	所章打出シ紐釦三個横列	襟ノ前面右側ニ金繍製Nヲ左側ニ同錨ヲ附ス	
	袴	同右	普通仕立			
夏服	上衣	白綿リンネル	冬服上衣ニ同ジ	冬服袖章ニ同ジ	冬服襟章ニ同ジ	
	袴	同右	冬服袴ニ同ジ			
帽		紺羅紗	海軍型			金色金屬製所章
外套		同右	乘馬型、前面紐釦六個縦列二行背面帶緒紐釦三個横列			

事業服	上衣	白小倉	ジヤンパー型				
	袴						
雨衣	上衣	白天竺木綿油引キ	折襟胸紐釦白色角五個縦列二行				
	袴	同右	普通仕立、紐釦白色角、但シ胴ヲ紐ヲ以テ結ブ様紐ヲ中繼トス				
	笠	同右	サウエスタ型				
	靴	黒短靴、ゴム長靴、黒地下足袋					
肌着		白					
靴下		黒木綿					

(6) 航海練習所練習船船則

改正 昭和九年四月一日　　昭和八年一月三十一日制定

第一章　總　則

第一條　練習船ハ航海練習所ノ生徒ヲ收容シ航海練習所々定ノ學術及技業ヲ習得セシメ且船舶職員タルニ適スル志操ヲ涵養セシムルヲ以テ目的トス

第二條　練習船ノ航海ハ帆走ヲ主トス

船長ニ於テ必要ト認ムル場合ハ機力ヲ併用シ又ハ機力ノミニ依ルコトヲ得

第三條　練習船ノ航海ハ其ノ都度船長ヨリ所長ニ内申スヘシ

第四條　練習船ハ生徒ノ實習上必要アルトキ貨客ノ運送ヲ爲スコトヲ得

但シ此ノ場合ニ於テ船長ハ豫メ所長ノ承認ヲ受クヘシ

第五條　練習船ノ乘組員ハ和衷協同以テ職務ニ精勵シ克ク其ノ體面ヲ重ンジ一般商船乘組員ノ儀表タランコトヲ期スヘシ

第六條　本則ニ於テ船員ト稱スルハ船長及海員ヲ謂ヒ海員トハ船長以外ノ一切ノ乘組員ヲ謂フ

第七條　本船乘組員ノ死亡、退職、傷病等ニ對スル待遇ハ夫々定メラレタル法令ニ據ルモノトス　但シ法令ニ據リ難キ場合ハ其ノ都度之ヲ定ム

第八條　本則ニ規定ナキ事項ニ關シテハ各法令ノ定ムル所ニ依ル

第二章　職制及處務

第九條　練習船ニ左ノ職員ヲ置ク

一、船　長

二、一等運轉士、次席一等運轉士、二等運轉士、三等運轉士、四等運轉士

三、機關長、一等機關士、二等機關士、

四、事務長、事務員

五、船醫

六、首席通信士、次席通信士

七、講師

第十條　普通海員トシテ左ニ掲クル傭人ヲ置ク

一、水夫長、大工、舵取、水夫、水夫見習

二、火夫長、油差、火夫、火夫見習、

三、司厨長、一等料理人、料理人、料理人見習、一等給仕

給仕、給仕見習

第十一條　練習船内ニ左ノ五部ヲ置ク

一、甲板部

二、機關部

三、事務部

四、醫務部

五、無線通信部

第十二條　甲板部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

一、航海、運用ニ關スルコト

二、生徒ノ教育及訓練ニ關スルコト

三、船内規律ニ關スルコト

四、船體、艤裝物件ノ保存手入及修理ニ關スルコト

五、甲板部ニ屬スル船用品ニ關スルコト

六、「バラスト」、飲料水ニ關スルコト

七、旗章及信號ニ關スルコト

八、氣象ニ關スルコト

九、航海日誌ニ關スルコト

一〇、其ノ他他部ニ屬セサル事項

第十三條　機關部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

一、機關ノ運轉並ニ保存手入及修理ニ關スルコト

二、燃料及罐用水ニ關スルコト

三、機關部ニ屬スル船用品ニ關スルコト

四、船内機械類ノ保存手入及修理ニ關スルコト

五、機關日誌ニ關スルコト

六、炊事用石炭ニ關スルコト

七、其ノ他機關部ニ屬スル事項

第十四條　事務部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

一、庶務及會計ニ關スルコト

二、賄ニ關スルコト

三、事務部ニ屬スル船用品ニ關スルコト

第十五條　醫務部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

一、診察、治療及身體檢査ニ關スルコト

二、保健衞生ニ關スルコト

三、醫務部ニ屬スル船用品ニ關スルコト

第十六條　無線通信部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

一、無線電信ノ發受及其ノ料金ニ關スルコト

二、無線電信機及附屬器具ノ保存手入及修理ニ關スルコト

三、無線通信部ニ屬スル船用品ニ關スルコト

第三章　職務

第一節　船長

第十七條　船長ハ練習船ノ運航ヲ掌ルト共ニ各部ヲ統轄シテ一切ノ船務ヲ處理シ且航海練習所規程ニ依リ生徒ノ教育並ニ訓練ヲ主掌ス

第十八條　船長ハ船舶及人命財産ノ保全並ニ船内ノ風紀及秩序ノ維持ニ付其ノ責ニ任スヘシ

第十九條　船長ハ航海ニ必要ナル準備ノ整頓及航海ノ安全ニ付其ノ責ニ任スヘシ

第二十條　船長ハ前二條ニ掲クル職責ヲ遂行スル爲法令ニ定メラレタル範圍内ニ於テ必要ナル一切ノ行爲ヲ爲スコトヲ得

第二十一條　船長ハ法令ニ定メラレタル書類及本所ヨリ交付シタル重要書類ヲ船内ニ備付ケ且之ヲ整理保存スヘシ

第二十二條　船長船舶ヲ離ルヽトキハ一等運轉士ヲ在船セシメ之ニ其ノ職務ヲ委任スヘシ

第二十三條　船長ハ碇泊中執務ニ差支ナキ場合ニ限リ職員及傭人ノ半數以下ヲ同時ニ離船セシムルコトヲ得

船長ハ前項ノ離船ヲ許可スルトキハ其ノ歸船時刻ヲ指定スヘシ

第二十四條　船長ハ船舶國籍證書ヲ滅失毀損シタルトキ若ハ其ノ記載事項ニ變更ヲ生シタルトキハ遲滯ナク其ノ事由ヲ所長ニ屆出テ爾後必要ナル手續ヲ爲スヘシ

第二十五條　船長ハ船内ニ於テ死亡殺傷其ノ他ノ異變アリタルトキハ遲滯ナク所長ニ報告シ適當ノ手續ニヨリ處理スヘシ

第二十六條　船長ハ死亡者又ハ行方不明者ノ遺産又ハ遺留品ハ適當ノ手續ニヨリ之ヲ處理シ其ノ詳細ヲ所長ニ報告スヘシ

第二十七條　練習船ヨリ發スル文書ハ特別ノ規定アルモノヽ外船長之ニ署名スヘシ

第二十八條　船長死亡シタルトキ船舶ヲ去リタルトキ又ハ之ヲ指揮スルコト能ハサルニ至リタルトキハ一等運轉士船長ノ職務ヲ行ヒ航海ヲ遂行スヘシ

第二十九條　船長ハ外國港灣碇泊中其ノ地官憲ニ對シ交渉ヲナサントスルトキ先ツ駐劄本邦大公使若ハ領事ト協議スヘシ

第三十條　船長ハ外國港灣碇泊中乘組員ヲシテ當該國法規ニ抵觸セシメサルヨウ特ニ留意スヘシ

第三十一條　船長ハ生徒ニ關スル考課表ヲ成規ノ形式ニ從ヒテ作成シ所定ノ期間ニ之ヲ所長ニ報告スヘシ

第三十二條　船長ハ乘組員ニ表彰スヘキ善行ヲ認メタル時ハ事由ヲ具シテ表彰方ヲ所長ニ申請スルコトヲ得

第三十三條　船長ハ航海中生徒ニ付懲戒スヘキ事實ヲ認メタルトキハ謹慎戒飭ヲ加フルコトヲ得此ノ場合ハ遲滯ナク所長ニ報告スヘシ

第二節　其ノ他ノ職員

第三十四條　一等運轉士ハ船長ノ命ヲ承ケ甲板部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第三十五條　一等運轉士ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ技業ヲ主掌シ且其ノ學習ヲモ擔任スヘシ

第三十六條　一等運轉士ハ船長ノ命ヲ承ケ各部ノ連絡ニ留意シ船内ノ警察事務ヲ處理スヘシ

第三十七條　次席一等運轉士ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習ヲ主掌シ且甲板部ノ業務ヲモ擔任スヘシ

第三十八條　二等、三等、四等各運轉士ハ上長ノ命ヲ承ケ所屬ノ業務ニ從事シ生徒ノ技業及學習ヲ補佐スヘシ

第三十九條　機關長ハ船長ノ命ヲ承ケ機關部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第四十條　一等機關士及二等機關士ハ機關長ノ命ヲ承ケ所屬ノ業務ニ從事スヘシ

第四十一條　機關長及機關士ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習ヲ擔任スヘシ

第四十二條　事務長ハ船長ノ命ヲ承ケ資金前渡官吏監督ノ下ニ事務部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第四十三條　事務長ハ船長ヨリ命セラレタルトキ生徒ノ學習ヲ擔任スヘシ

第四十四條　事務員ハ事務長ノ命ヲ承ケ所屬ノ業務ニ從事スヘシ

第四十五條　船醫ハ船長ノ命ヲ承ケ醫務部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第四十六條　船醫ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習ヲ擔任スヘシ

第四十七條　首席通信士ハ船長ノ命ヲ承ケ無線通信部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第四十八條　首席通信士ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習ヲ擔任スヘシ

第四十九條　次席通信士ハ首席通信士ノ命ヲ承ケ所屬ノ業務ニ從事スヘシ

第五十條　講師ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習若ハ技業ヲ擔任スヘシ

第五十一條　本節ニ規定ナキ海員ハ上長ノ指揮ヲ承ケ各所屬ノ業務ニ從事スヘシ

第四章　紀律

第五十二條　海員ハ上長ノ命ニ服從シ之ニ對シ抗議スルコトヲ得ス

第五十三條　海員ハ上長ニ對シ敬禮ヲ缺クヘカラス

第五十四條　海員ハ上長ニ對シ同盟シテ要求請願等ヲ爲スヘカラス

第五十五條　海員ハ傷病其ノ他事故ニヨリ休業セントスルトキハ成規ノ手續ヲ經テ船長ノ許可ヲ受クヘシ

第五十六條　海員ハ船長ノ許可ヲ受クルニアラサレハ離船スルコトヲ得ス　離船シタルトキ船長ノ指定時刻迄ニ歸船スルコトヲ要ス

第五十七條　海員ハ船長ノ許可ヲ受クルニアラサレハ乘組員以外ノ者ヲ船內ニ宿泊セシムルコトヲ得ス

第五十八條　海員ハ指定外ノ場所ニ於テ喫煙シ又裸燈、手燭、洋燈、燐寸等ヲ使用スルコトヲ得ス

第五十九條　海員ハ服務中已ムヲ得サル事由ニヨリ所定ノ場所ヲ離レントスルトキハ上長ノ許可ヲ受クヘシ

第六十條　海員ハ兇器、爆發物其ノ他危險物又ハ酒類ヲ所持スルコトヲ得ス

第六十一條　海員ハ他人ノ業務執行ヲ妨害スヘカラス

第六十二條　海員ハ酩酊、喧噪又ハ鬪爭スヘカラス

第六十三號　海員ハ密輸入ヲナシ若ハ船內ニ於テ商事ヲ營ムコトヲ得ス

第六十四條　海員ハ賭博又ハ之ニ類似ノ行爲アルヘカラス

第六十五條　海員ハ船長ノ許可ヲ受クルニアラサレハ成規以外ノ服裝ヲ爲スヘカラス

第六十六條　海員ハ服務中閑話、睡眠、喫煙其ノ他懈怠ノ行爲アルヘカラス

第六十七條　海員ハ船内ノ機密ヲ漏洩スヘカラス

第六十八條　海員ハ本章ニ規定セサル事項ト雖モ苟クモ船内ノ風紀及秩序ヲ紊亂スルカ如キ行爲アルヘカラス

第五章　航海

第一節　甲板部

第六十九條　船長ハ左ノ場合ニ於テ船橋ニアリテ自ラ指揮スヘシ

一、港灣ヲ出入スルトキ

二、狹隘ナル水路ヲ航行スルトキ

三、濃霧其ノ他不良ナル天候ニ際會シタルトキ

四、其ノ他危險ノ虞アルトキ

第七十條　船長ハ水先人ヲ招聘シタルトキ其ノ業務ヲ監視スヘシ

第七十一條　船長ハ船橋ヲ去ラントスルトキ針路並ニ航海上必要ナル命令ヲ當直運轉士ニ與フヘシ

第七十二條　當直運轉士ハ船舶ノ運航ニ關シ當直員ノ業務ヲ指揮監督スヘシ

第七十三條　當直運轉士ハ左ノ場合ニ於テ直ニ之ヲ船長ニ報告スヘシ

一、船舶、燈火、陸地、島嶼等ヲ認メタルトキ

二、天候異變ノ徵アルコトヲ認メタルトキ

三、展帆收帆ノ必要ヲ認メタルトキ

四、船體又ハ機關ニ故障アルヲ知リタルトキ

五、其ノ他異狀ヲ認メタルトキ

第七十四條　當直運轉士ハ急迫ノ際船長ノ命令ヲ承クル遑ナキトキハ其ノ責任ヲ以テ針路ノ變更、速力ノ增減其ノ他臨機ノ處置ヲ爲スコトヲ得　但シ此ノ場合ニ於テハ直チニ之ヲ船長ニ報告スヘシ

第七十五條　當直運轉士ハ航海燈ノ現狀ニ付當直員ヲシテ三十分毎ニ報告セシムヘシ

第七十六條　當直運轉士ハ舵取交代スルトキ針路ノ誤ナキヤ否ヤヲ確ムヘシ

第七十七條　當直運轉士交代スルトキハ針路、速力、天候、船位等ニ付詳細ニ引繼キ船長ヨリ與ヘラレタル命令ヲ傳達スヘシ

第七十八條　當直運轉士ハ常ニ救助艇及救命浮環ノ使用ニ支障ナカラシメ又救助艇員及其ノ要具ヲ整備シ置ヘシ

第七十九條　當直運轉士ハ夜間當直終了後船内ヲ巡視シテ異狀ナキヤ否ヤヲ點檢スヘシ

第八十條　當直運轉士ハ船長又ハ資格アル他ノ運轉士ト交代スルニアラサレハ當直樓ヲ去ルコトヲ得ス

第二節　機關部

第八十一條　機關長ハ當直ノ外左ノ場合ニ於テ機關室ニアリテ自ラ指揮スヘシ

一、港灣ノ出入ヲ爲ストキ

二、狹隘ナル水路ヲ航行スルトキ

三、機關ヲ發動シ又ハ停止スルトキ

四、其ノ他船長ヨリ命セラレタルトキ

第八十二條　機關長ハ機關ノ損傷其ノ他危急ノ際臨機ノ處置ヲ爲スコトヲ得　但シ此ノ場合ニ於テハ遲滯ナク其ノ事由ヲ船長又ハ當直運轉士ニ報告スヘシ

第八十三條　機關長ハ燃油槽、石炭庫等ノ狀態ニ留意シ瓦斯ノ爆發又ハ石炭ノ自然發火等ノ事故ヲ發生セサル樣豫防スヘシ

第八十四條　當直機關士ハ機關室ニアリテ機關ノ運轉ニ關シ當直員ノ業務ヲ指揮監督スヘシ

第八十五條　當直機關士ハ機關ニ異狀ヲ發見シタルトキ直ニ之ヲ機關長ニ報告シ其ノ指揮ヲ請フヘシ

第八十六條　當直機關士ハ急迫ノ際機關長ノ命令ヲ承クル遑ナキトキハ其ノ責任ヲ以テ臨機ノ處置ヲナスコトヲ得　但シ此ノ場合ニ於テハ直ニ之ヲ機關長ニ報告スヘシ

第八十七條　當直機關士交代スルトキハ機關ノ現狀並ニ當直中與ヘラレタル命令ヲ傳達スヘシ

第八十八條　當直機關士ハ機關長又ハ資格アル他ノ機關士ト交代スルニアラサレハ機關室ヲ去ルコトヲ得ス

第六章　日誌

第八十九條　船長ハ左ニ掲クル日誌ヲ船內ニ備付クヘシ

一、航海日誌

二、甲板部當直日誌

三、機關日誌

四、機關部當直日誌

第九十條　甲板部當直日誌ハ當直運轉士之ヲ記入シ航海日誌ハ一等運轉士之ヲ記入署名シ每日船長ノ檢閱ヲ受クヘシ

第九十一條　一等運轉士ハ航海ノ終リニ於テ航海日誌ニ基キ航海撮要日誌ヲ調製スヘシ船長ハ署名ノ上之ヲ所長ニ提出スヘシ

第九十二條　機關部當直日誌ハ當直機關士之ヲ記入シ機關日誌ハ機關長之ヲ記入署名シ船長ノ檢閱ヲ受クヘシ

第九十三條　機關長ハ航海ノ終リニ於テ機關日誌ニ基キ機關撮要日誌ヲ調製スヘシ船長ハ署名ノ上之ヲ所長ニ提出スヘシ

第九十四條　航海日誌及機關日誌ハ如何ナル場合ト雖モ其ノ用紙ヲ廢棄シ又ハ書損シタル文字ヲ抹消スヘカラス追加、削除若ハ訂正ヲ爲シタルトキハ船長及當該主任者之ニ署名スヘシ

第七章　旗章及信號

第九十五條　練習船ハ成規ノ旗章ヲ掲揚スヘシ

第九十六條　滿船飾ヲ施スヘキ場合左ノ如シ

一、紀元節
二、天長節
三、明治節
四、外國港灣碇泊中當該國ノ主ナル國祭日
五、其ノ他官廳ヨリ特ニ通知アリタルトキ

第九十七條　前條ニ掲クル以外ノ祝祭日及本所創立紀念日ニ於テハ船飾ヲ施スヘシ

第九十八條　天候其ノ他已ムヲ得サル事由アルトキハ前二條ノ規定ニ依ル滿船飾又ハ船飾ヲ省略スルコトヲ得

第九十九條　信號ハ特ニ許サレタルモノヽ外船長ノ命令アルニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第百條　航行中內外國軍艦ニ出會ヒタルトキ又ハ內外國燈臺ノ前ヲ通過スルトキハ成規ノ敬禮ヲ行フヘシ

第百一條　碇泊中旗章掲揚ニ關シテハ其ノ地碇泊中ノ帝國軍艦ニ倣フヘシ

第百二條　外國ノ港灣ニ碇泊中旗章掲揚ニ關シ疑アルトキハ成ルヘク駐劄本邦大公使若ハ領事ト協議シテ之ヲ決スヘシ

第八章　船用品

第百三條　船用品トハ屬具、備品及消耗品ヲ謂フ

第百四條　船用品ノ出納命令ハ船長之ヲ發スヘシ

第百五條　船用品ノ出納、保管ハ物品會計規則ニ基キ文部省物品會計規程ニ依リ處理スヘシ

第百六條　船用品ノ監守及取扱ハ左ノ區域ヲ各一部ト定ム

甲　板部
機關部
事務部
醫務部

第百七條　各部ニ物品監守者及物品取扱主任ヲ置ク

物品監守者ハ部ニ屬スル屬具、備品ヲ監守シ物品取扱主任ハ部ニ屬スル消耗品ノ受拂及保管ヲナス

第百八條　法定屬具ニ付テハ物品會計官吏ハ特ニ目錄ヲ備ヘ置キ船舶檢査ノ便ニ供スヘシ

第九章　會計

第百九條　會計ニ關シテハ總テ會計法規ニ據ルモノトス

第百十條　資金前渡官吏ハ船長監督ノ下ニ其ノ職務ヲ行フヘシ

第百十一條　資金前渡官吏ノ事務ハ船長監督ノ下ニ事務長之ヲ補佐スヘシ

第百十二條　船内本金庫ハ船長室ニ備ヘ鍵ハ資金前渡官吏ニ於テ之ヲ保管スヘシ　但シ支拂ノ便宜上別ニ小金庫ヲ事務長室ニ備付クル事ヲ得

第十章　衛生

第百十三條　船醫ハ乘組員ノ保健衛生ニ付テハ至重ノ注意ヲ拂ヒ必要アルトキハ船長ニ報告シテ適當ノ處置ヲ爲スヘシ

第百十四條　船醫ハ生徒乘船並海員ノ雇入ノ際其ノ身體ヲ檢査シ服務ノ適否ヲ診定スヘシ

第百十五條　外國ニ航海スルトキハ發航地及寄港地ニ於テ當該官廳ヨリ健全證書ヲ受ケ之ヲ船内ニ備ヘ置クヘシ

第百十六條　乘組員中疾病ニ罹リタル者アルトキハ所屬部主任者ハ其ノ氏名ヲ受診簿ニ記入シテ船醫ニ交付シ其ノ診察ヲ受ケシムヘシ

第百十七條　船醫ハ診療簿ヲ備ヘ置キ醫師法ノ定ムルトコロニ依リ記載シ船長ノ檢閲ヲ受クヘシ

第百十八條　傳染病流行地ニ入港シ又ハ碇泊地ニ於テ傳染病發生シタルトキハ陸地又ハ他船トノ交通ニ注意スヘシ

船長ハ必要ト認ムルトキ交通遮斷ヲナスコトヲ得

第百十九條　船内ニ於テ傳染病ニ罹リタル者アルトキ又ハ疾病蔓延ノ兆アルトキハ其ノ原因ヲ探究シ直チニ適當ナル處置及其ノ豫防法ヲ講スヘシ

第百二十條　航海中死亡者アリタルトキハ死亡後二十四時間ヲ經過スルニアラサレハ其ノ遺骸ヲ水葬ニ付スコトヲ得ス

第十一章　無線通信

第百二十一條　通信士ハ無線電信ノ發受機具及業務用物品ノ保管取扱ニ付テハ至重ノ注意ヲ拂フヘシ

第百二十二條　通信士ハ當該官廳ヨリ無線電信ノ使用、制限、停止又ハ機具ノ除去ニ關スル命令ニ接シタルトキ

ハ船長ヲ經テ遲滯ナク所長ニ屆出ツヘシ

第百二十三條　通信士ハ船内ニ通信日誌ヲ備ヘ置キ法規ノ定ムル事項ヲ記入スヘシ

前項ノ通信日誌ハ船長ニ差出シ其ノ檢閲ヲ受クヘシ

第百二十四條　通信士ハ航海ノ終ニ於テ通信日誌ニ基キ同抄錄ヲ調製シ船長ヲ經テ所長ニ提出スヘシ

第百二十五條　私設無線電信規則第三十二條各號ニ該當スル事實アリタルトキハ其ノ都度詳細ノ狀況ヲ船長ヲ經テ所長ニ報告スヘシ

第百二十六條　當該官廳ヨリ無線電信ノ機具、運用狀況並ニ關係書類ノ檢査ヲ受ケタルトキハ遲滯ナク其ノ詳細ヲ船長ヲ經テ所長ニ報告スヘシ

第百二十七條　無線電信ノ檢定證書又ハ假檢定證書通信室内最モ見易キ場所ニ掲示スヘシ

前項ノ證書ヲ減失毀損シタルトキハ直チニ再交付又ハ書換ノ手續ヲ爲シ直チニ船長ヨリ其ノ旨所長ニ報告スヘシ

第十二章　修繕及檢査

第百二十八條　船舶ノ修繕又ハ模樣替ヲ要スルトキハ其ノ箇所及理由ヲ詳記シ所長ニ伺出ツヘシ

第百二十九條　各部ノ修理ハ成ル可ク乘組員ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第百三十條　船舶ノ修繕其ノ他ノ工事ニ付テハ一等運轉士及機關長ハ其ノ所管ニ屬スル部分ヲ監督スヘシ

第百三十一條　船舶ノ修繕其ノ他工事終リタルトキハ遲滯ナク其ノ報告書ヲ所長ニ提出スヘシ

第百三十二條　船舶ノ檢査ヲ受ケントスルトキハ船長ハ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第百三十三條　船舶檢査中一等運轉士及機關長ハ檢査官吏ニ隨伴シ其ノ主掌ニ屬スル部分ノ檢査ニ付便宜ヲ與フヘシ

第百三十四條　船舶ノ檢査終了シタルトキハ遲滯ナク其ノ檢査報告書ヲ所長ニ提出スヘシ

第百三十五條　船舶ノ檢査終了シタル後檢査官吏ヨリ交付セラレタル檢査手帳及安全辨ノ鍵ハ船長之ヲ保管スヘシ

第百三十六條　船舶檢査證書又ハ假證書ハ船内最モ見易キ場所ニ掲示スヘシ

前項ノ證書ヲ減失毀損シタルトキハ直チニ再交付又ハ書換ノ手續ヲ爲シ直チニ其ノ旨所長ニ報告スヘシ

第十三章　海難

第百三十七條　船舶カ衝突、乘揚、火災其ノ他ノ海難ニ罹リタルトキハ船長ハ人命、船體、必要書類等ノ保護ニ付臨機ノ處置ヲ爲スヘシ

第百三十八條　船舶カ海難ニ罹リ救助ノ見込ナキニ至リタルトキハ船長ハ總テ船内ニ在ル者ヲ去ラシメタル後ニアラサレハ船舶ヲ去ルコトヲ得ス

第百三十九條　船舶カ海難ニ罹リタルトキハ乘組員ハ船長ノ命令アルニアラサレハ執務不可能ニ至ルマテ其ノ部署ヲ去ルコトヲ得ス

第百四十條　船舶カ海難ニ罹リタルトキハ關係官廳ニ報告シ船長ニ於テ必要ト認メタルトキハ當該官廳ノ認證ヲ受クヘシ

第百四十一條　船舶カ海難ニ罹リタルトキハ其ノ狀況ヲ所長ニ急報シ更ニ詳細ナル海難報告書ヲ調製シテ所長ニ提出スヘシ

第百四十二條　前條ノ海難報告書ニハ主トシテ左ノ事項ヲ明記スヘシ

一、事件ノ發生シタル日時及原因
二、當直職員ノ氏名
三、見張人及當直舵取ノ氏名
四、當時施行シタル危險豫防ノ措置
五、機關ノ運轉
六、船員並ニ便乘者ノ員數及其ノ死傷
七、船舶損傷ノ個所及其ノ狀況
八、當時施シタル救助ノ方法
九、衝突ノ場合ニ於テハ他船ノ名稱、番號、總噸數、船籍港、所有者、發航港、到達港及損害ノ現狀

海難報告書ニハ第百三十九條ノ報告書類ノ寫及其ノ事件ニ關係アル日誌ノ各寫ヲ添付スヘシ

第百四十三條　海難ニ依リ生シタル損害及費用ニ關シテハ詳細ナル記錄ヲ調製シ遲滯ナク之ヲ所長ニ提出スヘシ

等百四十四條　海難ニ關シ當該官廳ヨリ取調又ハ訊問ヲ受ケタル乘組員ハ被審人タルト證人タルトヲ問ハス其ノ答辯ノ詳細ヲ遲滯ナク所長ニ報告スヘシ

第百四十五條　救助ヲ求ムル船舶ヲ認知シタル時ハ本船急迫ノ危險ナキ限リ他船ノ人命救助ニ從事シ其ノ詳細ヲ所長ニ報告スヘシ

(7)　航海練習所練習船乘組傭人被服規程

昭和五年五月十六日　決定
改正　昭和八年一月十八日

第一條　航海練習所練習船乘組傭人ニハ本規程ノ被服ヲ貸與シ乘組中之ヲ着用セシム　但シ臨時傭人ニハ之ヲ貸與セサルコトアルヘシ

第二條　被服ノ種類、地質、制式、貸與員數、貸與期間ハ左ノ區分ニ依ル

種類		地質	制式	貸與員數	貸與期間
帽	（日覆共）	紺絨（日覆ハ白木綿）	大黒型、前面ニ金繡或ハ金屬製徽章ヲ附ス形狀第一圖（イ）及（ロ）ノ如シ	一	三箇年
夏帽		麥藁	大黒型、丸庇前面ニ船名ヲ打込ミタル黑平紐ヲ附ス形狀第二圖ノ如シ	一	二箇年
事業帽		白小倉（但シ機關部ハ茶色）	鳥打型形狀第三圖ノ如シ	二	一箇年
冬服	上衣	紺ヘル地	竪襟ジヤケツト形左腕ニ腕章ヲ附ス表隱シ右下部各一個胸紐釦、鍍銀所章打出シ、五個單行形狀第四圖（イ）ノ如シ	一	三箇年
	袴	同右	普通仕立、紐釦黑色角形狀第四圖（ロ）ノ如シ	一	三箇年
夏服	上衣	白葛城織	冬服ニ同ジ	二	二箇年
	袴	同右	同右	二	二箇年
外套（頭布付）		紺大絨	折襟、胸二重、左腕ニ腕章ヲ附ス表隱シ左胸部一個胸紐釦黑色角、所章打出シ、五個二行形狀第五圖ノ如シ	一	四箇年
	上衣	白天竺木綿	折襟、胸二重、紐釦、白色角、五個二行形狀第六圖（イ）ノ如シ	一	三箇年

雨衣	袴	同右	普通仕立、紐釦、白色角但シ胴ヲ紐ヲ以テ結フ樣紐ヲ中繼トス形狀第六圖（ロ）ノ如シ	一	三箇年
	笠	同右	形狀第六圖（ハ）ノ如シ	一	三箇年
事業服	上衣	白小倉（但シ機關部ハ茶色）	フロツク型（給仕ヲ除ク）表隱シ左胸部一個ジヤケツト型（給仕ニ限ル）紐釦白色角、七個單行形狀第七圖（イ）ノ如シ	二	一箇年
	袴	同右	ジヤンパー仕立形狀第七圖（ロ）ノ如シ	二	一箇年
	前垂	同右	形狀第七圖（ハ）ノ如シ	二	一箇年

備考

一、右表種類欄中夏帽及雨衣ハ甲板部員ニノミ同前垂ハ料理人ニノミ貸與ス

一、右表制式欄帽章中金繡或ハ金屬製着用ノ區別ハ航海練習所長之ヲ定ム

第三條　冬服及夏服ノ着用時期ハ當該船長ニ於テ其ノ都度適宜之ヲ定ムヘシ

第四條　第二條ニ掲クル表中腕章ハ冬季用ノモノハ黑絨ノ上ニ赤羅紗夏季用ノモノハ白葛城織ノ上ニ黑羅紗ヲ以テ各徽章ヲ縫ヒ付ク其ノ形狀別圖ノ如シ

第五條　貸與シタル被服ニシテ所定ノ貸與期間ヲ經過シタルトキハ最後ニ貸與ヲ受ケタル者ニ之ヲ給與ス

第六條　前條ノ場合ニ於テ貸與期間中貸與ヲ受ケタル者ノ轉免死亡ニヨリ前任者ノ被服ヲ後任者ニ貸與セラレタルモノナルトキハ前任者ノ既ニ貸與セラレタル期間ハ所定ノ貸與期間ヨリ之ヲ控除スルモノトス

第七條　故意又ハ怠慢ニ依リ被服ヲ亡失シ若ハ毀損汚穢シテ着用ニ堪ヘサラシメタルトキハ左ノ價格ヲ辨償セシム

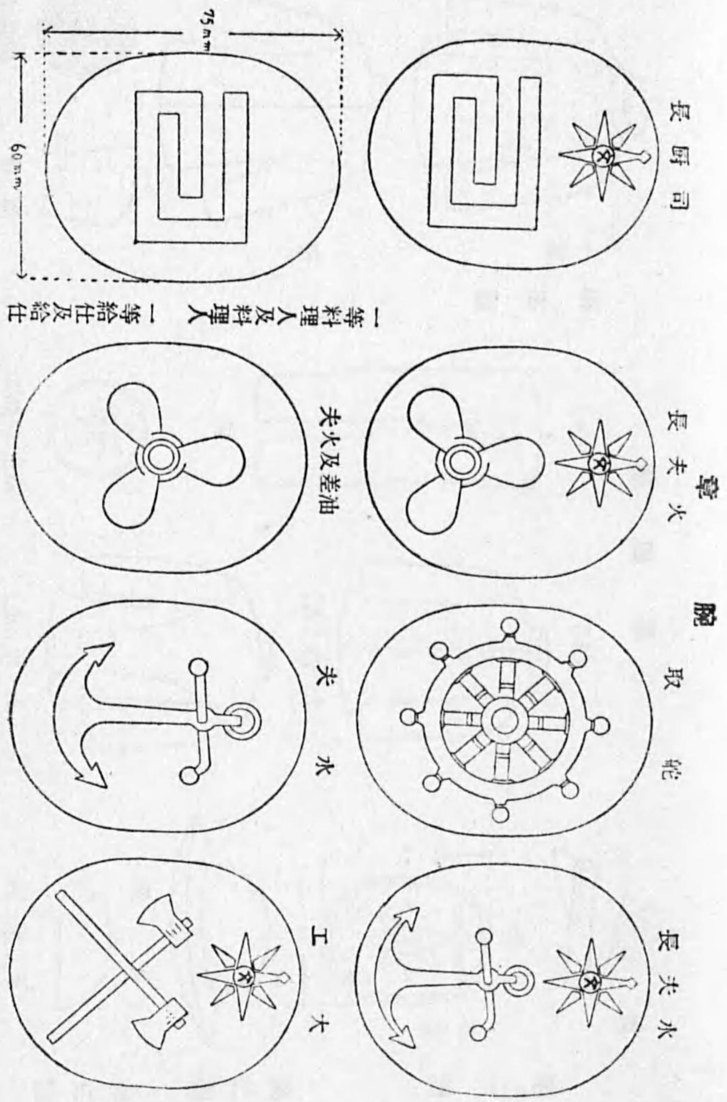
一、其ノ原價ヲ貸與期間ノ日數ニテ除シ得タル高ニ殘餘ノ保存日數ヲ乘シタル額

二、前號ニ依リ難キトキハ航海練習所長ニ於テ相當ト認ムル價格

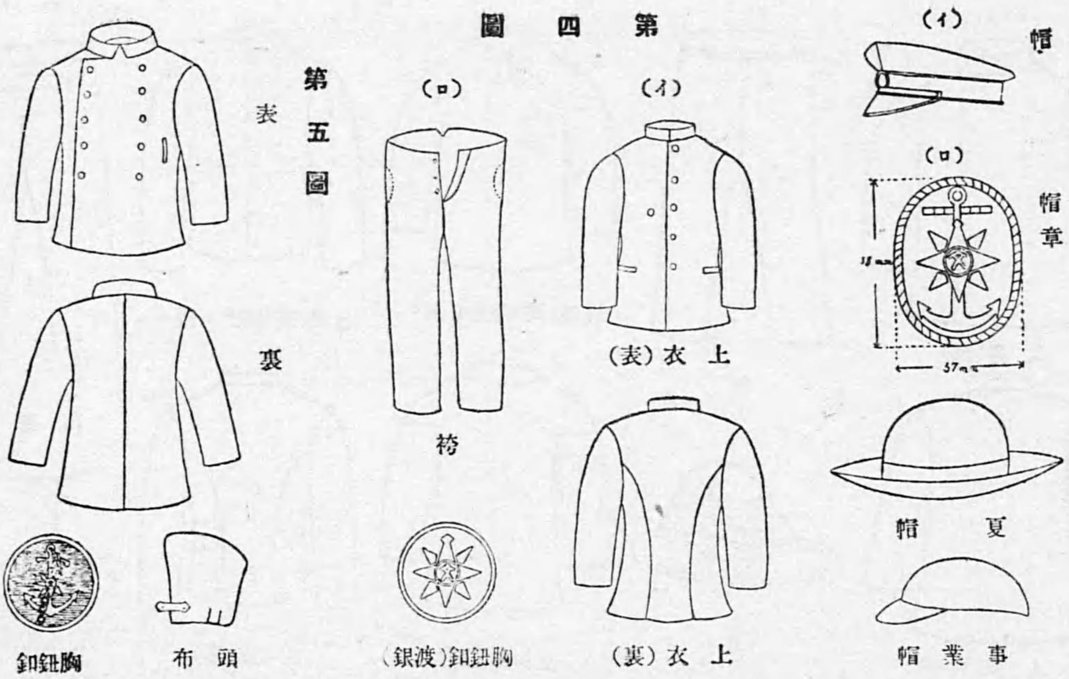
第八條　貸與シタル被服ニハ凡テ指定ノ箇所ニ各自ノ氏名ヲ記入スヘシ

附　則

規程ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス



第四圖

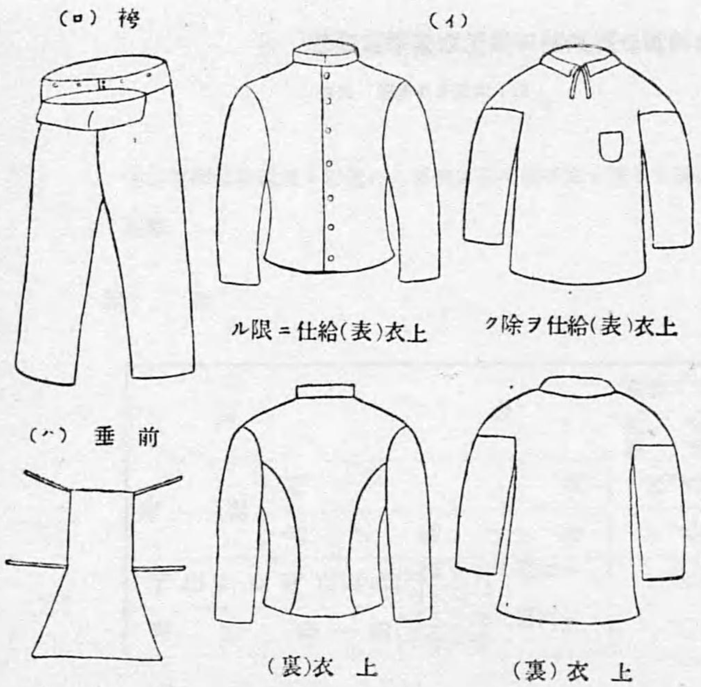


第一圖

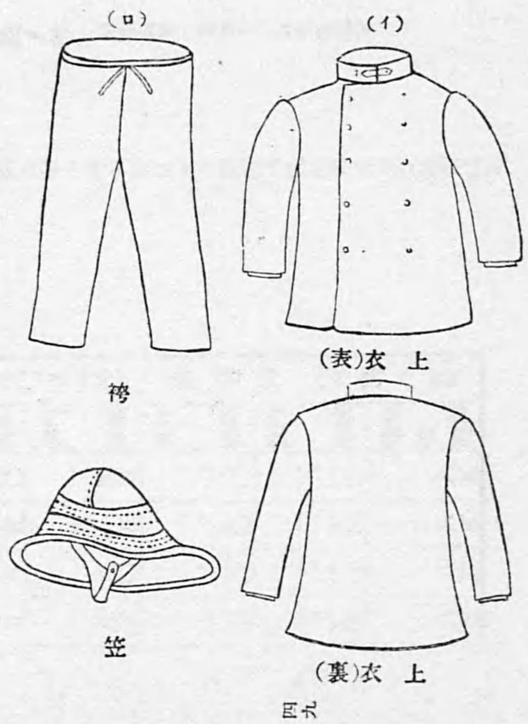
第二圖

第三圖

第七圖



第六圖



(8) 練習船乘組員航海日當及食卓料支給ノ件

改正　昭和九年四月一日

昭和六年一月二十一日次官裁定

本所練習船乘組員ニ支給スル航海日當及食卓料ニ關シテ昭和六年一月十五日ヨリ別表ノ通改正ノ上支給相成可然哉

別表

區分		航海日當（一日ニ付）		食卓料（一夜ニ付）		
		航海國外	航海國內	航海國外	航海國內	港碇泊繫定
技師	船長	四、五〇	一、四五	一、二〇	一、一〇	八五
	其ノ他ノ者	三、八五	一、一五	一、二〇	一、一〇	八五
判任官及囑託雇員（給料手當月額五十五圓以上）		二、五五	八〇	一、二〇	一、一〇	八五
囑託雇員（給料手當月額五十五圓未滿）		一、〇五	五五	一、二〇	一、一〇	八五

傭人					
水火夫長、司厨長	七〇	四五	六五	五五	五五
大工、舵取、油差	五五	三五	六五	五五	五五
一等料理人、一等給仕	五五	三〇	六五	五五	五五
水火夫、料理人、給仕	四五				

備考

南洋群島關東州南滿洲內ノ航海若クハ此等地域相互間ノ航海又ハ南洋群島關東州南滿洲ト其他ノ地方トノ間ノ航海ニ就テハ外國航海ト同樣ノ日當及食卓料ヲ支給ス

(三) 練習船

(1) 練習船要目

船名	日本丸	海王丸
番號	三六二一	三六二一
信號符字	JFLC	JFPC
船級資格	一級遠洋	一級遠洋
船質	鋼	鋼
總噸數	二二八三噸九八	二二八三噸九八
純噸數	八七八噸三九	八七八噸三九
長	七九米二五	七九米二五
巾	一二米九五	一二米九五
深	七米八五	七米八五

最高速力	帆走約一三節汽走一一・八三節	帆走約一三節汽走一一・八三節
帆船ノ帆装	四檣バーク	四檣バーク
機關ノ種類及數	發動機二個	發動機二個
進水年月日	昭和五年一月	昭和五年二月
製造所	神戸川崎造船所	神戸川崎造船所

(2) 練習船航海狀況

船名 / 要項 / 次號	日本丸 發航年月日	日本丸 歸航年月日	日本丸 總航海日數	日本丸 總航程	日本丸 寄港地	海王丸 發航年月日	海王丸 歸航年月日	海王丸 總航海日數	海王丸 總航程	海王丸 寄港地
昭和五年度第一次短期	昭和五、七、七	昭和五、七、一三	七日	四三九浬	館山	昭和五、七、七	昭和五、七、一三	七日	四五三浬	館山
昭和五年度第二次短期	五、八、一五	五、八、一六	二	一〇八	館山	五、八、一五	五、八、一七	三	一〇一	

昭和五年度第三次短期	五、八、二〇	五、八、二四	五	三三	館山、清水、横濱	五、八、二〇	五、八、二四	五	二九	館山、清水、横濱
昭和五年度第四次短期	五、九、六	五、九、八	三	七四一	神戸					
第一次	五、一〇、四	五、一二、三	六一	四、八〇三	横濱、ポナペ島	五、一〇、四	六、二、六	六四	四、二五〇	横濱、トラック島
第二次	六、一、一三	六、二、二五	三五	三、三八五	小笠原父島	六、一、一三	六、三、三	四一	二、六七三	横濱、那覇、鳥羽
第三次	六、四、一一	六、七、一三	九三	八、四九一	横濱、ホノルル、	六、四、一一	六、七、一五	九六	九、〇六五	横濱、ヒロ
第四次	六、九、一五	六、一〇、二九	四五	二、二三七	函館、伏木、西郷、屋代島、粟島、神戸	六、九、一〇	六、一二、二六	一〇八	六、五九四	横濱、クサイ島、鹿兒島、宇品、弓削、味野、神戸
第五次	六、一二、一五	七、二、六	五四	四、七三六	横濱、トラック島	七、二、六	七、三、一	二四	二、〇一〇	小笠原父島、清水
第六次	七、四、九	七、七、一二	九四	八、七五一	横濱、ヒロ、カフルイ	七、四、九	七、六、二八	八一	五、七二六	横濱、サイパン島、高雄、香港
昭和七年度第一次短期	七、八、三	七、八、三	一	三三	横濱	七、八、三	七、八、三	一	三三	横濱
昭和七年度第二次短期	七、八、二七	七、九、一五	二〇	一、一七八	山田(岩手縣)	七、八、二七	七、九、一九	二四	一、五〇三	横濱、室蘭、石之卷

第七次	七、一一、八	八、二、二	八七	六、六六三	横濱、クサイ島、サイパン島、鹿兒島、鳥羽	七、一一、八	八、二、二四	一〇九	八、四七七	横濱、ポナペ島、パラオ島、ダバオ、四日市
昭和七年度第三次短期	八、三、一七	八、三、二六	一〇	五一	浦賀					
第八次	八、四、八	八、七、五	八九	九、一六七	横濱、ホノルル、	八、四、八	八、七、一四	九八	六、九三八	横濱、海防、大連、青島、神戸
昭和八年度第一次短期	八、八、二五	八、八、二五	一	三〇		八、八、二五	八、八、二五	一	三〇	
第九次	八、九、二〇	八、一二、一二	八四	六、七二六	横濱、ヤルート島、ポナペ島	八、一〇、一九	九、二、九	一一四	八、三三六	横濱、クサイ島、ヤツプ島、高雄、與那原
昭和八年度第二次短期	九、一、二五	九、三、一	三六	二、七一七	横濱、小笠原父島、鳥羽					
第十次	九、四、一二	九、七、三〇	一一〇	一一、三三一	横濱、桑港	九、四、一二	九、七、二六	一〇六	一〇、四四二	横濱、シヤトル
昭和九年度第一次短期	九、八、一二	九、八、一二	一	四一	横須賀					
昭和九年度第二次短期	九、一〇、二二	九、一一、二	一二	二二	浦賀					
第十一次	九、一一、二〇	一〇、二、一九	九二	八、三〇九	クサイ島、基隆、四日市	九、一一、二〇	一〇、三、二二	一二三	八、六四六	神戸、ポナペ島、ラボール、パラオ島、津久見、油津

昭和九年度第三次短期	一〇、三、二〇	一〇、三、二一	二	二八	横濱					
第十二次	一〇、四、二〇	一〇、八、二三	一二六	一三、三六九	横濱、エンセナダ、サンデイゴ	一〇、八、二六	一〇、五、四	一二五	九、九一〇	ビクトリア、晩香坡、横濱
昭和十年度第一次短期	一〇、一〇、二六	一〇、一〇、三〇	五	九	川崎、館山					
第十三次	一〇、一一、二六	一一、二、二四	九一	七、一三三	クサイ島、トラツク島、中城灣、横濱	一〇、一一、二〇	一一、三、二二	一二四	一〇、〇八三	横濱、ヒロ、ヤルート島、サイパン島
第十四次	一一、四、二五	一一、七、二九	九六	八、七九七	横濱、カフルイ、ケアラケクア、カイルア	一一、五、二一	一一、八、三一	一三三	九、五〇六	四日市、パラオ島、アンガウル島、ポートダウイン、バタビヤ、シンガポール
昭和十一年度第一次短期	一一、八、三〇	一一、一〇、九	四一	二九	横濱(定期檢査)	一一、一〇、二六	一一、一二、一〇	四六	二六	横濱(定期檢査)
昭和十一年度第二次短期	一一、一〇、二五	一一、一一、二	九	七八三	神戸					
第十五次	一一、一二、一一	一二、二、二六	七八	七、三四九	横濱、ポナペ島、パラオ島	一二、一、一二	一二、三、八	五六	五、三八四	トラツク島、横濱

第十六次	三、四、二七	三、九、七	一三四	一三、五一三	ヒロ、タヒチ島、ヤルート島、横濱	三、五、一五	三、九、一六	一三五	二、三七五	プリンス・ルパート、ポート・アレン、横濱
計			一、五六六	一三〇、二五四				一、五七四	三、九三三	

(四)職員

所長　文部省實業學務局長　小笠原豐光

書記　海軍豫備中尉位從七等　牧重雄

　　菅原榮治

　　海軍豫備中尉位從七等　田中保平

　　海軍豫備中尉位從七等　小門和之助

　　海軍豫備特務少尉等八位正　安藤孝吉

囑託　文部省督學官　田口謙三

　　青木濱吉

　　毛利ヒサ子

雇

○練習船日本丸

技師　船長　海軍豫備中佐位從五　長田堯春

　　一等運轉士　正軍豫備大尉位七　名古屋松太郎

　　資金前渡官吏　物品會計官吏

技手　次席一等運轉士　海軍豫備中尉位從七　横田利雄

　　機關長　海軍豫備機關少尉位正八　筏津安信

　　二等運轉士　海軍豫備中尉位從七　木原敏二郎

囑託

雇

船醫　正六位勳四等陸軍三等軍醫正　松井篤二

首席通信士　西小路幸七

一等機關士　牧野忠八

事務長　藤本瑛司

次席通信士　佐野一男

三等運轉士　山根治郎

三等運轉士　浦田楠雄

四等運轉士　細野匡男

二等機關士　前田靜作

技師

○練習船海王丸

船長　正軍豫備大尉位　羽田野二郎

一等運轉士　責金前渡官吏　正軍豫備大尉位　西澤貞德

物品會計官吏

技手

次席一等運轉士　從海軍豫備中尉位　柏野榮一

機關長　從海軍豫備機關中尉位　荒川文雄

二等運轉士　從海軍豫備中尉位　內山三郎

三等運轉士　正海軍豫備少尉位　千葉宗雄

囑託

船醫　動八等海軍主計兵曹長　相川新吾

首席通信士　正八位海軍豫備機關少尉位　上杉宇榮光

事務長　中田宇作

一等機關士　勝田勝郎

三等運轉士　小早川保夫

雇

四等運轉士　長田貢

二等機關士　片山定九二
次席通信士　有馬音一

(五) 生徒

(1) 入所生徒學校別表

年度 / 船別 / 校名	昭和五年度 日本丸	昭和五年度 海王丸	昭和六年度 日本丸	昭和六年度 海王丸
立函館商船學校 北海道 元	三名	二	四	四
立富山商船學校	七名	七	八	八
立三重商船學校 羽鳥	六名	六	八	九
立島根水産學校 元島	六名	七	六	六
縣立岡山商船學校 兒島	五名	六	五	四
立廣島商船學校	九名	九	一二	一二
立山口商船學校 大島	八名	八	八	八
立川崎海航學校 粟島	五名	四	三	二
立愛媛商船學校 削弓	七名	八	二	一
立賀佐商船學校 元佐賀	一三名	一四	一二	一二
立鹿兒島商船學校	一七名	一六	一六	一八
計	八六名	八七	八四	八三
	一七三		一六七	

年度 / 船別 / 校名	昭和七年度 日本丸	昭和七年度 海王丸	昭和八年度 日本丸	昭和八年度 海王丸	昭和九年度 日本丸	昭和九年度 海王丸	昭和十年度 日本丸	昭和十年度 海王丸	昭和十一年度 日本丸	昭和十一年度 海王丸	昭和十二年度 日本丸	昭和十二年度 海王丸	計 日本丸	計 海王丸
立函館商船學校 北海道 元	五	六	四	五	六	五	一	一	一	一	一	一	二二	二二
立富山商船學校	八	八	一〇	一〇	一	一	七	七	四	五	五	四	四九	四九
立三重商船學校 羽鳥	七	七	一三	一三	一一	一一	七	九	一〇	四	九	四	六六	六八
立島根水産學校 元島	六	六	六	五	一	一	一	一	一	一	一	一	二四	二四
縣立岡山商船學校 兒島	一〇	九	六	六	五	五	五	四	七	七	一	二	四四	四三
立廣島商船學校	九	九	一〇	一〇	一一	一一	六	八	一一	一一	六	六	七七	七四
立山口商船學校 大島	八	九	一五	一六	一四	一三	一四	一三	四	四	七	六	七七	七二
立川崎海航學校 粟島	三	三	七	六	六	七	七	七	五	五	四	六	四四	四〇
立愛媛商船學校 削弓	八	九	一〇	一〇	九	一〇	九	四	五	五	七	六	五五	五二
立賀佐商船學校 元佐賀	一一	一〇											三三	三六
立鹿兒島商船學校	一八	一七	一八	一八	一二	一二	一五	一四	一二	一二	七	六	一一五	一一三
計	九九	九三	九九	九一	六八	六七	六五	六六	五八	五八	四一	四〇	五九四	五九三
	一八六		一九八		一三五		一三一		一一六		八一		一、一八七	

(2) 生徒府縣別表

樺太		千葉		北海道	三	東京	一	滋賀		三重	五	徳島		埼玉	一	愛知	一	山口	一二
青森		神奈川		岩手		新潟		富山		宮城	九	兵庫	一	福岡		大阪		高知	
秋田		石川		山形		福井		和歌山		奈良		佐賀	一	熊本		長崎		沖縄	
福島		山梨		茨城		長野		栃木		岐阜		群馬		静岡		廣島	一五	鹿児島	一二
岡山	三	宮崎	一	大分		計	八一												

(3) 生徒氏名

（氏名頭書ノ數字ハ期別記入ナキノハ全部第八期生）

（日本丸乘組）六十一名

氏名	本籍	氏名	本籍
富山縣立商船學校			
7前田良夫	富山	7吉田秀重	石川
城石芳雄	富山	藤井孝一	富山
六渡又芳	富山		
三重縣立鳥羽商船學校			
7野地茂	和歌山	西岡幸雄	三重
横山直衛	北海道	鹿島寛	三重
岡山縣兒島商船學校			
4沖津政章	徳島	7三浦宏	北海道
7義田安夫	岡山	山崎恒男	岡山
廣島縣立商船學校			
7向田進	廣島	7古川三代次	佐賀
谷隆夫	廣島	岸行男	廣島
		7江守公志郎	富山
		高橋喜一	富山
		7渡邊寛	北海道
		北澤勉	北海道
		丸尾彰義	廣島

福岡　伸生　廣島　武田
山口縣立大島商船學校
7小林　隆吉　鳥根　井上　功　廣島
奈良本　幸人　山口　香川　邦介　守　山口　中原　洋雄　山口
吉村　哲次　山口　河本　英雄　山口　田中　治　山口
香川縣立粟島航海學校
6山本　聰雄　岡山　7田中　賢一　香川　7西田　龍一　香川
7日下　忠　香川　笹尾　定光　香川　大西　菊太郎　香川
大森　清　香川　三宅　悍　香川
愛媛縣立弓削商船學校
7杉野　旭　愛媛　7德本　重明　廣島　澤爾　蒿　愛媛
金山　弘　廣島　平山　晋　廣島　柏原　和博　廣島
橋金　正　廣島　安部　重一　愛媛　金久　惠　廣島
鹿兒島縣立商船學校
7上山　雅德　鹿兒島　7水流　利雄　鹿兒島　7鶴田　慶吉　鹿兒島
7石川　義人　鹿兒島　迫田　末義　鹿兒島　大山　壹　鹿兒島
宮元　正夫　鹿兒島　新村　利雄　鹿兒島　牧萬里　郎　鹿兒島

横水　三郎　鹿兒島　野久尾　行方　宮崎
（海王丸乘組）五十九名
富山縣立商船學校
7貝淵　隆明　富山　7高桑　金彌　富山　黑川　熙　富山
河合　藤三　富山　河合　太喜夫　富山　小橋　忠之　富山
三重縣立鳥羽商船學校
7池田　栞　佐賀　宇山　昇　三重　岡島　利夫　三重
八木橋　健治　青森　佐藤　一郎　北海道
岡山縣兒島商船學校
3高原　武夫　岡山　7岡田　孝雄　岡山　7川俣　慶信　北海道
大賀　義雄　岡山　土井　憲次　東京
廣島縣立商船學校
7檀浦　政男　廣島　7倉田　惠介　廣島　7岡本　公平　岡山
野村　達　廣島　木塚　滿雄　佐賀　加藤　宗太郎　愛知
北村　太郎　廣島　吉本　好　廣島　長沼　正寛　廣島
山口縣立大島商船學校
4樋口　滿　福岡　7井上　秀夫　山口　7陶山　正之　福岡

田弘義夫　山口　青木
松岡松彦　山口　松浦　春生　一司　山口
香川縣立粟島航海學校
7松尾幹太　香川　7碣石省三　香川
高橋　茂　兵庫　藤田光雄　香川
龜井龍三　岡山　峰俊正幸　香川
愛媛縣立弓削商船學校
5青山練一　德島　6河本定扶　愛媛
7江戸　力　福井　二久明　愛媛
杉　義　森　愛媛　大村秀雄　愛媛
田頭忠雄　愛媛
鹿兒島縣立商船學校
7宮内一惠　鹿兒島　坂口盛良　鹿兒島
新山　操　鹿兒島　森　重彦　鹿兒島
福丸龍二　鹿兒島

7木原福麿　鹿兒島
坂元正彦　鹿兒島
大久保秀男　鹿兒島
楠見儀市　廣島
日野清　愛媛
上田三郎　香川
秋山末義　香川
岡井勇雄　愛媛

(六) 修了者

(1) 修了者府縣別表

樺太	一	千葉	一	三重	四〇	德島	一〇	栃木	二	岐阜	一二
北海道	二七	東京	五	滋賀	一	香川	五六	宮崎	五		
青森	六	神奈川	一	京都	二	愛媛	六二				
岩手	三	新潟	五	大阪	二	高知	四				
宮城	二	富山	七二	兵庫	一三	福岡	二七				
秋田	六	石川	一四	奈良	二	佐賀	八五				
山形	三	福井	三	和歌山	一五	長崎	九				
福島	四	山梨		鳥取	六	熊本	一三				
茨城		長野	二	島根	四一	大分	九				

群馬	一二	廣島	一〇三
埼玉	二	愛知	一四
計	一〇一四	山口	九一
		沖縄	

(2) 修了者氏名

九百名（期別細字）ハ日本丸（太字）ハ海王丸ニテ修了セル者

昭和六年

修了月日	期	校名	氏名	本籍
七、二一	一	函館	武林俊夫	北海道
同	一	同	阿部正太郎	北海道
同	一	同	福士千代榮	青森
同	一	富山	廣瀨與一	富山
同	一	同	外川進	富山
同	一	同	大西正作	富山
同	一	同	西木信孝	石川
同	一	同	文大芳雄	石川
同	一	同	和田實	富山
同	一	同	棚田安治	富山
同	一	同	金芳秋	富山
同	一	同	二上泰雄	富山
同	一	同	横山政治	石川
同	一	同	伊藤政春	愛知
同	一	鳥羽	中村了三	重
同	一	同	野村四郎	三重
同	一	同	大野三秋	三重
同	一	同	山口貞夫	三重
七、二一	一	鳥羽	村山重壽	岐阜
同	一	同	濱手十郎	和歌山
同	一	同	河合兼松	三重
同	一	同	大林千十	愛知
同	一	同	山根岩治郎	島根
同	一	同	上田良平	島根
同	一	同	黒崎武雄	島根
同	一	同	富松豊高	島根
同	一	同	佐々木禮三	島根
同	一	同	犬谷英壽	島根
同	一	同	大和大一	島根
同	一	同	勝矢三郎	島根
同	一	同	武田英	島根
同	一	同	品川通山	山口
同	一	同	三宅元雄	岡山
同	一	同	松川忠實	岡山
七、二一	一	兒島	東山佐久良	香川
同	一	同	中山明	岡山
同	一	同	佐藤豊治	岡山
同	一	同	植野一太	岡山
同	一	廣島	小早川保夫	廣島
同	一	同	西瀧辰治	香川
同	一	同	幸家旌	廣島
同	一	同	西藤勇	廣島
同	一	同	石德武雄	廣島
同	一	同	竹中義政	廣島
同	一	同	大島春男	廣島
同	一	同	米津德美	廣島
同	一	同	中井忠夫	兵庫
同	一	同	谷野昌	兵庫
同	一	同	田村正夫	山口
同	一	同	上杉春三	廣島
同	一	同	太田悟	兵庫

七、二一
廣島 三上政彦 兵庫
同 松永憲三 兵庫
大島 藤本實男 山口
同 小川勇 山口
同 辻野利夫 山口
同 能勢陽五郎 鹿兒島
同 小林眞喜輔 山口
同 木村權義 山口
同 小川三平 山口
同 新原武次 山口
同 作間良雄 山口
同 粟島 山岡三郎 京都
同 北村仁 香川
同 綱干正夫 香川
同 中村博幸 香川
同 山地等 香川
同 林登 香川

七、二一
粟島 小西要三 香川
同 弓削 村上伊壽夫 愛媛
同 清水正人 岡山
同 俊成正一 愛媛
同 松下賞 愛媛
同 谷本忠英 廣島
同 野中正明 愛媛
同 花房義光 兵庫
同 高原一福 愛媛
同 筒井逞 愛媛
同 佐賀 田中英太郎 佐賀
同 川崎義男 佐賀
同 小島秀雄 鹿兒島
同 西村光雄 佐賀
同 小野清 佐賀
同 永松正巳 佐賀
同 福山鐵男 佐賀

七、二一
佐賀 秀島貞士 佐賀
同 大島作次 佐賀
同 北原正吉 佐賀
同 德久正 佐賀
同 石橋龍雄 佐賀
同 田中高次 福岡
同 小宮重次 佐賀
同 馬場高 佐賀
同 南里茂俊 佐賀
同 千住巖 佐賀
同 西田七次 佐賀
同 青木五郎 福岡
同 吉岡道繁 佐賀
同 石井豊 佐賀
同 鹿兒島 紀英夫 鹿兒島
同 下畝成男 鹿兒島
同 上村清利 鹿兒島

七、二一
鹿兒島 岡留爲也 鹿兒島
同 山下秀雄 鹿兒島
同 脇野新之助 鹿兒島
同 寺前秋義 鹿兒島
同 黑木滿次 鹿兒島
同 前田邦夫 鹿兒島
同 左近充正 鹿兒島
同 迫田忍 鹿兒島
同 川上親幸 鹿兒島
同 森秀勝 鹿兒島
同 園田浩 宮崎
同 永石幸吉 鹿兒島
同 若松利男 鹿兒島
同 森島昌之 大阪
同 永吉等 鹿兒島
同 川畑博 鹿兒島
同 横山鐵男 鹿兒島
同 渡邊德藏 鹿兒島

七、二一　一　鹿児島　松崎正行　鹿児島
同　一　同　東簾應　鹿児島
同　一　同　山本二雄　鹿児島
七、二七　一　廣島　三堂敷夫　廣島
七、三〇　一　鹿児島　高橋吉武　宮崎
七、三一　一　同　柳田常道　鹿児島
七、三一　一　同　湊通次　徳島
八、一　一　鹿児島　平田尚忠　岡山
八、二　一　函館　山崎靜夫　北海道
八、四　一　弓削　花田義夫　愛媛
八、五　一　島根　安部貢　島根
八、六　一　佐賀　内田和夫　佐賀
同　一　鹿児島　金中安雄　島根
八、七　一　鹿児島　中野寛市　岡山
八、九　一　廣島　藤谷太助　廣島
八、一四　一　富山　松本戸余司　富山
同　一　大島　白根一治　山口

八、一四　一　大島　新開哲郎　山口
同　一　佐賀　津川富雄　熊本
同　一　同　中村五郎　福岡
八、一七　一　鹿児島　杉本實藏　兵庫
八、一八　一　佐賀　蒲池新平　佐賀
八、二一　一　大島　西村寛　山口
八、二六　一　弓削　小林正夫　愛媛
九、一八　一　鹿児島　外山亥年男　熊本
一〇、三　一　富山　板倉定義　富山
一〇、一二　一　廣島　廣近久人　廣島
一〇、一七　一　鹿児島　山下金男　鹿児島
一〇、一八　一　弓削　小江義一　廣島
一〇、一九　一　鳥羽　熊平敏彦　靜岡
一一、二　一　鹿児島　和田正之　鹿児島
一一、九　一　島根　山本實次　島根
一一、一一　一　大島　中谷是一　山口
一一、二二　一　粟島　國時力　香川

一二、一三　一　鳥羽　矢田才二　三重
一二、一五　一　兒島　那須文雄　岡山
一二、三一　一　弓削　松葉一秋　兵庫

昭和七年

一、一二　一　弓削　川口孝義　香川
一、一三　一　大島　藏富士雄二　山口
一、一九　一　富山　前手忠一　富山
一、二六　一　同　石田清太郎　富山
一、二七　一　鹿児島　崎山清光　鹿児島
三、一　一　同　市成正一　鹿児島
三、二六　一　佐賀　武富三郎　佐賀
四、一一　二　弓削　山本則光　長崎
四、一二　二　廣島　渡邊滿　愛媛
六、一　一　佐賀　新郷久巳　佐賀
七、一一　二　富山　中島正則　富山
七、一五　二　鳥羽　尾崎茂　三重

七、二〇　二　函館　遠藤恒四郎　秋田
同　二　同　杉本正弘　秋田
同　二　同　石塚軍平　北海道
同　二　同　川村佐吉　北海道
同　二　同　高橋久六　秋田
同　二　同　廣澤親翁　長野
同　二　同　羽・廣長吉　富山
同　二　同　中村・富男　石川
同　二　同　島義誠　富山
同　二　同　森田平作　富山
同　二　同　大浦元行　富山
同　二　同　湯口太一　富山

七、二〇

二　富山　高田正三　富山
同　二　富山　船木光雄　富山
同　二　同　池永友次郎　富山
同　二　鳥羽　中村榮三　三重
同　二　同　大竹榮　静岡
同　二　岐阜　矢野三千二　岐阜
同　二　同　濱口光男　和歌山
同　二　同　田畑秋一　三重
同　二　同　安藤一郎　岐阜
同　二　同　水谷嘉助　三重
同　二　同　館林嘉一郎　静岡
同　二　同　平光五一　岐阜
同　二　同　富澤小七郎　三重
同　二　同　三浦學　愛知
同　二　同　笠原醇　滋賀
同　二　同　川崎克己　兵庫
同　二　島根　藏京松　島根

七、二〇

二　島根　近藤重治　島根
同　二　同　小島利行　千葉
同　二　同　池田静也　長崎
同　二　同　崎野經質　島根
同　二　同　池田房治　長崎
同　二　同　林原福四郎　鳥取
同　二　同　島田久幸　島根
同　二　同　山下吉松　福井
同　二　同　永海達夫　島根
同　二　同　兒島桑名義深　高知
同　二　同　柳生茂久次　香川
同　二　同　大月齊　岡山
同　二　同　八藤甚七　岡山
同　二　同　前原要　岡山
同　二　同　榊原多喜男　兵庫
同　二　同　西田忠敬　廣島

七、二〇

二　廣島　安田金吾　廣島
同　二　小島龜鶴　岡山
同　二　加藤樹一郎　廣島
同　二　黑瀨將治　廣島
同　二　内山博　廣島
同　二　新木卯一　廣島
同　二　山本哲巳　廣島
同　二　白井輝嘉　廣島
同　二　門廣牧夫　廣島
同　二　川村亮　廣島
同　二　森近又一　廣島
同　二　竹田鯛三　廣島
同　二　尾川實檢　山口
同　二　上神久美　廣島
同　二　新林正司　廣島
同　二　船尾忠樹　廣島
同　二　平野武夫　廣島

七、二〇

二　廣島　青木源三　埼玉
同　二　立日平吉　廣島
同　二　岩本英夫　廣島
同　二　大島小方忠夫　山口
同　二　德本新一　山口
同　二　森本勇　山口
同　二　本田利夫　山口
同　二　濱野清五郎　山口
同　二　伊藤理夫　山口
同　二　相原二郎　愛媛
同　二　三輪武人　山口
同　二　西田敏治　山口
同　二　粟島田尾義正　香川
同　二　久米孝八　德島
同　二　濱本茂幸　香川
同　二　出水藤松　香川
同　二　佐賀　井上利夫　佐賀

七、二〇　二　佐賀　江島治八　佐賀
同　二　同　原田誠吾　佐賀
同　二　同　牟田正忠　佐賀
同　二　同　香田清吾　佐賀
同　二　同　松永良吉　熊本
同　二　同　定宗孝之　福岡
同　二　同　北村文雄　佐賀
同　二　同　土屋力　佐賀
同　二　同　池田佐助　佐賀
同　二　同　野中吉見　佐賀
同　二　同　野中直　佐賀
同　二　同　江頭正　佐賀
同　二　同　芹田利助　佐賀
同　二　同　北村鶴次　佐賀
同　二　同　永澤一代　鹿児島
同　二　同　米永貞志　鹿児島
同　二　同　園田義美　鹿児島

七、二〇　二　鹿児島　森　七　二　鹿児島
同　二　同　吉永二男　鹿児島
同　二　同　高山正則　鹿児島
同　二　同　田中純男　鹿児島
同　二　同　畠山五郎　鹿児島
同　二　同　白坂篤文　鹿児島
七、二二　二　大島　石津正秋　山口
七、二五　二　富山　森田太刀　富山
七、二九　二　鹿児島　津留見盛吉　鹿児島
七、三一　二　同　川崎要之助　鹿児島
八、一　二　同　船迫正雄　鹿児島
八、二　二　大島　岡本安純　山口
同　二　栗島　多田完二郎　香川
八、三　二　佐賀　牧口龜雄　佐賀
八、一〇　二　鳥羽　中山正一　和歌山
八、二三　二　廣島　池田仁一　大分
八、二九　二　佐賀　高本正記　熊本

七、二〇　二　鹿児島　山口敬次　鹿児島
同　二　同　福元正澄　鹿児島
同　二　同　米倉誠吉　鹿児島
同　二　同　福元直志　鹿児島
同　二　同　前原忠雄　鹿児島
同　二　同　松田等　鹿児島
同　二　同　中江武秋　鹿児島
同　二　同　大久保清照　鹿児島
同　二　同　橋口光男　鹿児島
同　二　同　藤田政夫　鹿児島
同　二　同　辻萬年　鹿児島
同　二　同　南義盛　鹿児島
同　二　同　中島良治　鹿児島
同　二　同　藤崎宗義　鹿児島
同　二　同　上野愛明　鹿児島
同　二　同　山下好文　鹿児島
同　二　同　大迫經弘　鹿児島

九、一八　二　鳥羽　菅田一雄　愛知
九、一九　二　鹿児島　河島良雄　鹿児島
一〇、一〇　二　弓削　木村勝清　長崎
一〇、一一　二　大島　石丸琴壽　山口
一〇、一五　二　佐賀　中島義雄　佐賀
同　二　同　寺崎貴　佐賀
一〇、二一　二　同　城三郎　佐賀
一一、七　二　鹿児島　木村靜雄　鹿児島
一一、二二　二　函館　中澤正　北海道
一一、二四　二　大島　石井知周　山口

昭和八年

三、一六　二　函館　工藤琢郎　北海道
三、二八　二　島根　竹川佐伊造　島根
四、五　三　鹿児島　末重純雄　鹿児島
四、一一　三　大島　前田半之助　福岡
同　三　弓削　安川龜万夫　愛媛

五、六　二　大島國村猪十　山口
七、一八　二　鳥羽藤原治男　佐賀
七、二〇　三　函館小倉成一　北海道
同　三　田畑久藏　山形
同　三　小田有香　北海道
同　三　藪内四郎　福島
同　三　奥谷慶二　樺太
同　三　藤谷武治　北海道
同　三　北谷正夫　石川
同　三　關昌典　秋田
同　三　安田保男　富山
同　三　平野義男　富山
同　三　橋詰直二　富山
同　三　安部新三　富山
同　三　前手法正　富山
同　三　柴田武　富山
同　三　小路一二郎　富山

七、二〇　三　富山羽柴一雄　富山
同　三　柏信一　富山
同　三　吉森高照　富山
同　三　森田三郎　富山
同　三　稲葉俊夫　富山
同　三　白橋恒雄　静岡
同　三　久保隆　富山
同　三　水原增太郎　和歌山
同　三　江口義雄　佐賀
同　三　神田邦雄　三重
同　三　前田清章　長崎
同　三　北島勝美　佐賀
同　三　松尾忠治　佐賀
同　三　浅野郁男　岐阜
同　三　小西庄二　兵庫
同　三　富田正二　静岡
同　三　深津薫　愛知

七、二〇　三　鳥羽碕口輝治　和歌山
同　三　野中茂雄　熊本
同　三　西村倉一　三重
同　三　川村信夫　三重
同　三　杉本茂　東京
同　三　渡邊三良　三重
同　三　杉浦俊三　三重
同　三　奥川千松　島根
同　三　田中勇　兵庫
同　三　淺生松儀　島根
同　三　野崎公　島根
同　三　吉岡省一　島根
同　三　西田孝壽　長崎
同　三　廣瀨輝昭　島根
同　三　兒島渡邊誠策　新潟
同　三　村瀨久治　岡山
同　三　辻垣正秋　奈良

七、二〇　三　兒島好田毅　岡山
同　三　太田圓三郎　岡山
同　三　佐野辨治　岡山
同　三　木林忠義　岡山
同　三　廣野英男　岡山
同　三　鹽谷實　和歌山
同　三　大西一義　香川
同　三　木口海男　岡山
同　三　福森幸夫　徳島
同　三　古角文作　岡山
同　三　岡野繁明　廣島
同　三　上原秩　高知
同　三　吉村省一　廣島
同　三　高本哲三　廣島
同　三　低押數一　廣島
同　三　石畑守　廣島
同　三　江島克己　佐賀

七、二〇

三　廣島　山本三郎　兵庫
同　有永新一　大分
同　淵山清人　廣島
同　平野米一　佐賀
同　古川敏男　佐賀
同　中島五　廣島
同　栗原重行　佐賀
同　片山隆　島根
同　伊藤正治　廣島
同　近藤顯　愛媛
同　兼武泉　熊本
同　占部達夫　廣島
同　大塚嗣良　佐賀
同　井上眞一　山口
大島
同　山村猛　山口
同　益田時房　山口
同　各務薫　鳥取

七、二〇

三　大島　北山正男　山口
同　濱田一重　山口
同　岩崎眞一　山口
同　岡田丈夫　山口
同　川邊佐吉　福岡
同　宮本政敏　福岡
同　塚本善夫　山口
同　工藤忠治郎　大分
同　飯田正夫　山口
同　栗島　宮武朗　香川
同　朝田正隆　香川
同　小林正雄　香川
同　久保田太郎　兵庫
同　本木國秋　香川
同　佐藤隆一　岡山
同　小田實　愛媛
弓削
同　松浦四郎　愛媛

七、二〇

三　弓削　阿部好美　愛媛
同　菅野嘉　愛媛
同　岩田貞之　愛媛
同　高倉重雄　愛媛
同　吉本季雄　廣島
同　松浦正一　愛媛
同　卷幡義雄　廣島
同　萬代平雄　愛媛
同　百田甫　愛媛
同　岡田正義　廣島
同　齋藤光　北海道
同　森本壽賀弘　愛媛
同　越智貞一　愛媛
同　田中正次　愛媛
同　上山源次　鹿兒島
同　吉留克己　鹿兒島
同　上野要　鹿兒島

七、二〇

三　鹿兒島　山内安智郎　鹿兒島
同　下薗千秋　鹿兒島
同　八木好春　長崎
同　山方清　鹿兒島
同　久富木正一　鹿兒島
同　小倉市藏　鹿兒島
同　稻村薫　鹿兒島
同　金子武次　鹿兒島
同　久米才藏　鹿兒島
同　坂元光治　鹿兒島
同　肱岡登　鹿兒島
同　下池善吉　鹿兒島
同　吉村虎次　佐賀
同　岩下剛　熊本
同　小倉豊　鹿兒島
同　吉野南朝臣　宮崎
同　關儀盛　鹿兒島

七、二〇　三　鹿児島　松元正衛　鹿児島
同　三　同　竹之内享　鹿児島
同　三　同　新郷信治　佐賀
同　三　同　今村義經　鹿児島
同　三　同　宇多撤夫　鹿児島
同　三　同　坂元盛秀　鹿児島
同　三　同　有馬駿　鹿児島
同　三　同　南初盛　鹿児島
同　三　同　池之上龍雄　鹿児島
同　三　同　泊國夫　鹿児島
同　三　同　内田不二雄　鹿児島
同　三　同　鶴見鐵雄　新潟
七、二三　三　大島　光岡昇　佐賀
同　三　島根　吉川智惠人　島根
七、二四　三　大島　中村源吉　山口
七、二六　三　函館　齋藤隆　北海道
七、二八　一　栗島　牧野勝　香川

七、二八　三　富山　綱外二郎　富山
同　三　兒島　德田弘　岡山
八、一　三　鹿児島　坂口松雄　鹿児島
同　二　廣島　光武日出六　宮崎
八、九　三　函館　高根澤秋次郎　栃木
八、一一　三　廣島　兼井正登　廣島
八、一四　三　兒島　潤口八郎　兵庫
八、一五　三　鳥羽　川村正二　三重
八、一六　三　同　關口守男　岐阜
八、一九　三　富山　新保正治　富山
八、二一　三　兒島　清水次郎　岡山
八、二九　三　鹿児島　鰺坂貞興　鹿児島
九、一一　三　廣島　岡田榮藏　高知
九、二六　三　同　澁谷正　佐賀
一〇、一八　三　同　日高末喜　鹿児島
一〇、二三　三　同　諸富孝男　鹿児島
一〇、三〇　三　同　蒲原善次　佐賀

一一、一六　三　廣島　四元武男　鹿児島
一一、一二　三　島根　橋岡數馬　島根
一二、一七　三　鳥羽　戸山春日　福岡

昭和九年

一、五　二　鳥羽　奥田庄吉　德島
三、三　三　兒島　河本博　岡山
七、二〇　四　函館　木山正憲　北海道
同　四　同　小川孝　北海道
同　四　同　中村孫太郎　岩手
同　四　同　小見山十郎　青森
同　四　同　富山　中島勝二　石川
同　四　同　紙田甚作　富山
同　四　同　飯田晋造　富山
同　四　同　高專正　富山
同　四　同　土井久三　富山
同　四　同　鈴見隆　富山
同　四　同　吉川一歐　富山

七、二〇　四　富山　追野健二　富山
同　四　同　上野城　富山
同　四　同　藤森良雄　富山
同　四　鳥羽　中村茂韶　和歌山
同　四　同　小山滿夫　和歌山
同　四　同　瀬野喜四郎　京都
同　四　同　北吉平義　奈良
同　四　同　松林群八　佐賀
同　四　同　山路敏道　三重
同　四　同　福與吾一　靜岡
同　四　同　上村一雄　三重
同　四　同　古賀滿男　佐賀
同　四　同　香月次郎　佐賀
同　四　同　岡田順一　愛知
同　四　同　江尻光政　福島
同　四　同　梶原正美　佐賀
同　四　同　金子爲人　長野
同　四　同　

七、二〇

四 鳥羽 森晃義 三重
同 四 田山正春 福島
同 四 中井寛 三重
同 四 小島明正 福岡
同 四 鶴田良衛 愛知
同 四 酒井雄介 鳥取
同 四 若林光雄 島根
同 四 菅野甫 島根
同 四 三浦善六 島根
同 四 永海逵芳 島根
同 四 上田正男 島根
同 四 荒川正八 山口
同 四 勝矢正道 島根
同 四 石橋憲夫 島根
同 四 山田克夫 島根
同 四 千原勝之 岡山
同 四 兒島 吉岡十二 岡山

七、二〇

四 兒島 首藤戒令 大分
同 四 井上太郎 岡山
同 四 横林謙祐 岡山
同 四 山本久次 愛媛
同 四 高橋門六 廣島
同 四 江藤次男 山口
同 四 池田一夫 廣島
同 四 平潔 廣島
同 四 高橋六一 廣島
同 四 朝日義郎 廣島
同 四 英將三 廣島
同 四 園田義夫 大分
同 四 熊本武男 福岡
同 四 本田與士夫 佐賀
同 四 辻英男 鳥取
同 四 望月皎二 廣島
同 四 北村嘉男 廣島

七、二〇

四 廣島 小川勤 廣島
同 四 園田芳夫 佐賀
同 四 諸浦嘉太郎 島根
同 四 丸尾光郎 廣島
同 四 城野貞夫 佐賀
同 四 池田正秋 佐賀
同 四 大島 井上保 福岡
同 四 秋本博太 山口
同 四 田中房吉 福岡
同 四 杉本文男 山口
同 四 三吉美德 山口
同 四 大木千里 大阪
同 四 小田卓二 島根
同 四 奥濱勝人 山口
同 四 源内義男 山口
同 四 石村源七 山口
同 四 石光輝夫 山口

七、二〇

四 大島 幸尾英治 山口
同 四 末永久夫 山口
同 四 石井二郎 東京
同 四 青柳郁治 福岡
同 四 藤谷勳 山口
同 四 兒林數馬 山口
同 四 阿座上盛一 福岡
同 四 山田滿 山口
同 四 角本清 山口
同 四 田村正人 山口
同 四 横關雪雄 香川
同 四 光山虎一 德島
同 四 山北正義 香川
同 四 樋笠春雄 香川
同 四 三好壽夫 香川
同 四 福家亮月 香川
同 四 友田四郎 愛媛

七、二〇 四 栗島 川井源一 香川
同 四 同 下司日出夫 愛媛
同 四 同 宮崎芳巳 香川
同 四 同 小川勝 香川
同 四 同 阿野繁雄 香川
同 四 同 宇都宮文壽 愛媛
同 四 同 福元治郎 愛媛
同 四 弓削 上甲六太郎 愛媛
同 四 同 堀田耕藏 愛媛
同 四 同 近石昌文 香川
同 四 同 土居一雄 香川
同 四 同 篠原登 愛媛
同 四 同 中野正滿 香川
同 四 同 藤原正 愛媛
同 四 同 木原定 愛媛
同 四 同 西原猛 熊本
同 四 同 阿部茂 愛媛

七、二〇 四 弓削 村上靜雄 廣島
同 四 同 松岡巖 愛媛
同 四 同 柳原啓治郎 愛媛
同 四 同 杉浦敏雄 愛媛
同 四 鹿兒島 三原正吉 宮崎
同 四 同 本間繁雄 新潟
同 四 同 本間政太郎 新潟
同 四 同 高橋辰意 鹿兒島
同 四 同 川原田成 鹿兒島
同 四 同 上野正光 鹿兒島
同 四 同 安藤東與 鹿兒島
同 四 同 中村司 鹿兒島
同 四 同 安田裕好 鹿兒島
同 四 同 福元勝美 鹿兒島
同 四 同 持永良雄 佐賀
同 四 同 長瀨隆俊 鹿兒島
同 四 同 竹下一男 佐賀

七、二〇 四 鹿兒島 岸川林一 佐賀
同 四 同 中川義則 鹿兒島
同 四 同 小田正成 鹿兒島
同 四 同 車田晏常 鹿兒島
同 四 同 加藤聰平 鹿兒島
同 四 同 泊秀雄 鹿兒島
同 四 同 石原政市 鹿兒島
同 四 同 小倉正臣 鹿兒島
同 四 同 畠中菊雄 鹿兒島
同 四 同 岩川春榮 鹿兒島
同 四 同 石原武男 鹿兒島
同 四 同 本田武德 鹿兒島
同 四 同 染河末治 鹿兒島
同 四 同 南里隆 佐賀
同 四 同 山崎寅夫 佐賀
七、二一 四 函館 古畑德美 福井
七、二一 四 大島 大木通夫 山口

七、二二 三 島根 門脇一夫 島根
七、二三 三 廣島 堤直治 佐賀
七、二四 四 大島 田村博 山口
七、二五 四 富山 吉田清則 富山
同 四 鳥羽 倉地松次 岐阜
七、二六 四 兒島 上村保夫 岡山
七、二七 四 廣島 山根稔 鳥取
七、二八 四 大島 宮崎正 長崎
同 四 藤井福市 山口
七、二九 四 富山 上島寅吉 富山
八、五 四 鳥羽 永井小太郎 靜岡
八、六 四 函館 金子忠夫 岩手
同 四 同 須藤保 北海道
八、八 四 大島 中尾豊 山口
八、一二 四 同 田中晋吉 山口
八、二一 四 鹿兒島 稅所敦 鹿兒島
八、二八 四 鳥羽 池野軍一 三重

八、二八　四　兒島　中島　佑　福岡
八、二九　四　同　安井十久雄　岡山
同　四　鳥羽　押田　弘　三重
九、一　四　鹿兒島　松永純一　鹿兒島
九、六　四　富山　堀内典與　富山
九、一五　四　弓削　高橋健吾　愛媛
九、一七　四　富山　川谷内宗作　石川
一二、一　四　同　廣野武隆　富山
一二、一二　四　鳥羽　嶽尾敬弘　三重
一二、三〇　四　鹿兒島　重乃武文　鹿兒島
同　四　富山　堀　清次　富山

昭和十年

一、一〇　四　弓削　關谷益三郎　愛媛
二、五　四　鹿兒島　前野邦一　鹿兒島
二、二二　四　大島　杉村治男　山口
三、一六　四　富山　浦上利直　富山

三、一九　四　富山　森　竹雄　石川
同　五　同　鈴木安司　岐阜
同　五　同　淺井新一　福井
同　五　同　吉田晃　熊本
同　五　同　松原成式　愛知
同　五　同　佐藤作一　三重
同　五　同　奥田邦壯　三重
同　五　同　山崎一義　佐賀
同　五　同　上野篤夫　三重
同　五　同　水谷學　三重
同　五　同　中村典秋　佐賀
同　五　鳥羽　浦田楠雄　三重
一〇、一〇　五　廣島　木村猛　佐賀
五、一三　四　島根　西田玄三郎　島根
三、二四　四　同　江尻弘　富山
六、二七　四　大島　花本磐夫　島根
一〇、七　五　廣島　木村猛　佐賀
一〇、一〇　五　鳥羽　浦田楠雄　三重
同　五　同　中村典秋　佐賀
同　五　同　水谷學　三重
同　五　同　上野篤夫　三重
同　五　同　山崎一義　佐賀
同　五　同　奥田邦壯　三重
同　五　同　佐藤作一　三重
同　五　同　松原成式　愛知
同　五　同　吉田晃　熊本
同　五　同　淺井新一　福井
同　五　同　鈴木安司　岐阜
同　五　同　山科昌三　北海道

一〇、一〇　五　鳥羽　植松春一　岐阜
同　五　同　野村安造　三重
同　五　同　淺野悟郎　秋田
同　五　同　木下五郎　佐賀
同　五　同　渡邊金城　岡山
同　五　兒島　渡邊金城　岡山
同　五　同　柴田秋實　廣島
同　五　同　横溝勝平　岡山
同　五　同　白神毅　岡山
同　五　同　清水福男　岡山
同　五　同　前島義三郎　岡山
同　五　同　山崎敦男　岡山
同　五　廣島　金本順一　廣島
同　五　同　松田幸典　廣島
同　五　同　檜山政美　廣島
同　五　同　皆元泰藏　廣島
同　五　同　元岡高夫　廣島
同　五　同　金丸利夫　廣島

一〇、一〇　五　廣島　淵野巖　佐賀
同　五　同　栗栖長　佐賀
同　五　同　大多信彦　佐賀
同　五　同　福田生太郎　佐賀
同　五　同　高橋初　佐賀
同　五　同　光錢家利　北海道
同　五　同　田村耕男　廣島
同　五　同　中林睦雄　熊本
同　五　同　奥村護夫　廣島
同　五　同　大成勇三　廣島
同　五　同　小林眞　廣島
同　五　同　岡崎明治　廣島
同　五　同　田中市五郎　北海道
同　五　同　遠藤次郎吉　岩手
同　五　同　田中清一　青森
同　五　同　吉岡甬山　山口
同　五　同　井原溫　廣島

一〇、一〇　五　大島　井上直人　山口
同　五　同　井上松雄　福岡
同　五　同　濱田敏雄　山口
同　五　同　藤田一三　山口
同　五　同　内富滿　山口
同　五　同　大元純一郎　山口
同　五　同　中村昇一　山口
同　五　同　柴田正行　福岡
同　五　同　眞井澄　福岡
同　五　同　藏本清弘　山口
同　五　同　上田德太郎　山口
同　五　粟島　山本茂樹　香川
同　五　同　嶋田新市　香川
同　五　同　乃村定雄　香川
同　五　同　齋藤智　香川
同　五　同　松野繁市　香川
同　五　同　西田辰一　香川

一〇、一〇　五　粟島　植松數義　香川
同　五　同　井澤通夫　德島
同　五　同　土井清二　和歌山
同　五　同　喜田岩光　香川
同　五　同　丸尾一男　香川
同　五　同　中川石雄　愛媛
同　五　弓削　池田定正　愛媛
同　五　同　芝博　愛媛
同　五　同　佐伯大藏　廣島
同　五　同　三好勇　愛媛
同　五　同　兵頭章　愛媛
同　五　同　山口善麗　山形
同　五　同　黑田茂信　愛媛
同　五　同　菊池宗夫　愛媛
同　五　同　村田俊作　愛媛
同　五　同　岡井禮　愛媛
同　五　同　小島一眞　愛媛

一〇、一〇　五　鹿兒島　兒玉隆歲　鹿兒島
同　五　同　中村秀則　鹿兒島
同　五　同　川崎哲夫　鹿兒島
同　五　同　田中政次　鹿兒島
同　五　同　村田敏道　鹿兒島
同　五　同　田平清英　鹿兒島
同　五　同　石神正男　鹿兒島
同　五　同　瀨戸口靜熊　鹿兒島
同　五　同　菖蒲谷廣　鹿兒島
同　五　同　池田芳彥　鹿兒島
同　五　同　外山繁　鹿兒島
同　五　同　大村公德　鹿兒島
同　五　同　山崎德光　熊本
同　五　同　鬼塚成男　鹿兒島
同　五　同　片山利久　佐賀
同　五　同　有川政治　鹿兒島
同　五　同　山內敬三　鹿兒島

一〇、一〇　五　鹿兒島　土原晉一　鹿兒島
同　五　同　山口大四郎　佐賀
同　五　同　山田俊彥　鹿兒島
同　五　同　新田早苗　廣島
同　五　大島　河內貞助　山口
一〇、一五　五　粟島　三好重彥　香川
一〇、一七　五　鳥羽　井村淳吾　三重
同　五　兒島　塚越正士　埼玉
一〇、一八　五　廣島　增金豐二　廣島
一〇、一九　五　鳥羽　永井茂夫　和歌山
同　五　兒島　金子稔　靜岡
一〇、二〇　五　廣島　丸尾爲雄　廣島
一〇、二六　五　鳥羽　白橋長治　靜岡

昭和十一年

三、三一　五　鳥羽　佐々木英一　愛知
四、一一　五　同　吉原保行　福岡

四、一七　五　弓削田中勝高　愛媛
四、一八　五　鳥羽濱崎健三　新潟
四、一九　五　弓削八塚秀夫　愛媛
四、二三　五　鹿兒島藤本勝巳　佐賀
四、二七　四　大島藤田了　山口
五、一五　五　弓削出海良雄　愛媛
同　五　大島川本健兒　福岡
九、二四　兒島川口武　岡山
九、一〇　五　廣島今村甚三郎　青森
一〇、一　五　鹿兒島横山茂樹　鹿兒島
一〇、五　六　鳥羽大森研一　愛知
一〇、六　六　大島吉野谷義德　北海道
一〇、一〇　六　富山朝倉昌俊　富山
同　六　同林俊之　富山

一〇、一〇　六　富山竹島巳次郎　富山
同　六　同中村義正　富山
同　六　同前田正直　富山
同　六　同河村得順　富山
同　六　同眞木甚策　富山
同　六　同片岡全之助　富山
同　六　同八木安次郎　石川
同　六　同關重信　富山
同　六　鳥羽和田道夫　岐阜
同　六　同三輪忠平　岐阜
同　六　同關啓八　秋田
同　六　同山田將治　石川
同　六　同近藤辰郎　靜岡
同　六　同玉置景治　三重
同　六　同大藏敏夫　大分
同　六　同村上堯　德島
同　六　同大森秀夫　愛知

一〇、一〇　六　鳥羽竹內清磨　三重
同　六　同鈴木末雄　愛知
同　六　同市江義治　愛知
同　六　兒島日笠行雄　岡山
同　六　同大森四郎　岡山
同　六　同田口十九一　岡山
同　六　同三宅實　岡山
同　六　同古市元造　岡山
同　六　同尾崎柳吉　和歌山
同　六　同福家英也　岡山
同　六　同宇野精二　岡山
同　六　廣島木原金一　廣島
同　六　同横山公平　廣島
同　六　同松浦武　廣島
同　六　同田中正五郎　長崎
同　六　同大隈勘次　佐賀
同　六　同雲野賢明　熊本

一〇、一〇　六　廣島大川篤　佐賀
同　六　同佐伯守　廣島
同　六　大島長見岩夫　山口
同　六　同安尾幸典　山口
同　六　同岡崎春市　山口
同　六　同山西清　山口
同　六　同原田益雄　山口
同　六　同三好清滿　北海道
同　六　同齋藤治一郎　青森
同　六　同高須正雄　福岡
同　六　同石橋實　福島
同　六　同吉田正喬　福岡
同　六　同柄澤邦雄　北海道
同　六　同大下滿男　山口
同　六　同潮德男　鳥取
同　六　同原利男　山口
同　六　同後藤直司　宮城

一〇、一〇	六	大島	石井眞一	山口
同	六	同	木下長太郎	北海道
同	**六**	粟島	今川澄彦	香川
同	六	同	安藤利久	香川
同	**六**	同	近本孝	香川
同	**六**	同	大西弘	香川
同	**六**	同	三ケ島起	福岡
同	**六**	同	林勇	德島
同	六	同	竹中鞆喜	德島
同	六	同	岡田貞良	岡山
同	**六**	弓削	河野龜一	廣島
同	六	同	工藤一	愛媛
同	六	同	谷本正義	廣島
同	六	同	矢野榮	愛媛
同	六	同	鎌田典賀	廣島
同	六	鹿兒島	時吉半七	鹿兒島
同	**六**	同	長濱操	鹿兒島

一〇、一〇	**六**	鹿兒島	鬼塚善臣	鹿兒島
同	**六**	同	脇黒丸光夫	鹿兒島
同	六	同	橋口榮藏	鹿兒島
同	六	同	外薗魁	鹿兒島
同	**六**	同	馬場美代二	鹿兒島
同	**六**	同	高元憲綱	鹿兒島
同	**六**	同	井手武男	鹿兒島
同	六	同	山本幸雄	鹿兒島
同	**六**	同	上釜孝	鹿兒島
同	**六**	同	中原匡	鹿兒島
同	**六**	同	永野正六	鹿兒島
同	六	同	松原傳一	鹿兒島
同	**六**	同	平野健兒	佐賀
同	六	同	猿渡俊夫	佐賀
同	六	同	上原布二男	鹿兒島
同	六	同	木場华人	東京
同	**六**	同	小田達嗣	佐賀

一〇、一〇	六	鹿兒島	本村茂	佐賀
同	六	同	村岡敏矢	鹿兒島
同	六	同	濱村巽	鹿兒島
同	六	同	藤政一	山口
同	六	同	藤野圓	鹿兒島
同	六	同	前田耕作	鹿兒島
一〇、一四	六	大島	增本義孝	島根
一〇、一九	**六**	鹿兒島	田石貫二	鹿兒島
同	**六**	粟島	佐伯義雄	香川
一〇、二〇	六	廣島	竹崎逸郎	高知
同	**六**	同	福島晴旭	山口
同	**六**	弓削	神林正義	栃木
一〇、二一	**六**	鳥羽	内藤平七	三重
一〇、二六	五	弓削	渡邊清	愛媛
一〇、二九	**六**	廣島	瀧本	廣
一〇、三一	六	大島	菊本又八	山口
一一、三	六	大島	市川希彦	山口

一一、七	六	廣島	田中六二	福岡
一一、一一	六	鹿兒島	吉崎正臣	鹿兒島
一一、一三	六	粟島	永瀨國繼	大分
同	**六**	廣島	宮岡正之	德島
一一、一七	**六**	大島	迫米一	山口
一一、三〇	**六**	富山	兩瀨清次郎	富山

昭和十二年

一、一三	六	粟島	岡本實	香川
一、三〇	六	粟島	天弘卓二	香川
二、一五	五	弓削	中村信夫	愛媛
二、二一	**六**	大島	廣渡芳美	福岡
二、二五	**六**	大島	野上文雄	山口
二、二七	**六**	鹿兒島	粟原邦雄	熊本
三、八	六	鳥羽	小早川隆夫	靜岡
三、一九	**六**	粟島	福井貢	香川
四、一七	廣島	土屋龍治	廣島	

四、三	七	鹿児島	小倉清熊	鹿児島
四、八	七	廣島	三宅健一	廣島
四、一二	六	鹿児島	野口鐵雄	鹿児島
四、一三	六	廣島	丸屋達郎	廣島
四、二三	六	大島	落合次郎	山形
同	五	鹿児島	野中榮	佐賀
四、二七	六	大島	渡邊輸四郎	北海道
六、二五	五	栗島	蓮井勇	香川
九、二六	六	兒島	田崎黄揚造	大分
一〇、一〇	七	富山	石崎行雄	富山
同	七	同	吉田文三	富山
同	七	同	森田信夫	富山
同	七	同	本江久三	富山
同	七	同	山本豊孝	富山
同	七	鳥羽	和田春生	三重
同	七	同	水野金雄	愛知
同	七	同	南定雄	三重

一〇、一〇	七	鳥羽	神谷義康	岐阜
同	七	同	岡島覺	三重
同	七	同	野村俊博	三重
同	七	同	筒井堅一	和歌山
同	七	同	大坪靜磨	佐賀
同	七	同	引間久	東京
同	七	同	中村吉次	佐賀
同	七	同	須本茂	和歌山
同	七	同	濱口正彦	三重
同	七	同	林文治	三重
同	七	同	池田良三	神奈川
同	七	同	中川健三	和歌山
同	七	同	横田忠男	兵庫
同	七	兒島	黒川富雄	北海道
同	七	同	岡村辰彦	東京
同	七	同	高橋典一	北海道
同	七	同	大木清	岡山

一〇、一〇	七	兒島	大上武男	北海道
同	七	同	村上英一	宮城
同	七	同	山本喜一	岡山
同	七	同	廣田作太郎	富山
同	七	同	一戸正彦	青森
同	七	廣島	松本吉近	廣島
同	七	同	古川三代次	佐賀
同	七	同	谷口久雄	廣島
同	七	同	金久林	大分
同	七	同	信谷雷次	廣島
同	七	廣島	溜筈隆登	廣島
同	七	同	白井千秋	廣島
同	七	同	井筒幸治	廣島
同	七	同	伊達雅人	廣島
同	七	同	淵山俊郎	廣島
同	七	同	水野賢	廣島
同	七	同	根角亨	廣島

一〇、一〇	七	廣島	木村福三	廣島
同	七	同	原田孟	廣島
同	七	同	高田策朗	廣島
同	七	同	和田重嗣	山口
同	七	同	清水豊	山口
同	七	大島	松田茂	山口
同	七	同	廣兼享	山口
同	七	同	岩崎富	福岡
同	七	粟島	棟保一	香川
同	七	同	唐太登	香川
同	七	同	宮西登	香川
同	七	同	宮下惇	香川
同	七	同	山神義寛	福岡
同	七	弓削	中矢健二郎	愛媛
同	七	同	廣田麟一	愛媛
同	七	同	高須賀武夫	愛媛
同	七	同	木村壽	愛媛

一〇、一〇	七	弓削	河野通温	愛媛
同	七	同	小野勝静	岡
同	七	鹿児島	川邊福市	鹿児島
同	七	同	濱田良巳	鹿児島
同	七	同	川崎兼備	鹿児島
同	七	同	神宮魁	鹿児島
同	七	同	升田長作	石川
同	七	同	仲藤禎介	山口
同	七	同	大朝伸健	鹿児島
同	七	同	石田信行	鹿児島
同	七	同	竹下政春	鹿児島
同	七	同	有馬公記	鹿児島
同	七	同	武林健吉	鹿児島
同	七	同	滿田精一	鹿児島
同	七	同	久保滿成	鹿児島
同	七	同	福元維	鹿児島
同	七	同	有村富男	鹿児島
一〇、一〇	七	鹿児島	佐多均	鹿児島
同	七	同	泉俊夫	鹿児島
同	七	同	秋山彰	鹿児島

二、本年度記事（自昭和十一年十月十一日 至昭和十二年十月十日）

(一) 練習船ノ動靜

(1) 航海統計

船別	日本丸		海王丸	
要項＼次號	第十五次	第十六次	第十五次	第十六次
發航年月日	昭和十一年十二月一日	昭和十二年四月二十七日	昭和十二年一月十二日	昭和十二年五月十五日
歸航年月日	昭和十二年二月十六日	昭和十二年九月七日	昭和十二年三月八日	昭和十二年九月十六日
總航海日數	七八日	一三四日	五六日	一二五日
帆走日時	五六日一六時二四分	一〇一日〇九時一二分	三六日〇二時三九分	一〇二日二〇時三九分
帆走距離	六八八三浬	一〇、五五五浬	四、六七五浬	一〇、五六〇浬
機走日時	二日〇七時四一分	一四日二一時〇八分	三日一一時二一分	四日一〇時三六分

機走距離	四六六浬	二、九五八浬	七〇九浬	八一五浬
寄港地	横濱、ポナペ、パラオ	ヒロ、クヒチ、ヤルート、横濱	トラツク、横濱	プリンス・ルパート、ポート・アレン、横濱
乘組員數 職員	一四名	一四名	一四名	一四名
生徒	六九名	五一名	七三名	五一名
普通海員	四〇名	四五名	三九名	四四名

備考　右航海ノ外日本丸ハ昭和十一年度觀艦式拜觀ノタメ神戸ヘ一航海（航海日數九日、航程七八三浬）海王丸ハ入渠ノタメ横濱ヘ一航海（航海日數四六日、航程二八浬）ノ各短期航海ヲ施行セリ

(2) 航海記事

○日本丸第十五次航海

昭和十一年十二月一日東京港ヲ出帆シ横濱寄港ノ上同月三日同地ヲ發シテ**ポナペ**島ニ向ヒ、同日午後野島埼沖合ヨリ帆走ニ移ル、爾來日本近海ハ概シテ偏西ノ順風ニ惠マレテ東航スルヲ得同月十日東經一六〇度ニ達シテ南下ヲ開始セル頃ニハ氣壓配置ニ依ル偏北風ヲ得次デ無風ヲ經驗スルコトナクシテ偏北東恒風帶ニ入進シ全航海ヲ通シテ概シテ適風ニ惠マレテ十二月二十五日**ポナペ**島ニ到着シタリ。**ポナペ**島碇泊中ハ驟雨頻繁ナリシモ風力概シテ弱勢ナリキ、主ナル行事ハ南洋事情講演會、**ナンマタル**遺跡見學、海錨及防水蓆使用法實習、柔劍道、野球及庭球試合、**ポートレース**等ナリ。

一月三日**ポナペ**島ヲ出帆、北東恒風ニ駕シテ**カロリン**群島北方ヲ西航シ同月十五日**パラオ**港ニ到着セリ。

パラオ港ハ日本丸トシテハ最初ノ訪問ニシテ碇泊中ハ概シテ好晴ニ惠マレ多忙ナル各種行事ヲ通シテ充分ニ見學ノ目的ヲ達スルヲ得タリ、主ナル行事ハ南洋事情講演會、眞珠貝採取業講演會、武道、庭球及野球試合、同地青年團員ノ本船見學其他ナリキ。

一月二十二日**パラオ**港ヲ出帆、同港ノ南方約四〇浬ニ在ル**アンガウル**島ニ假泊シ燐鑛石採取狀況ノ見學ヲナシタル後北東恒風ヲ利用シテ北航ヲ開始シタルガ同月二十八日北緯一八度ニ達シタル頃ヨリ恒風衰ヘ不定風トナリタリ、爾來適風ヲ利用シテ極力帆走ヲ以テ北上ヲ試ミ沖繩島及種子島東方ヲ經テ二月十二日正午ニハ足摺埼ノ南方約六〇浬ノ位置ニ達ス。翌十三日ヨリハ本船ノ南方ヲ東進セル一低氣壓ノ影響ニヨル偏北風ヲ得テ東京海灣ニ向ケ東航シ同月十六日横濱ニ到着シ諸手續ヲ了シタル後即日東京港ニ歸着シ無事第十五次航海ヲ終了セリ。

本船ハ第七期生最初ノ遠洋航海ナルニ鑑ミ先ヅ帆船運航ニ必要ナル技術ノ熟達ヲ圖リ然ル後時宜ニ適シタル作業、學習等ヲ課シ概ネ所期ノ目的ヲ達シ得タリ。衞生狀態ハ佳良ニシテ士氣旺盛ナリキ。

○日本丸第十六次航海

昭和十二年四月二十七日東京港芝浦岸壁ヨリ出帆シ同日房州沖ニ於テ帆走ニ移リタルモ爾來兩三日間偏東逆風ニ遭遇シ五月一日ヨリ順風ヲ得テ快走スルニ至リ同月十二日百八十度經線ヲ通過シ尙東航ヲ繼續シタルガ十九日南航ヲ開始セル頃ヨリ逆風若クハ不定風トナリ且ツ北緯二九度以南ニ於ケル恒風モ亦弱勢ナリシヲ以テ適宜機走ヲ混用シテ六月五日布哇島**ヒロ**ニ到着セリ。**ヒロ**碇泊中特務艦隱戸ガ桑港ヨリ內地ヘノ歸途同地ヘ寄港シタルガ碇泊六日間在留同胞ノ多大ナル厚意ニ依リ充分ニ見學及休養ノ目的ヲ達シ得タリ。主ナル行事ハ**キラウエア**火山見學、製糖工場見學及墓參、布哇事情講演會、柔劔道試合、角力大會等ナリ。

六月十一日**ヒロ**ヲ出帆シ偏東乃至北東恒風ヲ利用シテ北緯五度附近ニ達シ然ル後赤道無風帶ハ大體機走ニ依リ橫斷シ同月二十四日西經一四五度二四分ニ於テ赤道ヲ通過ス、此頃ヨリ偏南東恒風吹來セルモ未ダ微弱ニシテ南緯三度以南ニ於テ漸ク風力ヲ加ヘタリ。斯クテ七月一日南緯一四度以南ニ達シテヨリ機走ヲ始メ同月三日**タヒチ**島**パピエテ**港ニ到着セリ

タヒチ島碇泊中ハ佛國官民ノ公式招待ハナク、又在留同胞ハ少數ナリシニモ拘ラズ見學案內及斡旋ノ勞ヲ執ラレタリ。

七月十日**パピエテ**港ヲ出帆シ直チニ帆走ニ依リ**ヤルート**島ニ向ヒタルモ風力微弱ナリシヲ以テ北西方ニ進出シ南緯一〇度以北ノ南東恒風强吹區域ニ進出セリ、然ルニ西經一七〇度ト一八〇度ノ間ニ於テ不定風ニ遭遇シ一部機走ヲ實施シツツ**ギルバート**諸島ノ西方ヨリ偏東風ヲ利用シテ北上シ赤道ニ達シタルガ此附近ニ於テ無風トナリタルヲ以テ再ビ機走ニ移リ八月八日**ヤルート**島ニ到着セリ。

ヤルート島碇泊ハ僅カ三日ナリシガ充分ニ見學及交歡ノ目的ヲ達シ得タリ。

八月十一日**ヤルート**島ヲ出帆シ同環礁ノ南角ヲ繞航スルヤ帆走ニ移リタルモ**マーシャル**群島間ハ北東恒風不定ニシテ同群島北方ニ出ヅルニ及ビ定吹シ南鳥島ノ南方ニ於テ北緯二〇度ニ達シタルモ以後ハ連日無風又ハ不定風ニ遭遇セルヲ以テ已ムナク九月四日夜半ヨリ機走ニ移リ同七日橫濱ニ到着シ諸手續完了ノ上卽日東京ニ歸着シ無事第十六次航海ヲ終了セリ。

全航海ヲ通ジ概シテ好晴ニ惠マレ復航ニ於テハ暑氣强カリシモ天候平穩ニシテ作業學習及各種訓練ヲ通シ畧々豫期ノ練習目的ヲ達シ得タリ。衞生狀態亦一般ニ佳良ナリキ。

○海王丸第十五次航海

昭和十二年一月十二日東京港芝浦岸壁ヲ解纜シテ第十五次航海ノ途ニ就キ同日午後野島埼沖合ヨリ帆走ニ移リ概シテ偏北乃至偏北西ノ順風ニ乘ジ**ガンヂス**洲ノ北方ヲ經由シテ東航シツツ漸次南下シ二十二日ニハ北緯二七度東經一六六度ノ位置ニ達ス、此頃ヨリ無風トナリタルヲ以テ二晝夜餘ノ機走ヲ施行シ二十六日ニハ北緯一七度東經一六四度ニ至リ爾來北東恒風ノ定吹ヲ得テ快帆走ヲ續ケ二月一日**トラツク**島ニ到着セリ。

トラツク島碇泊ハ十五日ニ及ビタルガ此間南洋事情講演會柔劔道試合端艇帆走競爭、春島端艇遠漕、野球及庭球試合、特務艦**膠州**見學、等ノ諸行事ヲ施行シ特ニ今回ハ水曜島**フアソン**錨地ヘ回航ヲ行ヒ充分ニ見學ト訓練ノ目的ヲ達シ得タリ

二月十六日**トラツク**島ヲ發シ北東恒風ヲ利用シテ北航シ同月二十一日**アナタハン**島ノ西方至近ヲ經テ**マリアナ**群島西方ニ出デタリ此頃ヨリ天候狀態稍々亂レタルモ猶適風ヲ得テ北上スルヲ得三月四日ニハ北緯三一度東經一三五度ノ位置ニ達シ折柄强吹セル偏西風ニ乘ジ八丈島東方海上ニ出デ風向ノ好轉ヲ待チテ東京海灣ニ接近セントシタルモ當時本州南岸ヲ東進セル低氣壓ノ影響ニ依リ天候惡化ノ徵アリタルヲ以テ七日ヨリ機走ニ移リ同日夕頃根岸灣ニ投錨假泊シ翌八日横濱ニ入港シ諸手續ヲ了シタル後卽日東京港ニ歸着シ無事第十五次航海ヲ完了セリ。

第七期生ニハ船內生活ヲ通ジテ海員的精神並ニ技倆ヲ錬磨セシムルコトヲ主眼トシテ練習セシメ先ヅ帆船運航ニ必要ナル諸操作ニ習熟セシメタル後各種作業及學習ヲ課シタリ。全航海ヲ通ジテ衞生狀態ハ極メテ佳良ニシテ士氣旺盛ナリシガ往航ニ於テ普通海員ヨリ作業中一名ノ負傷者ヲ生ジタリ。

○海王丸第十六次航海

昭和十二年五月十五日東京港芝浦岸壁ヲ解纜シ同夜ハ館山灣ニ假泊シ翌十六日野島埼沖合ヨリ帆走ヲ開始ス、爾來風向風力ニハ消長アリタルモ概シテ西半圓ノ順風ニ惠マレテ連日概ネ快走ヲ續ケ東航シツツ漸次北上シ同月二十九日北緯三七度五〇分ニ於テ一八〇度經線ヲ通過シ西經一七〇度附近**デイクソン**海峽ニ向ケ直航ヲ開始シタリ、然ルニ六月十二日北緯四九度西經一四九度附近ニ達セル頃ヨリ風向、風力共ニ不定トナリタルガ尙極力目的地ニ向ケ帆走ヲ繼續シ同月二十四日**デイクソン**海峽西方約四〇浬ノ位置ニ達シテ機走ニ移リ**ブラウン**海峽ヲ經テ翌二十六日**プリンスルパート**ニ到着セリ

加奈陀**プリンスルパート**ヘ本邦練習船ノ來訪セルハ今回ガ始メニシテ在留同胞ニハ極メテ有力ナル刺戟トナリ又日、加官民一同ヨリ極メテ熱誠ナル歡待ヲ受ケタリ。主ナル行事ハ市內見學、加奈陀事情講演會、**スキーナ**河鮭漁場見學、日、加人官民トノ各種交歡會、帆前操練及柔劔道ヲ市民ニ供覽等ナリキ。

七月三日**プリンスルパート**ヲ發シ**デイクソン**海峽ヲ經テ外洋ニ出デ翌四日**ランガラ**島沖合ヨリ帆走ニ移ル、爾來約一週間天候不安定、風向風力共ニ不定ナリシガ同月十日**ホアン・デ・フカ**海峽西方沖合ニ達セル頃ヨリ偏西乃至偏北西流行風ヨリ定吹シ北米大陸西岸ニ沿ヒ連日快走南下スルヲ得二十日北緯三〇度附近ヨリハ北東恒風定吹セルヲ以テ一路布哇群島ニ向ケ直航ヲ開始シ三十一日布哇**ポート・アレン**ニ到着セリ。

加哇島ヘ練習船ノ來訪セルハ去ル昭和七年大成丸ノ來航以來五箇年振リニシテ當地ノ在留同胞ハ旣ニ各方面ニ健實ナル發展振リヲ示シ本船ノ來航ニ際シテハ全島ヲ擧ゲテノ歡待ヲ受ケ見學上得ル所尠カラザルモノアリタリ主ナル行事ハ加哇島東部及西部見學、製糖工場及鳳梨罐詰工場見學、當地第二世ト本船生徒トノ柔劔道及角力試

合、布哇事情講演會、各地ニ於ケル講演會ニ職員及生徒ノ出席及各種交歡會出席等ナリキ。

八月八日**ポート・アレン**ヲ發シ北東恒風ニ駕シ**カウラ**島ノ南方ヲ經テ大約北緯二一—二二度ノ距等圏ヲ快走西航セルガ同月十七日一八〇度經線ヲ通過セル頃ヨリ恒風漸ク衰ヘ二十七日北緯二二度東經一六六度附近ニ達セル頃ヨリ小笠原群島東方ニ蟠踞セル高氣壓ノ影響ニ依リ長期ノ無風ニ遭遇セルヲ以テ一部機走ニ依リ此區域ヲ横斷ス然ルニ本州南岸ニ接近セル頃ヨリハ低氣壓ノ影響ニ依ル適風ヲ受ケテ再ビ快走スルヲ得九月十五日ニハ三宅島ノ東方ニ達シ然ル後機走ニ移リテ十六日横濱ニ到着シ諸手續ヲ了シタル後即日東京港ニ歸着シ無事第十六次航海ヲ終了セリ。

本船ハ往航北太平洋ニ於テハ數回荒天ニ遭遇セルモ却ツテ生徒訓練上好機會ヲ得タリ、復航ハ其大部分熱帶地方ナリシモ小笠原群島東方ノ無風區域以外ハ暑氣甚シカラズ一般ニ快適ナル天候ニ惠マレ豫定ノ計畫ニ則リ作業學習其他ヲ施行シ畧々所期ノ効果ヲ收メ得タリ。衞生狀態ハ全期間ヲ通ジテ極メテ良好ニシテ特筆スベキ傷病者ナク士氣極メテ旺盛ナリキ。

(3) 見學並講演

○日本丸

昭和十一年

十月十五日　明治神宮及宮城參拜

十一月十日　水路部及朝日新聞社見學

十一月十八日　新宿御苑拜觀及中央電話局見學

十一月三十日　講演　米國帆船廻航談　砂畑五作氏

十二月二十八日　**ナンマタル**遺蹟見學（**ポナペ**）

十二月三十日　講演（**ポナペ**管内事情　現今ノ世界情勢ト吾人ノ覺悟）　**ポナペ**支廳長　海軍少將　田中茂氏　植松錬磨氏

昭和十二年

一月十六日　講演　南洋群島方面水路概要（**パラオ**）　海軍大佐　小西干比古氏

南洋群島ノ重要性　（〃）　海軍少佐　高橋長十郎氏

南洋群島方面氣象概況（〃）　觀測所長　川崎英男氏

一月十八日　講演　眞珠貝採取事業ニ就テ（〃）　宮崎虎二郎氏　樺山進氏

四　月十三日　東京高等商船學校見學

六　月　五　日　**キラウエア**火山見學(**ヒロ**)　日布時事**ヒロ**支局長　村上實氏

六　月　七　日　講演　布哇ニ於ケル日本人　市川夫人

布哇ノ音樂ニ就テ(英語)　**ヤルート**支廳　岩切幸吉氏

八　月　八　日　**マーシャル**群島事情　港務官　外山三郎氏

○海王丸

昭和十一年

十　月十四日　宮城及明治神宮參拜

十　月二十八日　船内除鼠消毒法ニ就テ(横濱)　支廳長　山本繁藏氏

十一月　三　日　大倉精神文化研究所見學

昭和十二年

一　月　九　日　東京朝日新聞社見學

二　月　三　日　**ララ**村島民部落見學(**トラツク**)

二　月　四　日　南洋事情講演　(　〃　)

二　月　九　日　特務艦**膠州**見學　(　〃　)　水曜島日本人會長　森小辨氏

二　月十三日　體驗談　(　〃　)

四　月十四日　水路部及船舶試驗所船用品試驗室見學

四　月二十三日　高等海員審判所傍聽

四　月二十九日　講演　若キ人々ト共ニ　陸軍省新聞班　大内俊氏

五　月十二日　政治博覽會(舊議事堂跡ニ開催)見學

六　月二十六日　揚穀機、冷藏庫、乾船渠及市内見學(**プリンス、ルパート**)　日本人會長　清水庄太郎氏　外數氏

六　月二十七日　加奈陀事情講演　**プリンス、ルパート**

六　月二十九日　**スキーナ**河鮭漁場見學(**プリンス、ルパート**)　下院議員　**マスリノ**氏

七　月三十一日　講演　布哇ノ歴史(英語)　辯護士　田代優氏

布哇ニ於ケル日本人二世ノ活動狀況(英語)　西部教育會長　久保田佐一郎氏

布哇事情一般

八　月　二　日　加哇島東部見學(製糖工場及**ナヴイリヴイリ**港ヲ見學ス)

八　月　三　日　鳳梨鑵詰工場見學
八　月　四　日　加哇島西部見學

(二)　人事異動其他

昭和十一年
十　月十　四　日　第七期生入所式學行
十　月二　十　日　囑託松田辨一願ニ依リ囑託ヲ解ク
囑託今藤文十郎願ニ依リ囑託ヲ解ク
藤本瑛司航海練習所事務ヲ囑託ス、日本丸事務長ヲ命ス
十一月三　十　日　技手安藤平八郎遞信技手ニ轉任ス
筏津安信航海練習所技手ニ任ス、日本丸機關長ヲ命ス
事務囑託安藤孝吉航海練習所技術ヲ囑託ス
十二月　一　日　囑託安藤孝吉日本丸勤務ヲ命ス
十二月二十八日　技師羽田野二郎海王丸一等運轉士ヲ免シ海王丸船長ヲ命ス

昭和十二年
一　月　四　日　技師羽田野二郎海王丸資金前渡官吏並物品會計官吏ヲ免ス
技師西澤貞德海王丸資金前渡官吏並物品會計官吏ヲ命ス
一　月　八　日　囑託村田恭造願ニ依リ醫務囑託ヲ解ク
技手中井積願ニ依リ本官ヲ免ス
小口義彦海王丸臨時機關長ヲ囑託ス
一　月　九　日　相川新吾航海練習所醫務ヲ囑託ス、海王丸船醫ヲ命ス
一　月十　三　日　技師宮本吉太郎願ニ依リ本官ヲ免ス
二　月二十二日　囑託安藤孝吉日本丸勤務ヲ解ク
三　月三十一日　囑託木原敏二郎航海練習所技術囑託ヲ解ク、航海練習所技手ニ任ス、日本丸二等運轉士ヲ命ス
囑託千葉宗雄海王丸三等運轉士兼無線電信聽守員囑託ヲ解ク、航海練習所技手ニ任ス、海王丸
三等運轉士ヲ命ス
囑託原順技術囑託ヲ解ク

囑託牧野忠八日本丸二等機關士囑託ヲ解ク、航海練習所技術ヲ囑託ス、日本丸一等機關士ヲ命ス

四　月　五　日　技手柏野榮一航海練習所技師ニ任ス

四　月二十　日　前田靜作雇ヲ命ス、日本丸二等機關士ヲ命ス

四　月二十三日　浦田楠雄航海練習所技術ヲ囑託ス、日本丸三等運轉士ヲ命ス

四　月二十六日　本田宗四郎臨時雇ヲ命ス、日本丸次席通信士ヲ命ス

五　月十　三日　囑託小口義彦海王丸臨時機關長囑託ヲ解ク

荒川文雄航海練習所技手ニ任ス海王丸機關長ヲ命ス

五　月十　四日　有馬晉一雇ヲ命ス、海王丸次席通信士ヲ命ス

九　月　八　日　臨時雇本田宗四郎臨時雇ヲ解ク

九　月二十一日　第八期生入所許可ス

十　月　十　日　第七期生課程修了修了證書授與ス

第八期生入所ス

(三)　雜　錄

教授方法と實習指導

吉利　巖氏講演

昭和十一年八月於文部省主催商船學校教員夏期講習

教育ノ改善トイフコトニ付キマシテハ、先年來各方面デ色々ト研究サレタ案ガ發表サレテ居ルヤウデス。

先日兵庫縣ニ於キマシテ、實業教育振興協會トイフモノガアリマシテ、ソノ工業部會デ、工場經營者ニ對シテ現今ノ教育ニ對スル批判ヲ求メテ、ソノ批判ヲ皆集メタ**パンフレット**ヲ拜見シマスト、言ヒ合ハシタヤウニソノ希望ハ、現在ノ卒業生ハ德性ガ缺ケテ居ル、ドウカソノ德性ヲ十分ニ涵養スルヤウニシテ貰ヒタイトイフコトヲコレハモウ殆ンドロヲ同ウシテ要求サレテ居ツタヤウデス。

ソノ德性トイフコトヲ具體的ニ分解シテ見マスト、ドウイフコトガ缺ケテ居ルカトイフト、和衷協同ノ精神ガナイ、責任ノ觀念ガ乏シイ、勤勉努力ノ氣風ガ缺ケテ居ル、コレ等ガ最モ力强ク唱道サレテ居ツタヤウデス。

次ニハ禮儀ガ惡イ、質實剛健ナ氣風ガ缺ケテ居ル、意氣ガ悄沈シテ居ル、斯ウイフヤウナコトデアツテ、考へ

テ見ルト何レモ肯綮ニ當ツテ居ルヤウニ考ヘラレル。

次ニハ部下ヲ使フ態度ガマコトニ淺間シイ、ドウカ部下ヲ使フニハ言語態度等ニ至ルマデ、相當ノ訓練ヲシテ貰ヒタイ、ソレデナイト相當上ノ方ニ引上ゲテヤラウト思ツテモ引上ゲルコトガ出來ナイ。

次ニハ勞働ノ神聖トイフコトヲ眞ニ腹ニ信ジテ行フヤウニ訓練ヲシテ貰ヒタイ。

ソレカラ次ニハドウモ同情ノ氣ニ乏シイ、コレハ敬神ノ念ニ缺ケテ居ルタメダト思フ、ドウカ敬神ノ念ヲ養ツヲ情操ヲ豐ニシテ貰ヒタイ。

次ニドウモ技術者ハ偏屈デイカヌ、洵ニ自己ニ捉ハレテ人ノ良イコトヲ取入レル餘裕ガナイ、ドウカコノ偏屈ヲ取除イテ餘裕アルヤウニシテ貰イタイトイフヤウナコトデアツタヤウデス。

何レモコレ等ハ知識ヲ以テ授ケラレルコトデナク、ソノ人ノ情操ノ中ニ疊ミ込マナケレバナラナイ德性ノ部ニ屬スルモノト思ツテ居リマス。

ソノ次ニハ身體ガ弱イ、折角優秀ナ成績ダト思ツテ醫者ニ診セルト、ドウモ色々ノ所ニ缺點ガアル、コレハ競技ヲ中心ニ運動ヲヤル弊ダラウトイフヤウナ說モ多イヤウデアリマスガ、兎ニ角コノ體育トイフモノヲ十分ニ考ヘテヤツテ貰ヒタイ。

次ニ知識ノ方ノ注文ヲ纏メテ見マスト、教授方法ヲ相當改善シテ貰ヒタイトイフコトニナツテ居ルヤウデス。

ソレハドウイフコトニナルカトイフト、具體的ニ申シマスト、ドウモ手紙ヤ文章ガ非常ニ拙イ、モツト字ヲ、或ハ文章ヲ上手ニ書ケルヤウニシテ貰ヒタイ。

ソレカラ法律ヤソノ他日常必要ナモノガ缺ケテ居ル、ドウカソノ國民的常識トイフモノヲモウ少シ十分ニ教ヘテ置イテ貰ヒタイ、專門ノ知識ハ餘リ詳細ニ亘リ過ギテ居ル、ソノ爲ニ却ツテ知識ガ働カナイ。

澤山ノモノヲ唯詰込マズニ、成ル可ク根本ノ原理ヲ、概念ヲ確實ニ植付ケテ置イテ知識ガ十分ニ働クヤウニシテ置イテ貰ヒタイ、教材ヲドウカ實社會ニ卽シタヤウナモノヲ採ツテ貰ヒタイ、サウシタナラバ知識ハキツト働クダラウ。

數學ヤ物理、化學、國語トイフヤウナ、コノ基礎的ノ學問ハ十分ニ教ヘテ置イテ貰ヒタイ。ソレニ參考書ヲ讀ム習慣ヲ付ケテ置イテ貰ヒタイ。コノ二ツノ方法サヘ十分ニシテ置イテ貰ツタラ、卒業後必要ナ時ニ際會シタナラバ、自分デ必要ナ知識ハ求メルコトニナルカラ、學校デハ餘リ詳シク教ヘテ置イテ貰ハヌデ宜シイ。自分ノ進ム社會ノ習慣ヲヨク教ヘテ置イテ貰ヒタイ、ドウモ就職シテカラ後、自分ノ進ム社會ノ慣ハシヲ習ハナカツタ故ダラウ、不平ガ多イ、斯ウイフヤウナ仕事ヲスル積リハナカツタトイフヤウナ感ジガ多イヤウデアリマス。ドウカ自分ノ住ム社會ノ慣ハシハ十分教ヘテ置イテ貰ヒタイ、トイフヤウナコトニナツテ居リマス。

何レモコノ具體的ノ問題ヲ考ヘテ見マスト、吾々ガ教室デ扱ツテ居ル事柄ノ中デハ、割合ニ輕ク取扱ハレテ居

ル點デアツテ、斯ウイフコトガ力強ク唱道サレテ居ルトスレバ、相當考慮スベキ問題ダト考ヘテ居リマス。

大體是等ガ兵庫縣ノ實業家カラ提唱サレタモノデス。

次ニ日本經濟聯盟トイフノガアリマスガ、コレハ鄕男爵ガ委員長デアツテ、日本ノ產業會社ノ多クノ社長ソノ他ヲ會員トスル、有力ナル團體デアリマス。ソノ聯盟ガ實業教育振興トイフ上カラ、現代ノ教育ニ對シテ改善スベキ必要ガアルカ、若シアルナラバドウイフ風ニ改善シタライヽカトイフコトヲ、ソノ會員全體ニ回答ヲ求メタコトガアル。ソノ回答ノ要點ガ大體德性ノ上デハ、品性ノ陶冶ト勤勞ヲ尊ブ氣風ヲ養成スルニ一段ノ努力ヲシテ欲シイトイフコトニ、會員全體ノ聲ガ一致シテ居リマス。

次ニハ知識上ノ問題デハ、卒業後役立ツヤウナ教育ヲシテ欲シイ、卽チ生キタ學問、働ク知識ヲ授ケテ欲シイ要リモシナイ知識ハ却ツテ邪魔ニナル、斯ウイフ注文デアルヤウデス。

シテ見ルト兵庫縣ノ實業家ノ意見ト、コノ日本經濟聯盟ノ會員諸氏ノ意見トハ、根本ニ於テ大同小異デアルヤウデ、德性ガ缺ケテ居ル、知識ガ働カナイ、斯ウイフコトニ現在ノ教育ノ缺點ガアルヤウニ見エマス。ソノ缺點ニ對シテ如何ニ改善スベキヤトイフコトニ對シテハ社會教育協會トイフ相當有力ナル協會ガアリマス、ソノ協會ガ詳細ニ斯ル缺點ニ對スル教育上ノ改善案ヲ發表シテ居リマス、ソレヲ見マスト先ヅソノ要點ハ次ノヤウデス。

第一。教育ヲ改善スルトイフコトニハ十分ニ注意シナケレバナラヌ。餘リ輕卒ニヤルト思ヒモヨラヌ重大ナ危

險ガソレニ伴フモノデアル。

例ヘ斯ル現在ノ缺點ガアルトシテモ、コレヲ輕卒ニ直シテハナラヌトイフコトヲ前提トシテ居リマス。コレハドウシテカトイフト、現在現ハレテ居ルコノ缺點ニハ相當ニ古イ由來ガアルノデアル、ソノ由來トイフハ明治維新ニ際シテ日本ノ科學的思想ガ歐米ニ甚ダシク遲レテ居ルノヲ痛心シテ、福澤諭吉先生等ガ出來ルダケ早クコノ知識ヲ取入レタイ計リニ、昔カラノ古イ日本ノ教育法ヲ改メテ、實利實學トイフ今日ノ教育法ヲ取入レラレタカラダ。知識サヘ取入ルレバヨイ、急ク教育ダ、教育ノ形式ナドハドウデモヨイトイフ譯デ、形式ヲ主トシタ昔ノ教育法ヲ全然棄テタノガ卽チ今日ノ因ヲナシテ居ルノデアルト言ツテ居リマス。

ソレマデノ日本ノ教育ハ非常ニ形式ノ喧シイモノデアツテ、儒道ニシテモ或ハ藝道ニシテモ、教ヘ方ニ大變ナ形式ガ重ンゼラレテ居ツタ。

知識ソノモノヲ授クルヨリモ寧ロ形式ニ捉ハレ過ギタ形ガアツタモノヲ、コノ福澤先生ナドガ形式ヨリカ知識ソノモノヲ取入レバ宜シイトイフ極端ナル實利實學ヲ始メラレテ、サウシテ知識丈ヲ取入レル一種ノ速成教育ヲ始メラレタノデ、初メノ程ハコノ知識ガ大變ナ働キヲナシ、我國ノ經濟及產業界ガ明治大正ト進歩シ、遂ニ今日ノ隆昌ヲ見ルニ至ツタケレドモ、ソノ實利實學トイフ功利的ナ教育デ育テラレタ人々ニ、結局ハ打算的思想ガ生ジ、ソレガ萬事ニ現ハレルコトニナツタノデアル、カクテ知識階級ニ個人主義又ハ利己主義ナル行動ガ人心ノ中

ニ働イテ來テ、到頭今日ノ時弊ヲ釀成スルニ至ツタノデアル。斯ウ言ツテ居リマス、ソレデ今後改善スル點トシテドウシテモコノ個人主義、利己主義ヲ極力防止スルヤウニ教育ヲ改善シナケレバナラヌ。ソレニハ如何ナル方法ヲ取ルベキカ。ソレハドウシテモ協同ノ精神トイフコトヲ第一ニ教育スル必要ガアル。サウシテソノ協同ノ精神ノ中ニ、勤勞ノ氣風ヲ涵養スルヤウニシナケレバナラヌ、斯ウ要點ヲ擧ゲテ居リマス。勤勞ノ氣風ヲ養成スル具體的方法トシテ、ドウイフコトヲ言ツテ居ルカトイフニ、人間ハ大體勤勞ヲ好イタ動物デアル、無爲ニシテ居ルトイフコトハ人間ニトツテハ一種ノ苦痛デアルノダ、ソレガ本來デアルカラ、辛苦勤勞シテ一事ヲ成シ遂ゲレバ非常ニ愉快ガ味ハヘルニ相違ナイ。斯ル勤勞ニ依ル愉悦ガ味ハヘ、強ク認識サレ、體認サレルヤウニ教育ヲシタナラバ、勤勞シテ一事ヲ成シ遂ゲルトイフトキニ、一人デスルヨリモ協同デスル方ガ更ニ一層ノ愉快ヲ感ズルヤウニハ、勤勞ノ氣分ハ自然涵養サレルデアラウ、斯ウイフ風ニ言ツテ居リマス。ソレデ勤勞ノ精神ヲ涵養スルニ仕向ケナケレバナラヌ。サウシテソレヲ認識サセ、ソレヲ體認サセルヤウニ教育ヲ持ツテ行カナケレバナラヌ。今迄ノ作業ヲ見ルト個人ノ技能ヲ磨クニ急デアリ、個人ノ技能丈ヲ磨カウトシテ居ル、サウシテ個人的ノ競爭ニナツテ個人主義ノ精神ハドウシテモ强クナルヤウナ形ニナル。今後サウイフヤウナ技能的ノ教育ニシテモ、個人ノ技能トイフモノハ第二義ニシテ、協同ノ作業トイフモノヲ中心ニ教育スルヤウニシナケレバナラヌ。ソノ一ツノ仕事ガ共同ニ成就スルトイフコトニ、興味ヲ以テ作業スルヤウニ仕向ケナケレバナラヌ。斯ウイフヤウニ言ツテ居リマス。

次ニハ奉公ノ精神ヲ作興シナケレバナラヌ。協同ノ精神トイフモノヽ中心ハ、犧牲奉公トイフ精神ガ基ヲナサナケレバナラヌ。サウスルニハ今日ノ日本トイフモノハドウイフ國家デアルカ、現在ノ日本ハドウイフ風ニナツテ居ルカトイフヤウニ、卽チ日本ヲ正當ニ認識サセ、ソノ中ニ含マツテ居ル使命トイフモノヲ正確ニ認識サセルヤウニシナケレバナラヌ。サウシテ國家ノ命令トソノ福祉ガ、自分ノ上ニ如何ニ及ンデ居ルカトイフヤウナコトヲ生徒ニ理解認識セシメテ、サウシテ自發的ニソノ活動ガ協同ニ至ルヤウニ生徒ヲ仕向ケナケレバナラヌ。サウスルト生徒自身デモ進ンデ活動シテ、ソノ職業ノ常識ハ豐カニナツテ來ルダラウ、斯ウイフヤウニ示シテ居リマス

次ニ知識ヲ教育スルニ生キタ學問、卽チ働ク知識トスルニハ如何ニ教育シタラ宜シイカトイフコトニ付テ、斯ウイフヤウニ述ベテ居リマス。卽チ現今ノ學科目及ビソノ說明トイフモノハ、數學ナラ數學、英語ナラ英語ト、ソノ教育ノ方法ガ全ク分科的ノ教授ニナツテ居ル。何ノ爲ニ數學ヲ教ヘテ居ルカ、何ノ爲ニ英語ヲ教ヘテ居ルカトイフ意味ガ一寸モ現ハレテ居ナイ。コレ等ヲ綜合連絡ヲシテ教ヘテ貰ハナケレバソノ知識ハ生キテ働カナイ。ソノ爲ニ教材ハ皆實社會ノ生活カラ求メテ貰ハナケレバナラヌ。現在ノ教材ヲ見ルト、ソレガ皆ソノ科目カラ出テ來テ居ル、サウイフ知識ヲ教ヘテ居ツテハ到底働クモノデハナイ。サウシテ又ソノ內容ヲ見ルト、恰モ科學ノ研究報告書ヲ見テ居ルヤウデアル。唯徒ラニ稠密ナ分析カラ更ニ稠密ナ分析ヘト、段々細カク發展シテ居ルトイ

フダケデアツテ、ドノ要項ガ肝要デアルノカトイフコトガ雜然トシテ居ツテ分ラナイ。ソレデ役ニ立タナイ事項ガ多イカラ、働ク知識、生キタ學問トイフコトニナラナイ。ソレヲ生カシテ働カセルトナルト、ソレハ概念トカ法則トイフヤウナモノニ要約シタ知識デナケレバ働クモノデナイ斯ウ言ツテ居リマス。

ソレデ今後コレヲ改善スルニハ、數學トカ英語トカ物理トカイフヤウナ學科目ヲ獨立サセナイデ、實業教育ニ對シテノ實際問題ヲ、ソノ學問デ解說スルヤウニシナケレバナラヌ。斯ウ言ツテ居ルヤウデス。ドウモ吾々モ現在ノ教育ノ方法カラ見テ洵ニ穩當ナ說デハナイカト考ヘテ居リマス。

次ニコノ經濟聯盟ノ回答トハ別ニ、日本冷凍協會トイフ會ガ、ソノ機關雜誌ニ實業教育改善案ヲ發表シテ居リマス。ソレヲ見マスト同樣ニ生キタ學問、働ク知識トイフ注文デアリマス。コレニ對シテソノ原因ハ全ク先生ノ選擇ガ當ヲ得ナイカラダ、教師ニ經驗者ガ少イカラサウイフ風ニ教育ガ歪ンデ來タノダ、ソレハドウシテカトイフト、學校ヲ卒業シテ直ニ先生トナリ教室ニ入ツテ來ルカラ、ソノ先生ハ自分ガ先生カラ教ハツタモノヲソノ儘自分ノ勤ムル下級ノ學校ニテ教ユルトイフヤウニナツテ來テ居ル。サウナルト生徒ニ大變難カシイコトヲ教ヘル譯デアル、ソンナ難カシイコトヲ教ヘタ所デ知識トナルモノデハナイコノ點ヲ改善シナケレバナラヌトイフヤウナコトヲ言ツテ居リマス。ソコデ現在ノ學校ノ學科目ヤ要目ガ上級學校ト何等差別ガナイカラ、コレヲ改メテ學校ノ程度ニ應ズル學科目竝ニ要目トスルヤウニ改メナケレバナラヌ。サウシテ先生ニハ經驗ノ豐カナ人ヲ選ンデ貰ハナケレバナラヌ。經驗ノナイ先生ニハ色々ナ缺點ガ現レテ來ルガ、ソノ重ナル二、三ハ次ノヤウナ事デアル

一、經驗ニ乏シケレバ兎角學理ニ奔リ、高級過ギル教育ヲ施シテ、只自己ノ自負心ヲ滿足セシメル傾キガ生ズル知識モ高級過ルト働クモノデハナイ。

一、經驗ニ乏シケレバ先生ノ知識トイフモノハ書籍カ或ハ雜誌カラバカリ取入レルコトニナツテ來ル。經驗ニ乏シイトソノ讀ンダ資料ノ重點ガ分ラナイ。判斷ガ出來ナイ、サウスルトソノ教ヘル所ガ實際ノ問題ニ觸レテ來ルト、不適當ナモノトナツテ來ル、ソノ結果講義ニ對シテハ生徒ノ感興ハ決シテ引寄セラレルモノデハナイト高調シテ居リマス。

ソレカラ次ニ現在ノ先生ハ各學科目ヲ教ヘテモ、ソレヲ教ヘル間ニ德性ヲ植付ケルトイフコトヲ一寸モ考ヘテ居ラヌ。先生ハ學科目ヲ教ヘルト同時ニ、ソノ間德性ヲモ植付ケルトイフコトヲ十分考ヘテ貰ハナケレバナラヌトイフコトヲ言ツテ居リマス。

然ラバ學科目ヲ通ジテ生徒ニ德性ヲ植付ケルニハ、ドウシタライヽカトイフ問題ニ觸レテ見タイガ、併シコノ問題ハ後ニ讓ツテ置キマス。

次ニ川崎造船所デハ社會教育協會ガ實利實學ノ餘弊ダト稱ヘラレル、產業人ノ個人主義、利己主義ノ實害ヲ蒙リ、マザ〳〵ト自分ノ產業ガ破壞サレテ來マシタノデ、ドウシテモコノ思想ヲ取去ラナケレバナラヌ。コノ思想

ヲ取去ルトイフコトガ會社ヲ復活スル所ノ要素デアルトシテ、東山學校トイフモノヲ創メテ現在生徒ヲ養成シテ居リマス。

其ノ趣旨ヲ讀ンデ見マスト、產業ヲ救フノハ忠實業ニ服シ、勤儉產ヲ收メ自彊息マサル念ヲ作ラナケレバナラヌ。斯ル入間ヲ育テルノガ東山學校ノ任デアル。ソレデ學校ノ教育ハコノ德性ヲ教養スルトイフコトヲ第一義ニ置イタノデアリマス。何レ明後日カニ皆サンヲ御案內ヲシヤウト思ヒマスカラ、ソノ教育ノ實況ハ御覽ノコト、思ヒマスガ、コノ學校ノ概略ヲ述ベテ見マス。

生徒ハ宿寄舍ニ入レテアリマス。サウシテ寄宿舍生活ノ間ニ敬神、協同、禮儀トイフヤウナコトヲ植付ケル爲ニ、當局ハ努力シテ居ラレルノガ目ニツキマス。何事モ眞劍ナル作業ニ服サセルノダ、實習トイフ氣持デハ駄目ダトイフノガ特徵デス。

勞働ノ神聖ヲ知ラシメルニハドウシテモ眞劍ナル作業ニ從事サセテ訓練シナケレバナラヌ。サウスレバ忠實業ニ服シ、勤儉產ヲ收メ自彊息マサルノ習性ハ自然出來テ來ルノデアル。ソノ間ニ勞働ノ神聖モ自然ニ味ハレルト言ツテ居リマス。

今迄ノ工業教育ハ作業ヲ教ヘルハ唯ソノ作業ノ**サンプル**ヲ教ヘテ居ル、技丈ヲ教ヘテ居ル、作業ニ慣ラストイフコトハ一ツモ考ヘテ居ラヌ、作業ノ業ヲ教ヘラレル丈デハ作業ハ嫌ヒニナツテ來ル、サウイフ學校ヲ卒業シタ

人ヲ川崎造船所ガ使ツテ居テハ、造船所ヲ復活サスコトハ出來ナイ、作業ニ慣レタ、作業ヲ意トシナイモノヲドウシテモ養成シナケレバナラヌ、ソレデ東山學校デハコノ作業ヲ稽古サセルトイフ樣ナ事ハ一切ヤラヌ、眞劍ナ作業ニ從事サセ、段々作業ニ慣シテ行クノダトイフ風ニ言ツテ居リマス。

茲デ今マデ述ベマシタ社會教育協會、或ハ冷凍協會ナドノ色々ノ方針ヲ、一應纏メテ見マスト、今迄ノ吾々ガ教ヘテ居ツタノト、是等ノ意見トガドウ違フカトイフト、結局技術ヲ教ユルトイフ氣持デナク、眞劍ナ作業デ個人ノ技術トイフコト丈ヲ目標トシナイデ、全體ノ作業トイフヲ中心トシテ、自分ハソノ一部ニ奉仕スルトイフ精神ヲ以テ勞働サセ、作業ノ習性ヲ作ルトイフ考ヲ以テ、教育ヲシナケレバナラヌノダトイフコトニナルト思ヒマス。

又コレマデ述ベマシタ知識トイフモノヲ教ヘル方法ニ付キマシテハ、働ク知識、生キタ學問、斯ウイフ知識ヲ植付ケルトイフ注文ニ對シマシテ、今迄擧ゲラレタ所ヲ綜合シテ見ルト、教授ノ內容ヲ整理セヨ、教材ノ選擇ニ注意セヨトイフコトニ要約サレル。

サウスルト今マデノ方法、卽チ口カラ耳ニ教ヘルトイフ筋ニハ變リハナイ、サウスレバ結局ソノ知識トイフモノハ抽象的ナモノデアリ先ニ唱ヘラレタ概念ニセヨ、或ハ法則トイフヤウナ簡約サレタ知識デモ、又ハ綜合シタ知識デモ、ドウモソレガソノ儘生キテ働クトハ思ヒ得ナイ。ドコマデモサウイフヤウナ抽象的ナ知識デアルナラ

バ、ソレハ袋ニ入レラレタ色々ノ雜多ノ知識デアル、ソノ知識ハソノ儘ノ形デアルカラシテ、マルデ目錄ノ中ニ記載サレタ知識トシテ存在スルトシカ思ハレナイ、斯ウイフ風ニ概念ヲ唯袋ノ中ニ入レテ置クトイフコトモ、ソレハ**サンプル**デアルカラシテ、確カニソノ**サンプル**ニ依ツテ物ヲ比較シテ見ルトイフコトノ、手段ノ一ツトハナル、人間ガサウイフモノヲ有ツテ居レバ、一ツノ武器ニハ相違ナイガ、ソレガ結局人間ノ力トイフモノニナラウトハ思ヘナイ、私ハコレカラドウシタラ力ニナルカトイフコトニ付テ一寸述ベテ見タイ。

教育學ニ述ベラレテ居ル所ヲ見ルト、事實ニ當面シ、ソレガ働クノハ、ソノ人ノ陶冶知識デアル、斯ウ言ツテ居リマス。卽チ先ニ授ケタ所ノ概念ノ知識ソノ儘デハ働クモノデハナイ。ソノ知識ヲ陶冶シナケレバナラヌ、陶冶シテコソ初メテソノ知識ハ人間ノ力トナルノデアルト言ツテ居リマス。ソレナラバ陶冶知識トイフモノハドンナモノデアルカトイフト、ソレハ全ク消化サレテ作用力トナレルモノデアル、斯ル力ノ涵養ヲ教育學デハ形式ノ陶冶、斯ウ稱ヘテ居ル、吾々ハ實ハ教育ノ專門家デナクテ教育家ニナツタノデ、ドウモ教育學ノコトニ付テハ暗イノデスガ、能クコノ教育ノ方法ヲ教育學的ノ方面カラ調ベテ見マスト、形式陶冶トイフコトハ教育上非常ニ重大ナモノトサレテ居ルヤウデアリマス。生キテ働ク知識ヲ授ケルノハ、概念法則ヲ蓄積スルノデハナク、コノ法則ヲ知識化サセ、陶冶サセテ力トスルノニハコノ形式陶冶ヲ行ハナケレバナラヌ、斯ウイフコトヲ專門ノ教育學者ハ唱ヘテ居ルノデス。形式ノ陶冶ヲシタナラバ知識ハドウナルノカ、知識ヲ理性ダケニ授ケテ行クノガ卽チ概念ノ教育デアル、ソノ知識ヲ情意ニ叩キ込マナケレバナラヌ、ソレガ形式陶冶デアリマス。サウデナケレバ決シテソノ知識トイフモノハ働クモノデハナイ、ソレニハドウシタラ宜シイカ、理性ヲ通シテ知識ヲ情意ニ叩キ込ムトイフコトハ出來ルモノデハナイ、ソレニハ形式ヲ決メテ、ソノ形式ヲ踏マシテ幾度モ同ジコトヲ繰返シ〳〵スルコトニ依ツテ、習ヒ性トナルトイフ道ヲ踏マセナケレバナラヌ、サウシテソノ知識ハ初メテ働クノデアル、サウスレバソノ知識ハ卽チ得デアル。ソノ人ノ得トナツタ知識デアツテ初メテソノ人ノ身體ニスツカリ添フノデアラウト考ヘラレルノデス。

日本ニ於テハ常識トイフ言葉ハ、一般ノ知識ダ、廣ク適用スルヤウナ一般ノ知識ダトイフヤウニ解釋サレテ居ルヤウニ思フノデスガ、英語デイフ常識トイフノハ、**サウンドナレツヂ**卽チ非常ニ腹ノ中ニ深ク喰込ンダ知識ヲ常識ト稱スルノダサウデス、ソレガ情意ニ叩キ込マレタ知識デアラウト思フノデス。

吾々ガ日常生活ヲシテ居ル中ニ、今マデ有ツタ知識ヲ繰返シ〳〵腸ニ叩キ込ンデ、何時トナクソレガ情意マデニ叩キ込マレテ來ル、碁ヤ將棋ヲ習フノモ全ク繰返シ〳〵ソレヲヤツテ居ル中ニ、碁ノ知識、將棋ノ知識ガ働イテ來ル、サウシテソコニ自分ノ技能ガ上達シテ行クノデアリマス、ソレラノ知識ガ卽チ**サウンドナレツヂ**デアリ陶冶知識デアラウト思フノデス。

陶冶トイフコトニ付テドウ説明ガシテアルカトイフト、陶冶トイフコトニハ實質的陶冶ト形式的陶冶トノ二ツ

ガアルヤウデス。

實質的陶冶ハ、コレハ外部ヨリ多クノ資料ヲ注入シテ、知識ヲ供給シテ、ソノ精神內容ヲ豐富ニスルコトデアルト言ツテ居リマス。卽チ現在ロカラ耳ニ入レル方法ハ卽チ實質陶冶ソノモノデアラウト思フ。

形式的陶冶トイフノハコレハ方法デアル、實施デアル、內容ヨリカ寧ロ精神作用卽チ情意ノ陶冶デアルト說明サレテ居リマス。

思フニコノ實質的陶冶トイフモノハ、人ニ知識ノ食物ヲ與ヘルトイフコトダラウト思フ。形式的陶冶トイフモノハ、胃腸ニ於テソノ食物ヲ消化サセル作用デアラウ。サウシタナラバ今マデノ如ク、唯食物ヲ食ハシテ消化作用ヲ怠ツテ居ツタナラバ、ソノ知識ハ先ニ申シマシタ通リ目錄デアリ或ハ唯概念ノ集積ニ過ギナイ、胃袋ヲ澎ラスニ過ギナイモノデアルト思ハレルノデアリマス。

近頃ノ敎授ハ全ク不消化物ヲ詰込ムヤウナモノデ、決シテ榮養トナリ力トナルマデニ消化ニ力ガ拂ハレテ居ナイ、消化サスニハドウシテモ形式ノ陶冶ヲナサナケレバナラヌ。ソレナラバ今マデドウシテ形式ノ陶冶トイフモノガナイノカ。コレガ卽チ實利實學ノ弊デアツテ、知識サヘ授クレバアトハ人間ダカラ自分デ知識ヲ消化サストノ今デモ多クノ日本ノ敎育者ハ思ツテ居ルノデハナイカト私ハ考ヘルノデアリマス。今若シコノ誤リヲ正シテ敎授ニ適當ナ形式陶冶ガ行ハレテ、サウシテ知識ガ榮養トナリ力トナツテ働クトスルト、次ノ問題ハ食慾ヲ十分ニ起

サストイフコトガ、敎育的ニ亦重大トナツテ來ルト思フノデス。

ドウモ食慾ノナイモノニ食物ヲ食ハサウトシテモ食ハナイ。**キリスト**ハ求メヨサラバ與ヘント言ツテ居ルシ、釋迦ハ緣ナキ衆生ハ濟度スベカラズト言ツテ居ル、最初カラ食慾ノナイモノニハドウシテモ食物ヲ授ケルコトハ出來ナイ。

吾々ノ如キ敎育ニサウ堪能デナイモノハ、尙更コノ食慾ノナイ者ニハ食物ヲ食ハスコトハ出來ナイ。コノ食慾ヲ起サセルコト、求道ノ志ヲ固メサセルトイフコトガ、又敎育ノ重大ナ點デアラウト思フ。コレハ卽チ興味デアル、コノ興味トイフコトヲ敎育ノ上ニ考慮スル。サウシテ興味ヲ與ヘテ食慾ヲ唆ル。興味ヲ食物デ言ツタナラバ食物ノ旨味デアル、サウスルトソコニ食慾トイフ向上心ガ發生シテ情意ガ働イテ來ル。

吾々ハドウモ理性ダケニ知識ヲ授ケルトイフコトヲ目標トシテ居ルカラ、相手ノ情意ガ働クト働カヌトニ拘ラズ、唯知識ヲ授ケルガ、ドウシテモ相手ノ情意ヲ働カストイフコトデナケレバ本當ノ働ク知識ニスルトイフコトハ出來ナイ、ソレデ敎育者ハ生徒ニ興味ノアルトコロノ實質的陶冶ヲ施シテ、ソノ情意ニ形式ノ陶冶ヲ加ヘ、與ヘラレタ知識ヲ消化吸收セシメルト共ニ、益々食慾卽チ向上心ヲ起サセルヤウニ、ソノ情意ヲ鍛錬スルトイフコトガ、今後ノ敎育上重大ナ改善デハナカラウカト思フノデス。コノ鍛錬ガ卽チ生徒ノ德性ニ喰入ツテ來ル。サウシテ品性モ陶冶サレ、情操モ高メラレルトイフコトニナルノデハナイカト思フ。ドウモ今日ノ日本ノ敎育改善上

最モ強クコノ品性ヲ云々スルトイフ聲ガ大キイノハ、卽チ明治維新ニ際シテ歐米ニ立遲レタル科學知識ノミヲ取入レルトイフコトニ急デアツタ變態ナ教育法ガ、今日モ一般ノ教育トナツテシマツテ、大事ナ形式陶冶トイフモノガ捨テラレテ顧ミラレナカツタ爲ニ、斯ル結果ヲ生ミ、斯ウイフ非難ガ起ルノニ相違ナイ。斯ル變態ナ教育ガ始メラレタ最初ノ中ハ、日本ノ中堅ノ人々ニハ家庭ニモ社會ニモ、一般的ニ最モ形式ヲ重ンジタ儒教ヤ武道的教育ノ爲ニソノ品性ハ養成サレテ居ツタカラ實際上餘リソノ非難ガ現ハレナカツタノニ、今日デハ學校ノ教育ガ唯一ツ品性陶冶ヲ受持タネバナラヌヤウニナツタノニ、過渡的ニ行ハレタ變態ナ教育法ニ改善ヲ施サズシテ居ルノデ、唯物的思想ニ拍車ヲカケラレタ品性ノ缺陷ガ現ハレテ來タノニ相違ナカラウト思ヒマス。

ソレナラバ日本ノ昔ノ教育ハドウシテ居ツタカトイフコトヲ考ヘテ見ナケレバナリマセヌ。

我ガ昔ノ教育ハ儒道ガ主デアツテ、實ニ形式ガ喧シカツタ。寺小屋ノ教育ニシテモ、生徒ノ教育ハ知識ヲ授クルヨリモ行儀作法ヲ植付ケルノガ實ニ喧シイモノデアル。三尺去ツテ師ノ影ヲ踏マズトイフヤウナ、非常ニ窮屈ナ極リガアツタ。知識ヲ授ケルヨリハソノ進退動作ガ非常ニ喧シイ。コレガ昔ノ教育ノ形式デアル。皆サンモ御承知デアリマセウガコノ形式ハ藝道ニシテモ武道ニシテモ、相當今モ殘ツテ居ル。近頃ノ教育者カラ見ルト、アヽイフ形式ヲ踏ムナド、イフコトハ必要ノナイコトダ、藝ニシテモ藝術ニシテモソノモノ又ハ術ソノモノサヘ覺エタラ宜イジヤナイカ、サウイフヤウナ面倒ナ道筋ハ踏マナクトモ宜イ、サウイフコトハ實ニ馬鹿々々シイジヤナイカトイフヤウナ感ジヲ持ツ人モ多イノジヤナイカ、ケレ共アノ弓道ヲ見テモ分ルヤウニ、弓ニ矢ヲ番ヘテ的ヲ射ルトイフコトガ先ヅ術ノ中心デアル、サウシテ矢ヲ番ヘテ的ニ當ツタナラバ弓ノ目的ハ完成スル譯ダ、所ガ實際弓道ヲヤツテ見ルト、矢ヲ番ヘテ射ルトイフコトハ最後デアル、ソレマデノ道筋ガ實ニ喧マシイ、併シソノ爲ニ矢サヘ當レバヨイトイフ氣持卽チ實利的氣分ガ消エテ來ル。

コノ弓ニハドウイフ形式ガアルカトイフト、進左退右坐左起右トイフ、進ムトキニハ左カラ、退クトキニハ右坐ルトキハ左カラ、起ツトキハ右カラトイフ動作上ノ掟ガアル。

扨弓ヲ左手ニ持ツテ矢ヲ右手ニ持ツ、サウシテ進左退右坐左起右ヲ完全ニ行ハナケレバナラヌ。矢ヲ番ヘテ的ニ放ツトイフノハ最後デアル。ソレデ一時間ノ中ニ何邊矢ガ放タレルカトイフト、一回カ二回、ソノ進左退右坐左起右ニ半分以上ノ時間ヲトルノデアル。コノ形式ヲ踏ンデ熟達スルニ連レ、ソノ人ノ進退ニハ品ガ加ハル、精神ニハ落付ガ出來ル、例ヘ矢ノ當リハ惡クトモ、コノ形式ヲ踏ム道程ノ內ニ、清風ニ浴スル氣分ガスル、此ノ氣分ハ次第ニ情意ニシミ込ミ、人品ニマデ影響スルダラウ。弓ニ長ジタ人ガ弓ヲ持ツト其ノ姿勢丈ヲ見レバ誰ニモアノ人ハ上手ダト直グソレガ分ル。

今日ノ學校ノ教育ノ缺點ハ、形式ノ陶冶ヲ怠ルタメダト思フ。コノ事ハ弓道ニ表ハレルヤウニ、人品ガ表ハレナイコトヲ見テモ直ニ分リハシナイカト考ヘマス。斯ク申シマスト、私ノ獨斷ダト御考ヘノ方ガアルカモ知レマ

セヌ。

私ハ先年歐米ノ教育ヲ視察スル爲ニ向フニ渡ツタコトガアル、サウシテ**アメリカ**、**ドイツ**ソノ他ニ於テモ小學校カラ中等學校大學マデ、ソノ教育ノ狀況ヲ親シク取調ベテ見マシタ。ソノ參觀ノ際私ハ實ニ不思議ニ思ツタノハ、何處ノ學校デモ校長ガ教室ニ案内シテ呉レル、教室ニドン〳〵入ツテ行ツテ室ノ中程ノ生徒ノ**ノート**ヲ取上ゲテ、ドウダ奇麗ニ書イテ居ルダラウト私ニ見セテ呉レル。或ル時ハ數學、或ル時ハ英語、色々ノ科目デアルガ今デモマザ〳〵ト眼ニ殘ツテ居ルノハ、或ル數學ノ時間デアリマシタガ、生徒ガ檢算ヲヤツテ居ル、ソレガドノ生徒モドノ生徒モ先生ノヤツタノヲ寫シテ居ルヤウデ、生徒自身デヤルノダガソノ型ガ決ツテ居ル。數字ノ書方モ決ツテ居ル。日本デアルト夫々ニ人ノ癖ガアツテ、數字ニシテモ英語ニシテモ自分勝手ナ字ヲ書クノガ普通デス。所ガ**イギリス**デモ**アメリカ**デモ向フノ先生ハ自分ノシタ通リヲヤラナイト非常ニ喧シイラシイ。例ヘバSトイフ字ヲ書クニシテモ次ノ生徒モ次ノ生徒モ書キ方ハ皆同ジデアル。

ソレカラ今度ハ大學ノ**レポート**ヲ見ル、先生ガドウダ奇麗ダラウト言フ、日本ノソレヲ見ルトドウモ千差萬別デアルガ、向フノ生徒ノモノハドレモコレモ皆同ジ型ヲ履ンデ書イテ居ル、畫ヲカクノモ字ヲカクノモ文章デモ生徒ハ皆先生ト同ジ型ニヤラウトシテ居ル。內容丈デナク形マデ先生ノ型通リヤルノガ生徒ノ**ノート**デアル。

考ヘテ見ルトソレガ卽チ重要ナル形式ノ陶冶デハナカラウカト思フ。ドウモ日本ノ生徒ノ**ノート**ヲ見ルト先生

モ生徒モ字ト云ヒ運算ト云ヒ、形式ハ千差萬別、**ノート**ハ實ニ汚イ、先生其人ニ一定ノ形式ガ整ツテ居ナイデ勝手ナ癖ガ付イテ居ルカラドウモ整然ト書ケナイ。

イギリスニ**イートン**トイフ學校ガアリマスガ、コレナドハ最モ古イ學校デアリマス。實ニ形式ヲ重ンズル學校デアリマス。卽チ生徒ハ**シルクハツト**ヲ被ツテ、**モーニング**ヲ着テ居ル、十二三歲位ノ子供ガ**シルクハツト**ヲ被ツテ居ルノハ、丸デオドケ芝居ニ出ルヤウナ恰好デス。

併シコレハ紳士タル第一ノ要件デアルカラ、子供ノ時カラ形式ヲ十分ニ尊重シテ着セルノデアラウ。

コノヤウニ被服ノ上ニモ學科ノ上ニモ、先生ハ形式ヲ決メテ敎ヘ、生徒ハソノ形式ヲ踏ムノヲ大事ナ事ダトシテ居ルト私ハ思ヒマス。

玆デ考ヘルコトハ、日本ノ今マデノ教育ノ中デ、例ヘバ武道ニシテモ藝道ニシテモ、武術又ハ藝術トシテ、ソノ術ヲ中心ニシテ居ルノト、武道又ハ藝道トシテ道トイフ、言葉ヲ附加ヘルノト事實ニ於テハ如何ナル差ガアルカトイフコトヲ考ヘテ見マセウ。藝ヲ敎ヘ術ヲ敎ヘルノニ、ソノ術ニ行クマデノ道、ソノ道ヲ踏マナイノヲ藝術又ハ武術ト稱シ、ソノ術ニ行クマデニ色々ノ極リヲ設ケテ、ソノ道ヲ大事ニ踏マセルノヲ藝道又ハ武道ト稱シテ居ルヤウニ思ヒマス。日本ノコノ道ノ中ニハ禮儀作法ガ喧シイ、卽チコレガ人ノ道デアツテ、從ツテ術ヲ習フ爲ニハ人ノ道ヲ踏マセルコトガ非常ニ喧シイソシテ段々ト武士道ノ精神ガ叩キ込マレル。

コノ點ヲ教育者ハ十分考慮シナケレバナラヌノジヤナイカ、ドウモ術ト人道トガ一緒ニ仕組マレテハ、術ノ進ミガ遲レルヤウナ氣ガスルノデハナイカ、斯ル考ニナルノガ實利實學ノ餘弊デハナイカ、コヽヲ十分考慮シナケレバナラヌ點ト私ハ思ヒマス。

コノ術ヲ生カス爲ニハ、ソレヲ知識トシテ學バセタ丈デハ駄目デアル。術トシテ情意ニ叩キ込ムノニハ相當ノ時間ガ掛ル、世ニ疊ノ上ノ水練トイフコトガアル、人間ノ身體ハ斯ウ〳〵シタナラバ水ニ浮ク、元來ハ水ニ浮クヤウニ出來テ居ル。斯ウイフヤウニ教ヘテ見テモ、理性ハソレヲ受入レテモ情意ハ決シテソレヲソノ儘受入レテ呉レナイ。水ハ決シテ恐ロシイモノデハナイト言ツテ教ヘテ呉レテモ、泳ゲナイ人間ニハソノ恐レガ取去レルモノデハアリマセヌ。人間ノ情意トイフモノハ實ニ大キナ働キヲ有ツテ居ル、水練ヲスルニハコノ情意ノ恐ロシサヲ取除クトイフコトガ一番大キナコトデアル。ソレニハ時間ガ掛ル、ソノ長イ時間ノ合間々々ニ、人格精神ヲ鍛錬スル道筋ガ設ケラレテアルノガ、昔ノ藝道武道ノ教ヘ方デアツタト私ハ思ヒマス。

コノ形式卽チ大道ヲ設ケテサウシテ繰返シ〳〵身體ヲ練ツテ來レバ、ソレハモウ理屈ジヤナイ、自然ニ身體ハ浮イテ來ル、サウシテ恐ロシイトイフ感ジハ何時ノ間ニヤラ消エテ行クノデアリマス。サウスルト自然泳グトイフコトニ趣味ガ出テ來ル、自然ニ面白クナツテ來ル、何モ先生ガ詰込マヌデモソノ力ヲ以テ自分ガ働クモノデアリマス。水練ノ場合ニ於テハ水ニ浮クコトガ出來タナラバ、自然ト水ガ面白クナツテ、ソノ中ニ色々泳ギノ方法モ發明シテ來ルヤウニナラウト思ヒマス。

趣味トイフモノハサウシテ湧クモノデアリ、食慾トイフモノハ消化ヲ十分サセナケレバ次ノ食慾ハ起ツテ來ナイ。詰込ンデ徒ニ腹ヲ膨ラシテ置イテモ、如何ニ興味ヲ湧サウトシテモ、決シテソノ人ノ興味トイフモノハ生ズルモノデハナイ。古カラ苦ハ樂ノ種、斯ウ申シテ居リマスガ、ソレハ卽チ此ノ點ヲ指スノデアツテ、其人ニ其知識ヲ練リニ練ツテ消化サセテ、第二ノ食慾ヲ起サセル、消化ノ苦痛ヲ忍バセテ、サウシテ第二ノ食慾ノ樂シミヲ浮バセル、此レガ卽チ苦樂ノ道デアル。例ヘバソレハ登山ノ如ク、幾多ノ苦痛ヲ忍ンデサウシテ頂上ニ達シタトキニハ、非常ナ愉快ナ氣分ガ味ハヘル、コレヲ孟子ハ浩然ノ氣ト申シテ居リマス。實ニ何トモ言ヘナイヤウナ愉快ナ氣ガスル、コノ氣ガ味ハイ得ルト、自然登山ヲシタイトイフ氣ガ浮イテ來ル、登山ガ樂シミニナツテ來ル、所ガ近頃デハ却ツテソノ登山ノ苦シミヲ嘗メナイデ、頂上ニ登ツタ時ノ愉快ダケヲ味ハウトスル、卽チ**ケーブルカー**ナドデ登ラウトスル、コレガ今日ノ教育者ノ誤リデハナイカ、卽チコノ苦シミトイフノガ卽チ形式ノ陶冶デアル。苦シミヲ味ハセテ人格ノ陶冶ヲスルトイフ、我々ノ昔ノ祖先ガ、日本精神ヲ築キ上ゲタ所ノコノ教育法ヲ明治維新以來故ナク變更シテ、サウシテ斯ル品性上ノ缺點ヲ現ハシタノデハナイカトイフコトニ氣付クノデアリマス。

コノ苦行トイフモノハ實ニヤリ方ニ依ツテハ、生徒ノ向上心ヲ導ク基トナル、宮島資夫トイフ人ガ、「禪ニ生

クル」トイフ本ヲ書イテ居リマスガ、コノ禪ノ修業ハ洵ニ難カシイ、先ヅソノ中ノ一節ヲ讀ミマスト、「イヤ實ハネコノ僧堂トイフ所ハ世間デハ誰デモ入レルヤウニ考ヘテ居ラレルヤウデスガ、此處ハ僧籍ニ入ツテ居ル者ガ、師匠ノ許シヲ受ケテ修業ニ來ル道場デシテ、ソレニコノ僧堂ノ規矩トイフモノハ、實ニ嚴重ナモノデシテ年ガイツテ居ラウガ、社會デドンナコトヲシタ人デアラウガ、僧堂ノ規矩デ取締ルカラ、一日デモ先ニ來タ者ニハ絶體ニ服從シナケレバナリマセヌシナ、又日常ノ修業トイフモノガ到底一寸想像モ及バンモノバカリデス。

先ヅ第一ニ僧堂ヘ掛錫スルニハ庭詰トイツテ、玄關ノ上リ口ニ腰ヲ掛ケタマヽ、兩手ヲ付イテ二日間頭ヲ下ゲタマヽ、暮ス、コレガ實ニ辛イデス。顏モ足モ水腫レニ腫レテ了フ。ソレガ濟ムト今度ハ三日間無言ノ行デ坐禪シテ坐リ通ス。ソシテ僧堂ニ入ツテカラモアンタ、接心ニナルト朝ハ三時ニ起サレテ、夜ハ十二時頃迄坐ラナケリヤナランシ、接心ガナケレバ托鉢合米、京都カラ八、九升ノ米ヲ背負ツテ歸ツテ來ル、ソノ間ニハ作務トイツテ畑作リモ道普請モヤラナキヤナランシ、自分達ノ履ク下駄ノ緒ハ竹ノ皮デ作ラナキヤナランシ、實ニモウ休ム暇ハナイノデス。ソレニ食物ト來タラ朝ハ湯漬ニ大根葉ノ萬年漬、晝ガ麥飯ニ味噌汁、夕食ガ亦湯漬ニ萬年漬デスソノ外何ンニモ御馳走ナンカシマセヌ。マアアンタ方ダツタラ當分ハ喰ベラレタモノヤナイナ」ト笑ツタ。

斯ウイフコトガ書イテアル、コレヲ讀ンデ見マスト禪ノ修業ハ實ニ難カシイモノラシイ、所ガ細川頼之ノ詩ヲ讀ミマスト「萬室蒼蠅拂難去、起入禪榻臥清風」斯ウイフ風ナ詩ガアリマス。マア兎ニ角非常ナ難行苦行ヲヤルソレデモ「起入禪榻臥清風」トイフコノ心境ハ決シテ負惜ミデハナイト思フ。斯ウイフ苦行ヲ通シテ修業ガ行ハレル。斯ウイフ苦行ヲ如何ニ生徒ニ嘗メサセルカトイフコトガ、是ガ先生ノ考フベキ非常ニ重大ナ點デハナカラウカト思ヒマス。

ソコデ思ヒ及ビマスノハ、兎ト龜ノ話デス。自分ハ常ニコノ點ニ就テ考ヘ合セマスノハ、コノ兎ト龜トノ競爭ニハ實ニ眞劍ナ味ガアル。コレハドウイフ點カトイフトアノ龜ガ默々トシテ急ガズ焦ラズ歩イテ萬年怠ラヌ所ノアノ態度ハ、實ニ吾々ノ修業ノ上ニ、生徒ヲ導ク上ニ、重大ナ師表デハナカラウカアノ態度ヲ踏マシテコソ、結局ソノ苦行ノ次ニハ樂土ガ必ズ現ハレテ來ルニ相違ナイ。兎ノ如ク唯目的ヲ急イデ焦噪ノ氣分ニ溢レテ學バセタ所ガ、到底ソノ樂土ニ導クコトハ出來マスマイ。私ハ決シテアヽイフ導キ方デハ樂土ニ達セラレルモノデハナイト思ヒマス。近頃ノ作業ノ教育方法ヲ見テモ、唯上手ニナラウトイフノデ、唯ソノ技術丈ヲ中心ニ道程ヲ急イデ見タ所ガ、到底清風ニ浴サセルコトハ出來ナイト思フ。

コノ兎ト龜ノ譬ニ付テ思ヒ出サレルノガ、德川家康ノ話デアル。「鳴カヌナラ鳴クマデ待タウ時鳥」トイフ句、コレハ家康ノ一生ヲ歌ツタ句デアルト吾々ハ聽カサレテ居リマスガ、家康自身ガ吾々ニ殘シテ呉レタソノ處世訓ノ中ニモ、「人ノ一生ハ重荷ヲ擔フテ遠キ道ヲ行クガ如シ」トイフコトヲ、先ヅソノ處世訓ノ冒頭ニ述ベテ居リマス全クコレト兎ト龜ノ競爭トハ、實ニ一致シテ居ルノデハナカラウカ、コレヲ以テ生徒ヲ導イテコソ、ソノ苦樂

ノ道筋ガ味ハレルニ相違ナカラウト思ヒマス。重キ荷ヲ擔フトイフコトハ、龜ガ重々シイ足付デ歩ク形トヨク似テ居ル。知識ヲ幾ラデモ輕々シク授ケルトイフ、今日ノ日本ノ教育家ノ態度ハ、全ク兎ソノモノヽ歩キ方ニ似テドウモソノ心中ニハ焦燥ノ氣ガ溢レテ居ル、人格ヲ磨クトイフヤウナ遠大ナル氣分ハソノ中ニハ一寸モ含マレテ居リマセヌ。

實業家ノ人々ガ、成ルベク肝要ナル知識ヲ十分授ケテ呉レト吾々ニ要望シテ居ル點ハ、コノ點ガ呼ビ醒サレテ居ルノデハナイカト思フ。吸入スル所ノ知識ハ、重ク強クソノ人ニ授ケナケレバナラヌ、サウシテ出來得ル丈緩カニ遠キ道ヲ歩カセル氣デ、時間ハユル〳〵ト消化吸收スルヤウニサウシタナラバ、ソノ知識ハ十分ニ働クバカリデナク、色々初メニ擧グマシタ品性ノ缺點ハ、キツト改善サレルノデハナイカトイフコトヲ考ヘルノデス。

前ニモ述ベマシタ通リ歐米ノ方デハ日本程ニ詰込教育ハヤツテ居リマセヌガ、併シ元來學校教育トイフモノガ各學校毎ニ相當ノ人ヲ集メテ劃一的ナ教育ヲシマス關係上、ソレハドウシテモ一方ニ偏スルコトハ已ムヲ得ナイ人ノ個性ヲ見マスト決シテ一樣デハナイ。孔子ハ如何ニ教育ヲシテ居ツタカトイフト、論語ヲ御讀ミニナツタラ分ルヤウニ、ソノ根底ノ個性ニ從ツテ色々ト說明ヲ違ヘ、或ハ例證ヲ違ヘテ指導ヲシテ居リマス。又釋迦ハドウイフ教育ヲシテ居ルカトイフト、澤山ノ經典ガアルトイフコトガ結局人々ノ個性ガ違フノデ、同ジ一ツノ眞理ヲ色々ノ方法ヲ以テ說明サレタ譯デアル。卽チ應病投藥ト稱シテ、病ニ應ジテ藥ヲ盛ラナケレバナラヌ理由カラサウイフ種々ナ說法ヲサレタノデアラウト思フ。

德川時代ニ於キマシテ、山鹿素行ニ依ツテ僅カノ期間教育サレ、實ニ徹底シタ精神ヲ植付ケラレタノニ、アノ四十七士ノ忠臣ガアリマス。

コノ山鹿素行先生ハドウ言ハレテ居ルカトイフト、人ハ各々性格ガ違ツテ居ルモノデアル。故ニソノ性格ヲ十分ニ考ヘテ、習ハシタリ慣レサシタリシテ教授ヲシナケレバナラヌト言ツテ居ル。

ソレカラ又澤山ノ人々ヲ教育サレタ、荻生徂徠トイフアノ有名ナ先生モ、ヤハリ個性トイフモノハ違ツテ居ルカラ、教育トイフモノハコノ個性ヲ見テ施サナイト決シテソノ效果ハ擧ラナイトイフコトヲ示サレテ居リマス。

現在ノ學級教育ハソノ點ガドウモ難カシイ。各異ツタ人々ヲ集メテ、同一方法デ同一ノコトヲ注入シテ、ソノ教育ノ效果ヲ云々シヤウトイフノハ、コレハ隨分無理ガ生ズル。サウスルトコノ形態ヲ採ツテ居ル所ノ西洋諸國モ、ソノ形態カラ生ズル不便不利ハ當然感ジテ居ルノデアリマス。所ガ歐米ニ於テコノ學級組織ノ新形態ハ何時頃カラ始マツタカトイフニ、決シテコレモサウ古イモノデハアリマセヌ。

私ハ英國ノ教育ニ付テ昨日モ二、三申シマシタガ、英國ハ元來保守主義ノ所デアリマシテ、個々ノ學校ノ教育ヲ見マシテモ、例ヘバ**イートン**、**ハロー**、**ケンブリツヂ**、**オツクスフオード**コレ等ノ學校ハ、依然數百年來ノ教育ヲソノ儘今デモ取ツテ居ルノデアリマス。コレ等ガ如何ナル教育ヲ施シテ居ルカトイフコトヲ、吾々教育家ハ

十分參考トシナケレバナラヌ點ト思フ。

コノ**イートン**、**ハロー**ハ日本デ言ツタナラバ、中學カラ高等學校ニ相當スル中等ノ學校デ、コノ學校ヲ卒業シタ者ガ、**ケンブリツヂ**、**オツクスフオード**ニ學ブノデアリマシテ、古キ傳統ヲ今デモ誇リニシテ居ルノデアリマス。

私ハ一日コノ**イートン**トイフ學校ヲ參觀シマシタガ、ソノ廊下ノ壁ニハズツト名士ノ名前ガ書込ンデアル。古クハ御承知ノ、**ウオターロー**デ**ナポレオン**ヲ破ツタ**ウエリントン**ノ名前ガ書込ンデアル、案内ヲシテ呉レマシタ**プロフエツサー**ガ、コレハ**ウエリントン**ガ卒業スルトキニ書込ンダモノデスト説明シテ呉レマシタガ、ソンナ古イモノデスカラソノ建物ナンカハオ寺ニ行ツタト同ジ氣分ガ致シマス。

サウシテ面白ク感ジマシタノハ、ソコニ懲罰ヲスル部屋ガアル。ソコニハチヤント懲罰サレル生徒ガ腰掛ケル椅子ガ一ツアル。サウシテ懲罰サレル生徒ノ尻ヲ叩ク棒ガアル。

日本ノ現代ノ教育家カラ言ツタラ、マルデサウイフコトハ人ノ道ニ悖ルコトダト、眉ヲ顰メルダラウト思ヒマスガ、ソコノ先生ハソレヲ誇リ顔ニ示シテ居ル。コレガ懲罰スル時ノ椅子デアル、棒デアルト言ツテ——私ガ今デモ懲罰スルコトガアルカト尋ネマスト、ヤハリ時々アルト言ツテ居リマシタ。流石ニ古イ學校ダ、日本ニハナイコトダト私ハ考ヘマシタ。環境ガ人ヲ作ルトイフコトハ、昔カラ唱ヘラレテ居ルコトデアツテ、孟子ノ三遷デ

アルトカ、弘法大師ガ高野山ヲ選ンデ日本ニ山嶽佛教ヲ開イタナドハ、コノ環境ノ教育ニ對シテ偉大ナル效果ヲ齎ラスカヲ物語ルモノデアル。

而シテコレハ形式ノ陶冶ガ如何ニ人間ニ必要デアルカトイフコト、照應スルコトデアツテ、**イートン**、**ハラウ**、**ケンブリツヂ**等古キ傳統ヲ有ツ學校ガ、ソレ等ノ傳統ヲ恰モ**ダイヤモンド**ヲ光ラスガ如ク尊重シテ、教育ノ上ニ光ラシテ居ルノデアラウ。斯ウ思ツテ私ハ實ニコノ古臭イ匂ニ感心シタ次第デシタ。

又ソノ教育方法ヲ見マスニ、同ジ年ニ入ツテ來タ生徒ヲ全部寄宿舍ニ入レル。**スポーツ**ヲ中心トシテ精神教育ヲ主トシテ居ルノデアリマス。例ヘバ**ラグビー**ノ部或ハ乘馬ノ部トイフヤウニ、色々**スポーツ**ニ部ガアル。ソノ部ニ**キヤプテン**トイフノガアリマシテ、ソノ**キヤプテン**ニ依ツテ統制サレテ居ル。生徒ハ皆夫々ノ部ニ入ツテ居ル、ソレガ學校デアラウ。

寄宿舍ニハ生徒監ガ居ツテ寢食ヲ共ニシ、起居動作總テ訓育ヲシマス。飯ヲ食フ時歩ク時ノ事マデモ正ス、帽子ハ**シルクハツト**ヲ冠ラセ**モーニング**ヲ被セ、紳士ノ眞似ヲサセテアル。

ケンブリツヂヤ**オツクスフオード**ノ寄宿舍ナドハ、日本ノ　秩父宮殿下ガソノ寄宿舍ニ御入リニナツテモ何等不自由ヲ御感ジナラナイヤウナ、實ニ立派ナモノデアル。七、八人ノ者ガ學生監ト一緒ニ住ツテ、サウシテ飯ヲ食ヒ起キル寢ルニモ、總テ紳士的ノ起居ヲ訓育サレルサウデアル。而シテ協同的精神、團體的精神ヲ**スポーツ**デ

養成サレル。ソノ**チャンピヨン**ハ實ニ絶對的ノ權利ヲ有ツテ居リ、實ニ名譽アル取扱ヲサレテ居ルサウデアリマス。團體生活ハ訓育ノ中心デアツテ、彼等ノ**スポーツ**ハ日本ノ武道ノ如ク、色々ト規矩ガアツテ、彼等ノ精神ハソレデ陶冶サレテ居ルヤウデアリマス。

サウスルト學術ノ教授ハドウナルカ。**イートン、ハロー、ケンブリツヂ、オツクスフオード**トイフノハ職業指導トハ違ツテ精神教育ヲ中心トシテ居リマスカラ職業指導トイフモノハ餘リ尊重サレテ居ナイケレドモ、ソレハドウイフ風ニ教育スルカ。ソレハ丁度日本ノ寺小屋組織ガ斯ウデアツタラウト思ヒマス、

ドウイフ風ニナツテ居ルカトイフニ、コノ**イートン、ハロー**ニハ三年ナリ五年ナリノ在學年數ニキマリガアルサウシテ必ズソノ年數居ラネバナラヌ。寄宿舍デソノ一定ノ年限訓育サレナケレバナラヌ。サウシテ若シソノ期間内ニ所定ノ學科目ガ修了サレタナラバ、上ノ學校ニ入リ得ル資格ガ付ク譯デス。

大學ニ於テ一定ノ學科目ニ**パス**シタナラバ、學位ヲ受ケル資格ガ出來ル譯デス。自分ノ取リタイト思フ學科ヲ自分デ選擇シテ、ソコニ行ツテ勉強スル。ソコヘハ古イ五年モ在學シテ居ル生徒モアリ、今年入ツタ生徒モアルソレデ或ル生徒ガ數學ハ既ニ教ハツテ居レバ、外ノ科目丈取レバ宜シイ。或ル期間内ニ一定ノ定メラレタ科目ヲ自由ニ選擇スル。貼出シテアルノヲ見ルト實ニ嚴重ナ採點ダ。十何點トイフヤウナ點數ガ相當ニアル。考査サレタ科目ガ默目ダトナレバ其科目丈ヤリ直ス。

日本ノ如ク二年ナラ二年全部ノ學科落第スルトイフヤウナコトニハナラヌ。サウイフ風ニ、全科目ヲ各自ガ個性ニ順應スルヤウニ按配シテ修メテ行ク。斯ウイフヤウナ制度ハ日本デヤツテ居ル程ニ無理ガナイ。或ル學科目ハ大變良ク出來テ居ルケレドモ、タツタ一ツ具合ガ惡イタメニ落第サセルトイフヤウナ無理ガ生ジテ來ナイ。

大體日本人ハ家族制度ノタメニ溫情主義デアル。コレガ昔カラ傳ハツテ居ル日本精神デアル。コノ溫情ノ下ニ教育サレテコソ生徒ト先生ノ情誼ハピツタリ結ビ合フノデアラウガ、ドウモ近頃ノ教育ヲ見マスト、ソノ成績考査ガ結局生徒ノ經濟上ノ利害ガ生ジテ來ル。成績ノ優等ノ者ハ社會的ニ優位ヲ認メラレ、落第スレバ一ケ年間ノ在學費用ヲ餘分ニ使ハナケレバナラヌ。

進級的ノ考査ハ直接生徒ノ利害ニ反響スルコトガ多イ。是等ハ日本精神ノ溫情主義カラ言ツタナラバ矛盾スル自然先生ガ生徒ノ考査ヲ嚴重ニスルコトハ段々ト考ヘラレルトイフコトニモナリ易イ。先生ガ考査ヲ嚴重ニシ過ギルト生徒ト先生トノ情誼ハドウシテモピツタリト合ヒニクイ。現在行ツテ居ル劃一的ナ進級法ト日本精神ト相反スルモノト私ハ思ヒマス。

西洋人ノ個人主義ハ實ニ徹底シタモノデアル。コノ徹底シタ實況ヲ歐米ニ行ツテ目擊スルト驚ク。日本人ガ例ヘ個人主義ヲ學ンダトコロデ、西洋人ノ個人主義迄ニ深入リスルハ不可能ダラウ。親ニ孝、君ニ忠トイフ忠孝ノ精神ヲ基調トシテ訓育サレテ居ル吾々ガ、向フノ社會狀態ヲ觀ルト、實ニコレハ獸類ジヤナイカト考ヘラレルコ

トガアリマス。實力主義ノ社會ハ壯年ノ社會デス。親デモ年ヲ取ツタラ子供ガ立派デモ實ニ氣ノ毒ナモノデアル養老院トイフモノガドウシテモ社會的ニ必要トナツテ來ル。兄弟ガ失業シテモ何等特別ノ同情ヲ拂ハナイヤウニ見エル。失業若ガ街頭ニ溢レテ來テ居テモソレ等ヲ世話シヤウトスル親兄弟ガナイラシイ。失業ノ救濟ハ人道的ニドウシテモ社會ノ問題トナル譯デス。日本ニ於テハ、弟ガ困ツタナラバ兄ハ出來ル限リ之ヲ助ケル義務ガアルト思ツテ居ル。出世シテ親ニ樂ヲサセタイトイフノガ幼少ノ子供ノ精神デアル。

向フデハソレガ反對デアル。西洋ハ養老院ノ設備ガ非常ニ完備シテ居ル。或ハ又失業救濟ノ事業ガ非常ニ完備シテ居ル。コレハ社會狀態ガ然ラシムルモノデアツテ、歐米デハドウシテモ救濟ガナカツタナラバ街頭ニ餓死スル人間ガ澤山現ハレテ來ルニ相違ナイ。養老院ガナカツタナラバ姥捨山ガドウシテモ必要ニナツテ來ル。

實力主義ノ社會デハ一番元氣ノアル人ガ一番華美ナ生活ヲスル、徹底シタ所ノ社會思想デアル。

此點ハ宗教ニ含ム思想ガ是等ノ事實ト關係ガアルノデハアルマイカ。私ノ獨斷デハアリマスガ、**キリスト**教ノ趣旨ヲ眞ニ遵奉シテ居ツタナラバ、コノ個人主義ニ到着スルノデアラウ。日本人ガ**キリスト**教ヲ信ズルヤウニナツテモ、何時マデモ親ノコトヲ言ヒ親類ノコトヲ言フノデ、ドウモ本當ノ**キリスト**教信者ニナリ切レナイト、西洋ノ或ル人ガ言ツテ居ルトイフコトヲ聞イタコトガアリマスガ、成程此處ダナト私ハ感ジマシタ。ソレ程徹底シタ個人主義ノ國デアル。實力主義ノ國デアル。サウシタ所ノ學校デ先生ガ嚴格ナ考査ヲシタトコロデ、ソノ生徒ノ心情ニ何等情誼的ノ響キガアルモノデハアリマスマイ。

併シ日本ノ國ハソレデハイカヌ。茲ニ日本ノ先生ニ非常ナル惱ミガ生ジテ點數ヲ中心ニ教育ガ行ハレ易イ教育ノ弊害ガコノ點ニモアルト思フ。

愛ガ基本トナツテ教育サレナケレバナラヌ。若シコノ考査ヲ以テ生徒ヲ教育スル所ノ力トシ、或ハ順位ヲ以テ競爭心ヲ利用スルナラバ、大事ナ協同ノ精神ハ破壞サレ各自ガ個人主義又ハ利己主義ト變リ、實ニ卑怯ナル所ノ精神ニナツテ來ルト思フ。コレハ實ニ重要ナ點デアツテ十分教育家トシテハ考ヘナケレバナラヌ重點デアルト私ハ信ジテ居ル。西洋デハ個人主義デアルカラシテ斯カル教育ヲシテモ思想的ニ教育ガ惡影響ヲ及ボスコトハアルマイ。

近頃歐米デモ學校教育ガ注入ニ過ギルカラ、與ヘタ智識ガ働カナイトイフコトハ能ク認メラレテ來テ居ルヤウデス。此弊ヲ革正スル爲ニ色々ト教育法ガ研究サレ案出サレテ來テ居ル。

獨逸ノ如キハ近來特ニ徹底シタ實物教育ヲ初メテ居ル。ソレハ昔ノ年期制度ニ還ラウトスル傾向デアリマス。詰込カラ啓發教育ニ移ラウトシテ居ル。

立派ナ理性ヲ有ツテ居ル人間ヲシテ、自ラノ理性ヲ十分ニ働カサウ。コレガ卽チ現在ノ動キデアル。ソレガドウイフ形ニナツテ現ハレテ來タカトイフト、產業ノ學校、生產學校デアルトカ、或ハ體驗學校デアルトカ。今迄

ニナイ組織ノ學校デアリマス。

川崎造船所ノ東山學校ノ如キモソノ一ツノ現ハレデアリマス。

コノ序ニ體驗教育トイフ要旨ヲ述ベテ見タイ。

「體驗トイフ言葉ノ一般的意味ハ、親シク目擊シ遭遇シテシミ〴〵ト味フコトダ」トシテアリマス。自ラ行ヒ自ラ體驗スルコトヲ意味シテ居ルノデアリマス。コノ體驗トイフコトヲ教育ノ上カラモウ少シ深刻ニ味ハセタイ、卽チ歴史上ノ過去ノ事件、或ハ見學ニ於ケル所ノ事物、ソレ等ハ親シク目擊スルコトハ出來ズ、又ハソノ儘反復スルコトハ出來ヌデモ、サウイフコトヲ同感シ同情シ得ルヤウニ體驗サセタイ。左樣ニスレバ智識ガ腹ニ入ツテ來ル。サウスルト體驗トイフモノハ知識ノ働キデナイ意識ノ働キトナル。意識ノ中ニソノ知識ヲ叩キ込ム迄體驗サセタイ。サウシテ理性デソノ知識ヲ溜メテ置カナイデ、力トシテ置ク。サウシテソノ知識ガ具體的ニ或ハ物事ヲ直觀シ、又ハソレガ全體ノ働キトナツテ出テ來ルノニ、ソノ知識ガ働キノ中心トナツテ出テ來ル。サウスルトソノ場合ニ現ハレタソノ人ノ鑑賞デアルトカ、識別デアルトカイフコトハ、決シテ教室デ教ヘル合理トカイフヤウナ理性的ノモノデナクテ、情意的ニソノ知識ガ現ハレテ來ル。卽チ昔カラ吾等ガ言フ知識ヲ腹ニ入レルノデアル。

武道ヤ或ハ碁將棋等ノ知識ガ、相手ノ行動次第デ色々ノ感ジガ立所ニ現ハレテ來ル。コレハ理屈ジヤナクテドウモソウシナケレバナラヌヤウニ知識ガ行動ニ移ツテ來ル。

斯ウイフ教育ヲドウシテ行フカ、コノ體驗教育者ガ言フノニハ、今迄ノ思考ヲスル教育、卽チ理性ヲ中心トスル方法ニ一歩ヲ進メテ、體驗サスル行動的ノ方法ヲ教育ノ上ニ重ンジテ、サウシテ法則ヤ概念ヲ頭ノ底ニチヤント、潜メテ置イテ、サウシテ行動サス。色々ノ行動ニ作用スルニ連レテ、知識ハ段々ト力ニ變ヘテ行クノデアルソノ爲ニハ色々ノコトヲ見セ、色々トソノ方策ヲ動カシ、又情意ノ中ニ叩キ込ンデ了フヤウニサセロ。斯ウイフ風ニ說明ヲシテ居リマス。併シ不幸ニシテ吾々ハ未ダコノ體驗教育ノ實際ヲ見テ居リマセンノデ、玆ニハ唯ソノ本ノ說明シテ居ル所ヲ述ベル迄デアリマスガ、私ハ古來ノ日本教育ニ此ノ體驗教育ヲ見ルノデアリマス。

弓道ヲ學ンダリ、武道ヲ學ンダリ、藝道ヲ學ブソノ教育法ト體驗教育トハ、何等變ルコトハナイノデヤナイカ併シ我ガ藝道ヤ武道ノ教育ニハ品性ノ陶冶迄取入レテアル。行動ノ道程ニ禮儀作法ヲ嚴シク取入レテ、人格ノ修養ヲ大事ニ取扱ツテ居ル。昔ノ教育ハ眞ニ味フベキモノガアル。

吾々ノ祖先ハ人道的教育ト學術的教育トヲ實ニ好イ按配ニ合一シテ教育サレテ居ル。コノ昔ノ教育ヲ吾々ハ十分ニ參考ニシナケレバナラヌデヤナイカ。色々ノ方面デ日本ニ還レ日本ニ還レトイフコトガ近頃主張サレテ居リマスガ、私ハ十數年前ニ歐米ヲ廻ツテ個人主義ナル外國人ノ思想ハ日本ニハ入レラレナイモノダト痛感シタ。

今日多クノ人々ガ日本主義ニ還レトイフノハ當然デアル。コレト同樣私ハ教育ノ方法ニ於テモ日本ニ還ルベキ

多クノモノガアルト思フ。吾々祖先ガ吾々ニ與ヘテ呉レタ所ノコノ非常ニ立派ナ教育――皆サン試ミニ茶ノ湯ヲヤツテ見タラ宜シイ。茶ノ湯ハ非常ニ何ンダカ現在ノ人カラハ優柔不斷ナ女子供デモヤル遊ビノヤウニ思ハレル人ガ多イト思フガ、決シテサウデハナイ。アノ太閤秀吉ハコレヲ以テ彼ノ身心ノ修養ニ資シタトイフデハナイカ

人ハ進退坐作總テノ行動ガ調整サレルト、ヤガテ精神モ調整シ清風ニ浴スル氣分ガ情意ニ湧イテ來ル。此點ヲ重ンジテ我藝道其他ノ教ヘ方ニハ、最モ大切ニ進退坐作ノ作法ヲ取扱ツテアルノダト私ハ思ヒマス。人格教育ノ問題ニ對スル意見ハコレ位ニシテ置キマシテ、コレカラ勤勉ナル人ヲ如何養成スルカトイフ私ノ意見ヲ述ベマスニ勤勉ナル國民ヲ養成スルコトハ現下ノ國情ニ照シテ非常ニ必要ナコトデアル。然ラバ如何ニシテ勤勉ナル國民ガ出來ルカ、果シテソレハ教育的ニ可能カ。

二宮尊德翁ハ報德宗デ勤儉力行ヲ盛ニ唱導サレタ方デアル。私ハ翁ガ如何ニ勤儉力行ノ氣分ヲ作興サレタカソノ心得ヲ二、三申述ベテ見マス。

勞働ノ神聖トヨク申シマスガ、中々吾々ニハ勞働ノ神聖ガ腹ノ中ニハ入ラナイ。特ニ學校ノ教育ヲ受ケテ打算ニ長スル者ニハ、第一勞働トイフ言葉丈デモ氣ニ入ラヌ。何ダカ自分ノ矜持ヲ害サレル氣持ガスル。日本人ハ犧牲奉公ノ念ハ強イ。之ニ訴ヘ勤儉力行ヲ人道的ニ取入レナケレバ到底教育ノ效果ハ期セラレナイヤウダ。

二宮尊德翁ハ國民ニコノ勤勞精神作興ニ、報德宗トイフ實ニ高遠ナル犧牲奉公ノ念ヲ說イテ居ラレル。翁ハ報

德ノ訓ヲドウイウ風ニ說カレタカ。

天照大神ハ一ツノ田モナク一ツノ穀物モ產シナイ豐葦原デアツタ所ノ我國ヲ、勤勞ニ依リ御開キ下サツテ瑞穗ノ國トナシ給フタ。吾々ガコノ有難イ御米ヲ頂戴スルコトノ出來ルノモ、コノ天照大神ノ勤儉力行ノ御德デアル吾々ハ勤儉力行ヲ世々相繼イデ無窮ニ讓ルベキデアル、トイフノガ二宮尊德翁ノ訓ノ中心點デアル。

勤儉力行ハ日本開闢ノ精神デアルトシテ勤儉力行ヲ奬メ此ノ精神ヲ受繼グノガ報德デアルトイフノデアル。

至誠卽チ神デアル。實行ハ勤儉デアル。勤儉力行ハ卽チ神聖ナル事業トシテ行ハナケレバナラヌトイフノガ先生ノ報德宗デアル。

「天道ハ自然ニ行ハル、道ナリ、人道ハ人ノ立ツル所ノ道ナリ。人道ハ努メテ人力ヲ以テ保持シ、自然ニ流動スル天道ノ爲ニ押流サレヌヤウニスルニアリ。天道ニ任スルトキハ、堤ハ破レ川ハ埋リ橋ハ朽チ家ハ立腐レトナルナリ人道ハ是ニ反シ、堤ヲ築キ川ヲ浚ヘ橋ヲ修理シ屋根ヲ葺キ雨ノ漏ラヌヤウニスルニアリ。身ノ行モ亦此ノ如シ」ト勤勞ノ人ノ道タルコトヲ高調サレタ。

翁ハ勞働卽チ勤勞ノ神聖ナル所以ヲ高調シテ左ノ如ク說明シテ居ラレル。

我道ハ至誠ト實行ノミ、故ニ鳥獸、草木ニテモ皆及ボスベシ。況ヤ人ニ於ケルヲヤ、故ニ才智辯舌ヲ尊バズ才智辯舌ハ人ニハ說クベシトイヘドモ、鳥獸草木ヲ說クベカラズ。鳥獸ハ心アリ或ハ欺クベシトイヘドモ、草木ヲ

バ欺クベカラズ。夫レ我道ハ至誠ト實行トナルガ故ニ、米麥蔬菜瓜茄子ニテモ葡萄ニテモ繁榮セシムルナリ。假令智謀孔明ヲ欺キ、辯舌蘇張ヲ欺クトイヘ共、辯舌ヲ振ツテ、草木ヲ榮エシムルコトハ出來ザルベシ。故ニ才智辯舌ヲ尊マズ、至誠ト實行ヲ尊ブナリ。古語ニ至誠神ノ如シトイヘ共、至誠ハ卽チ神トイフモ不可ナカルベキナリ。凡ソ世ノ中ハ智アルモ學アルモ、至誠ト實行トニ非レバ事ハ成ラヌト知ルベシ。

我々ハ生徒ニ勤勞ノ精神ヲ吹込ムニハ、翁ニナラヒ、此信念ヲ以テ導カナケレバナラヌ。斯カル尊キ信念ナク、只打算的ニ勞働ヲ導イタナラバ、其品位ヲ傷ツケ、其性格ヲ曲ゲル虞レガアルノデ、翁ハ斯クモ親切ニ勞働ノ神聖ヲ說カレタノデアリマセウ。

實業學校ノ卒業生ガ、偏屈デアルトイフ批評ガアルノハ、實業ヲ嫌々ナガラ押付ケラレテ居ルカラデハアルマイカ。

勤儉力行ニ精進サセルタメニハ、我々教育家ノ三思スベキ點デアラウ。コレカラ少シ、英國ノ商船學校ノ教育ニ就テ述ベテ見タイト思ヒマス。海ヲ知ラヌ人々ヲ集メテ海員ヲ養成スル學校ガ、英國ニハ三ツアリマス。卽チ**ウースター**、**コンベー**、**パンポーン**デ、中ニモ**ウースター**ガ先ヅ代表的ノモノデ、日本デ云ツタラ地方ノ商船學校ニ相當スルト思ヒマスカラ、コノ**ウースター**ニ就テ話ヲシマセウ。

コレハ東鄕元帥ガ曾テ勉强サレタ、洵ニ名譽アル學校デス。校舍ガ立派ダ、生徒ノ數ガ多イ、教育ノ設備ガ好イ、コレハ立派ナ學校デアル。斯ウイフ風ニ批判スルノガ普通デアル。或程**ケンブリッヂ**當リニ行キマスト、校舍ハ確カニ立派デアル。成程ト感心スル。コノ**ウースター**ニ行ツテ私ハ實ニビツクリシタ。

古イ**ネルソン**時代ノ帆船、大キサハ千二三百噸モアリマセウカ、小サナ船デアル。形ヲ見テハ御粗末ナモノダ私ハ或人ノ紹介デ參リマシタ。前以テ通知ガシテアリマシタノデ、岸ニハ迎ヘノ船ガ來テ居リマシタ。船ハ生徒ガ漕イテ居リマス。船ニ着キマスト、舷門ハ生徒ガ守ツテ居ル。**キャプテン**ハ船ノ艫ノ方ニ住ツテ居リマシテ部屋ニハ妻君モ一緒ニ居ル住宅ラシカツタ。綺麗ナ花ナドヲ置イタ書齋ノ一隅ニ、椅子ヤ卓子ヲ置イタ應接間デ兎角ノ挨拶ヲ濟マセ、船內ヲ案內シテ貰ヒマシタ。船ニハ中甲板ガアツテ、ソコヲ簡單ナ間切デ仕切ツテ教育ヲシテ居リマシタ。授業ガ終ルト間仕切ハ取外スモノラシイ。コノ學校デハ航海術ハ數學ノ先生ガ教ヘテ居リマス餘リ專門的ノ教育ヲヤラナイデ、教室デハ普通學ヲ主トシテ教ヘテ居ル。

船ニハ船長、一等運轉士、二等運轉士等ノ乘組員ガアリ、是等ノ人々ハ船務ヲ執ルト同時ニ、生徒ノ訓育ヲ司ツテ居ラレル。コノ船務コソハ生徒ニ慣海性ヲ植付ケル重要ナ役目デアツテ、船長ハ船ヲ殆ンド住宅トナシ、晝夜ヲ分タズ船務ヲ執行シ、生徒ニ海員性ヲ植付ケルノガ此ノ學校ノ大事ナ役目ノヤウダ。

生徒ハ國民教育ヲ終ツテカラ、日本ナラバ高等小學ヲ卒業シテカラ、此ノ學校ニ入學スル、此ノ學校ハ外見コソハ、小サナ古船デスガ、生徒ノ學費ハ非常ニ掛カル學校デアリマス。一月ニ約十八ポンド位掛カルソウデス。

日本ノ金ニシタナラバ丁度二百圓位デスカラ、ドウシテモソコヘ入ル子弟ハ富豪ノ子弟デアリマス、ドウシテソンナニ學費ガ掛カルカソレハ紳士教育ヲヤルカラデアリトス。

船務ニ依リ慣海性ヲ植付ケル傍ラ、紳士的行儀作法ヲ養成スルノデス。此學校ハ對岸ニ大キナ**ローン**ノ生ヘタ運動場ト、立派ナ倶樂部ガアリマス。課業ガ終ルト倶樂部ニ入リ、運動ヲナシ、紳士ラシキ生活ヲサセルノデアリマス。

此學校ヲ卒業シテモ、何ニモ特權ハ貰ヘナイガ**キユナード**ヤ**ピーノー**ナドノ客船ニ來ルノハ、多ク是等ノ卒業生ダソウダサウデス。

免狀ハ普通ノ人ト同ジヤウニ、試驗ヲ受ケテ段々ト上ニ行ク、ソノ試驗ヲ受ケルタメノ準備ノ學校ハ、別ニアリマス。ソレハ恰モ大阪ノ府立海員學校ト同ジヤウデス。

コンベーモ見マシタガ**ウースター**ト大同小異デス。

要スルニ英國ノ海員養成ノ重點ハ、海員性ヲ叩キ込ムノガ學校教育デス。學校デ授クル智育ハ、日本ノ地方商船ヨリ非常ニ劣ツテ居ルト思ハレマス。足ラナイ分ハ卒業後補充スルノデス。

英國ノ海員ガ世界ニ秀デテ居ルコトヲ認ムルナラバ、我々ハ**ウースター**ガ、過去何十年ノ間取ツテ動カヌ教育法ヲ學バネバナラヌ。

十數年前ニ私ハ視學委員ヲ命ゼラレ、岡山、弓削、廣島、粟島、大島、コノ五校ヲ視學シタルコトガアリマスガ、日本デハ英國ノヤウニ、富裕ナ子弟ハ商船學校ニハ入學シナイ。出來ル丈學費ガ掛カラナイヤウニシナケレバナラヌ。ソノ爲ニ多クノ商船學校ハ、困苦缺乏ニ堪エルヤウニ訓練ガ目立ツテ居タ。此點ハ日本ノ特徴デアツタ。困苦缺乏ニ堪エルト、自然學費モ掛カラヌ。成ルベク學費ノ掛カラヌヤウニトイフ思ヒ遣リガ、諸訓練ニ表ハレテ居タ。

教授上ノ設備ハ各學校共貧弱デアツタ。コレヲ立派ナモノニシヤウト、生徒ノ作業ハ半バソノ方ニ向ケ。從ツテ訓練ハ眞劍デアツタ。生徒ハ協同シテ家ヲ繕ヒ、或ハ古イ器具機械ヲ手入レシテ、教具ニスル等、學校ノ榮エルコトヲ樂シミニ、先生モ生徒モ勤儉力行シテ居ルヤウニ見エタ。斯カル學校ヲ出タナラバ、實行力ニ富ンダ立派ナ海員ガ出來ルダラウト考ヘラレタノデアリマス。

之ニ反シ、ソノ頃教室ニ於ケル教授ノ實狀ハ、洵ニ不充分デアツタ。教科書ハナシ、參考圖ハナシトイフ風デ生徒ハ嘸理解ニ苦シムダラウトモ思ハレタガ、一面先生モ生徒モ、自ラ教科書ヲ書キ、圖ヲ寫ストイフ風デ、學校ヲ擧ゲテ訓練ニ努力シ、手カラ知識ヲトイフ傾デアツタ。斯カル勤儉力行ハ、校長初メ職員ノ獻身的ノ努力ノ賜物デアツテ、熱ト力ノアル海員ガ、多數養成サレタニ違ヒナイ。又我國ノ社外船ガ、激シイ競爭ニ打勝ツテ、今日ノ發展ヲ遂ゲタ一ツノ力デアラウ。

一昨年再ビ視學委員ヲ命ゼラレテ、粟島、弓削ノ兩校ヲ視察シマシタ。十數年振リニ來テ見ルト、教育ノ狀況ガ丸デ轉倒シテ居ル。學校ノ設備ハ相當ニ完成サレタ。教授又ハ實習ノ設備教科書等、大體完備シテ居ル。日課表ヤ時間割等ヲ見ルニ、訓練ノ時間ガ著シク減ジテ居ル。校内ニハ昔ノヤウニ生徒等ノ勤儉力行ノ姿ガ認メラレヌ。普通ノ中等學校ト何等異ナル樣ガナイ。先生モ生徒モ智育ニ專念シテ居ル有樣デアル。教室デ授ケル知識ノ分量ハ、教科書カラ判斷スルト、大量ナモノデアル。先生ノ說明ハ要領ヲ得テ居ル樣デアルガ、生徒ガ果シテ咀嚼シ得ルカ疑問ノ點ガ多イ。校内ノ生徒ニ眼鏡ヲ掛ケタモノガ多イ。體格ガ惡イ、結局商船學校ノ教育ハ、勤儉力行ノ體驗教育カラ知識第一ノ注入教育ヘノ轉換ガ、十數年ノ變化デアツタト見エル。

然ラバ海運業ハ十數年間ニ如何ニ變遷シタカヲ見テミタイ。

最近ノ我新造船調ヲ御覽下サイ。大正十五年頃マデハ、十五又ハ十六**ノット**位ガ高速船ノ部ニ屬シタモノデアル。卽チ大正十五年ニ竣工シタ**モンテビデオ**丸、**ラプラタ**丸等ハソノ頃ノ優秀船デアツタ。

其頃普通ノ貨物船ハ大抵、十二又ハ十三**ノット**位デアツタソレガ昭和七年カラ八年ト段々ト進ンデ來マスト、昭和七年ノ**ウスリイ**丸ガ十八**ノット**、昭和八年ニ七隻出來タ七隻ノ中デ、十八又ハ十九**ノット**ガ四隻アリマス。而シテ何レモ貨物船デアル。小牧丸ハ十九**ノット**半、天城丸ガ十八**ノット**、北海丸ニ南海丸ハ十八**ノット**半デアル。昭和九年ニハ十八**ノット**以上ガ、俄然十隻ニ增加シテ來マシタ、何レモ貨物船デアル。長良丸、極東丸、東亞丸ハ十九**ノット**デアル。今迄十九**ノット**トイフノハ、客船ニモ日本ニハ指折リ數ヘル程シカナカツタ。極東丸ト東亞丸トハ飯野商事有所ノデアル云ハバ社外船デアル。今マデ汽船會社トシテ左程名ノ知レナカツタ社外船デサヘ、斯ウイフ高速船ヲ造ルヤウニ、時代ハ急激ナ變化ヲシテ居ル。然ラバ斯ウイフ船ガ、海員ノ上ニ如何ナル利害ガ現ハレテ來ルカ、斯ル船ヲ港ノ中デ一時間デモ餘分ニ碇泊サシテ置クコトハ、營業上非常ナ損失デアル。會社ハ出來得ル限リ港ニ碇泊サセヌトイフコトニナリマス。三菱商事デノ話デスガ、此會社デハ一年ニ三百日航海ヲサセテ、六十五日ノ碇泊ガ見積ツテアル、ソノ内二十五日位ガ修繕デ、殘リノ四十日位ガ**アンカー**シタ時間デアル。丸々一晩泊ルトイフ港ハ稀デアルトイフコトデアル。

機關ノ進歩ニ連レテ乘組員數ハ減少シ、碇泊日數ハ少イトイフノデハ、海員ノ休養問題ハ、體力ト共ニ重大ナル考慮ヲ拂ハネバナラヌ時機トナツテ來マシタ。時勢ノ進歩ハ激シイ。海運ハコノ數年段々ト發展ノ情勢ニアリマス。世界ノ貿易卽チ、世界產業ノ動キハ、餘リ增加シテ居ラナイノニ日本ノ海運ガ段々好況ニアルノハ、日本ノ產業ガ段々發展シタ結果デアル。ソノ事實ノ中ニハ、相當海員ノ日常生活ノ上ニ、餘分ナ重荷ガ加ハツテ居ルコトハ當然デアラウ。又船ニハ定員ガアリ、且ツ總テ海運業ハ世界的ノ計算ニ從ハネバナラヌトスレバ、斯ル境地ニ身ヲ投ズル、未來ノ我海員ヲ養成スルニハ、初メカラコノ點ニ關シ、相當ノ自覺ヲ促シテ「コノ重壓ニ堪エ得ルヤウニ教育シナケレバナラヌ」卽チ現代ノ海員教育ハ、十分ニカヽル重壓ニ堪エ得ルヤウニ、ソノ身體ノ訓

練ヲ第一義トシ、社會ノ進歩ニ應ズル丈ノ知識ヲ、確實ニ備ヘサセテ、海國日本ノ進運ニ殉ズル氣魄ト、犧牲奉公ノ精神ノ下ニ、至誠實行ヲ主トスル、卽チ勤儉力行ヲ主トスル教育ガ、最モ必要デアルト思フ。

私ノ講演ハコレデ終リマス。御聞キ苦シキ點モ多々アツタコト、思ヒマスガ、ソノ點深ク御詫ビ申シマス。

昭和十三年一月二十九日　印刷
昭和十三年一月三十一日　發行
〔非賣品〕

航海練習所
電話文部省内三五五

東京市神田區西神田一ノ九
印刷者　大島秀一

東京市神田區西神田一ノ九
印刷所　太陽印刷株式會社
電話九段(33)〈二一一四番 三三八六番

297
79

終

日本標準規格A5